海軍少將井手元治校閲

軍擴の嵐

海軍協會兵庫縣支部刊行

特 232
274
33

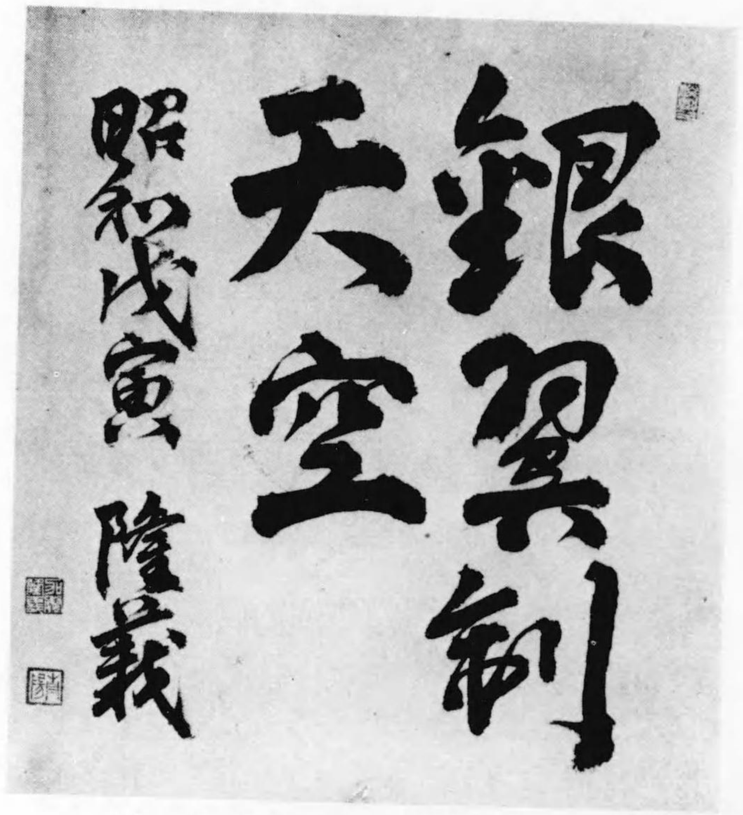
始

特232
274

平板分類

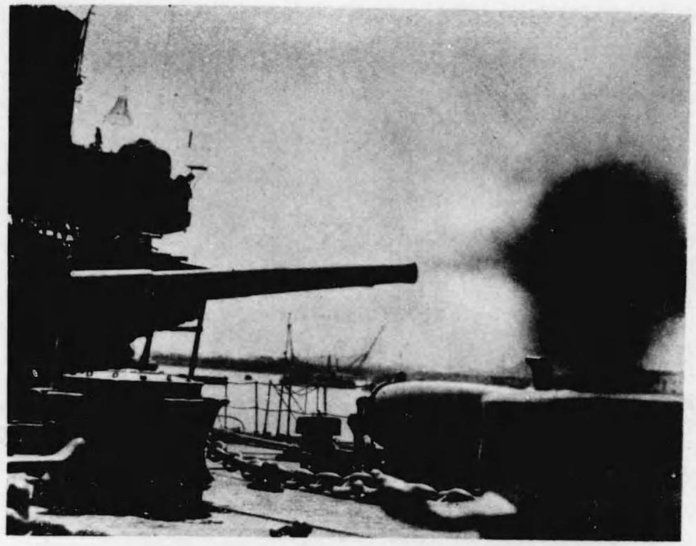
173

昭和十四年 帝國圖書館

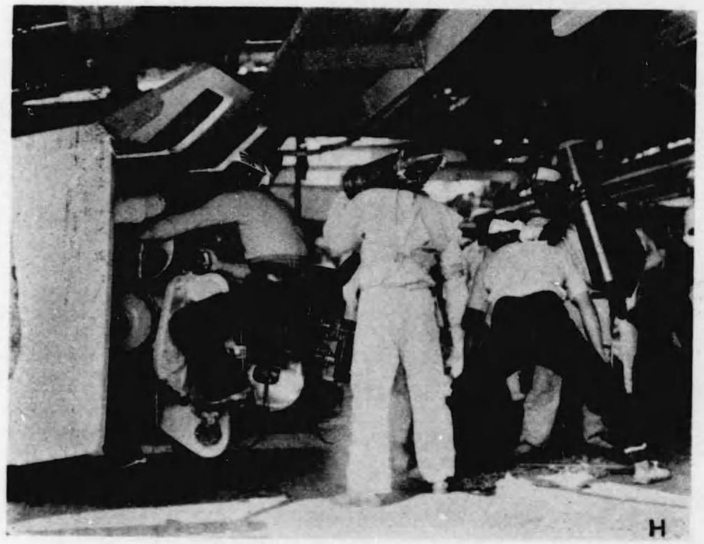


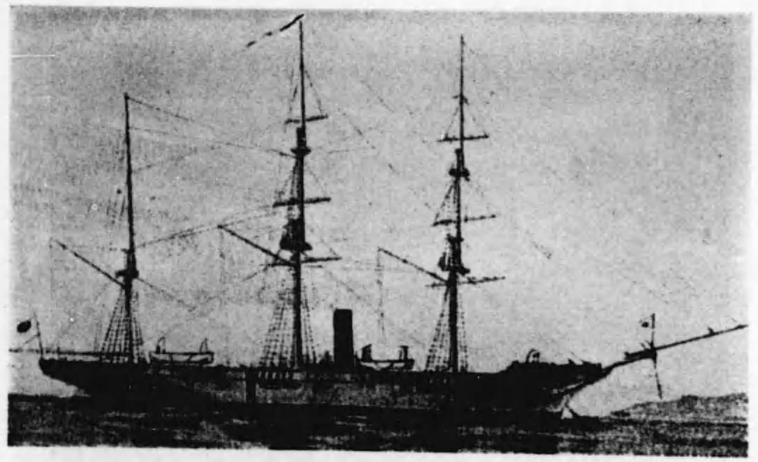
軍事參議官海軍大將子爵　加藤隆義閣下題字

海軍少將　井手元治閣下題字

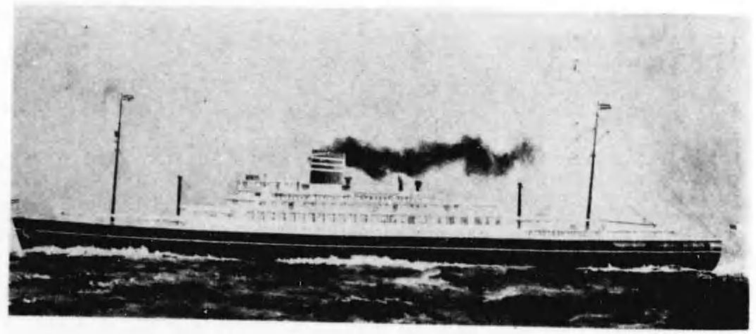


々刻は機戰 .にか鮮色旗艇戰の上橋 .火砲るた々閃 .聲砲るた々股
共 .戰奮の員砲副寸六は圖下 .那刹の射發砲主吋八は圖上 .る移に
二第時常役戰露日 .るあで時一の戰酣雲用艦旗るけ於に海上次今に
cずへ義だ未氣意しりた力主驗艦

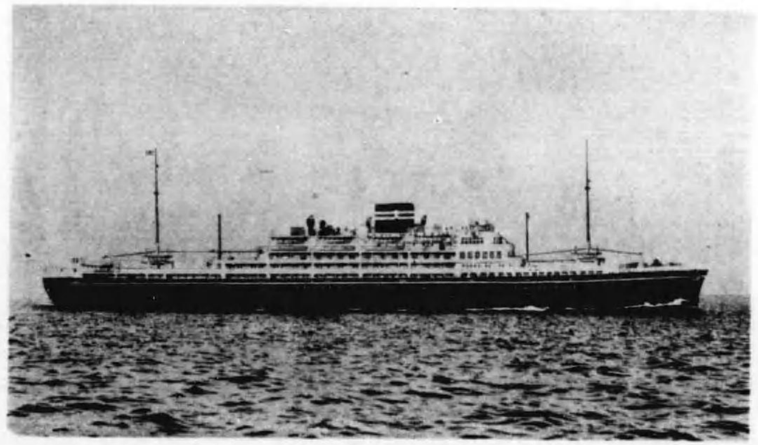




ゝ臨威ゝ政安年三政安年三政安年三



海の界世。す制を富の界世はのもるす配支を海の界世
旗艦軍のそ、せとんせ配支を力軍海るな大強づ先はせとと力軍海るな大強づ先はせとんせ配支を
等我や今、ぬらなはねた俟に躍活の隊船商ゝるら護に
君に洋海大七、にゝまのそを姿の本日渤躍は隊船商の
會船郵本日は圖上、る居てれらせ備整と々着くべす臨
阪大は圖下。（噸百五千六萬一）丸田新船秀優造新社
の（噸千三萬一）丸たちんせるあ船秀優造新社會船商
像想の後工機は寫のこ、す屬に中造建に共、で姿雄
てし造建を船秀優てつ綴が社各もに他のこ。るあで圖
。るるのは日本國民として強い誇を感ずる



序

歐洲大戰後、列强は幾度か會議を開き、條約を結び、世界の平和を維持せんとした、然れどもそれが常に不合理なる手段に依りたるため、眞に安定したる平和を確立する能はずして今日に至つたのである。今や世界大戰の創痍漸く癒えんとするに及び、今迄壓迫されたる者は壓迫したる者に對し現狀を打破して以て各〻自國の向上繁榮を策し、後者は又强く之に抗して以て互に相讓らざるに至つた。故に各國の戰時體制さへ整へば直に以て第二の世界大戰勃發を見るやも計り難き形勢となれり。即ち『スペイン』問題生じ、『チェッコ』問題起り之を續りて列强は合從連衡協同反目の度愈〻加はり、爆發の危機益〻深くなるに至つたのである。

そこで、假令一時的に鎭靜することありとするも、持てる國と持たざる國の爭は遂に止む時なかるべく、是に於て持てる國は他に先んじ、其の軍備の擴充を企てゝ自己を擁護せんとし、他の各國亦之に追隨し、今や世界を擧げて遂に海軍々備擴張の嵐を捲起すに至つたので

ある。

此の時に當り、支那事變勃發し蔣政權は第三國の援助を藉りて益〻抗日氣勢を揚げ、事件を擴大し、我をして遂に大聖戰を起すの已むなきに至らしめた、然るに彼いまや廣東漢口の據點をさへ失ひ、四百餘州を逃廻るに汲々たるの現狀に陷りたるにも拘らず、依然第三國が之を支援しつゝあるは何の爲であるか、これ我が國策たる長期建設に國力戰力を損耗せしめ、彼等が企圖せる海軍々備の擴張成るや其の機に乘じて積極的行動に出で、我に壓迫を加へんとするの意圖に外ならぬものと信ずる、吾人は能く此の情勢を洞察して、長期建設と將政權の壞滅以外に、對列强海軍々備問題を重視し、之に備ふるの大決心あるを要すべきである。

滿洲、上海兩事變以來、國際關係錯綜の裏に、國策及び聖戰の遂行が至極順當に進捗しつつあるは、默々として我が海軍力が太平洋上に儼存しあるに依るの事實を國民は寸時も忘れてはならぬ、それと共に將來の長期建設には、從來よりも一層强力なる海上威力の存在を是非必要とする點も亦同樣である。一九四一――二年は、これ太平洋上に於ける第三國海軍軍備が一應完成する時である。此の時こそ、より大なる危機の到來することを覺悟すべきである。

海軍協會々員檜山氏、『軍擴の嵐』と題するものを草して之を示す、就いて見るに、時局の遠因近因と併せて其の變遷移推を平易に寫し、招來せらるべく豫想さるゝ帝國の難局を說き、海軍々備充實の急務と海防精神發揚の要を力說し、能く盡くす所あるを見る、時局柄大に參考とするに足る。

一言以て序とする次第である。

昭和十三年十一月

海軍少將　井手元治

軍擴の嵐

題字　寫眞

序

目次

一、緒　言……（一）
二、支那事變を繞る國際情勢……（五）
三、支那事變の聖戰なる所以……（八）
四、列强果して挑戰し來るか……（一〇）
（イ）ソビエート聯邦……（一三）
（ロ）イ　ギ　リ　ス……（一四）
（ハ）ア　メ　リ　カ……（一五）
五、世界列强の建艦狀況……（一七）
（イ）イ　ギ　リ　ス……（一九）
（ロ）ア　メ　リ　カ……（三一）
（ハ）フ　ラ　ン　ス……（三九）
（ニ）ソビエート聯邦……（四二）
（ホ）イ　タ　リ　ー……（四五）
（ヘ）ド　イ　ツ……（四六）

（ト）そ　の　他……（四八）
（チ）結　言……（四九）
六、太平洋を圍繞する各國海軍根據地……（五一）
（イ）イ　ギ　リ　ス……（五四）
（ロ）ア　メ　リ　カ……（五八）
（ハ）フ　ラ　ン　ス……（六一）
（ニ）ソビエート聯邦……（六一）
七、列强の志す太平洋制覇戰……（六二）
八、確保せよ太平洋の制海權……（六八）
九、戰史や學理に現れたる劣勢海軍の敗因……（七四）
一〇、醒めよ歐米列强……（八〇）
一一、今次事變に於ける帝國海軍の活躍……（八六）
一二、砲　後　の　人……（八九）
一三、來れ海軍協會へ……（九四）
一四、語を寄す同胞諸賢……（九五）
一五、結　論……（一〇〇）

大君のみことかしこみ磯にふり
うのはらわたる父母をおきて。

（萬葉集）

軍擴の嵐

一、緒言

西暦一九二一年十一月十二日、ワシントン市コンチネンタル・メモリアル・ホールに於て開催せられた日英米佛伊五ヶ國海軍々備縮少會議の結果、英米の五に對する一・七五の比率を與へられました佛伊兩國は、世界大戰の創痍未だ癒えず、止むなく滿腔の不平を忍んで之を承服せねばならなかつたのでありましたが、越えて一九二七年六月ジエネヴに於ける第二次軍縮會議や、一九三〇年ロンドンに開催された第三次軍縮會議の招請に對しましては、何れも冷やかなる眼を以て之を迎へ、

「主力艦の劣勢を補ふには補助艦が必要だ、第一我々には縮少すべき程の補助艦を持合はせて居ない」

と云ふやうな意味を表明し、其の參加を拒絶してしまひました。

殊に伊太利の鐵血宰相ムッソリーニの如きは、

「外交官の佞辯諛辭よりも、軍艦や大砲の方が遙かに多くの事を辯ずる能力があるものだ」

と喝破して、國民の前に軍備の一日も忽にすべからざる由因を說き、更に、

「劣勢比率に依る海軍力の缺陷は、之を空軍を以て補はねばならない」

伊太利の空は、やがて飛行機の翼で覆うて見せる」

と決意の程を仄めかし、爾來海空軍の建設に鋭意努力を續けて來たのでありましたが、數年の後、エチオピア遠征の事が起りますや、英國は佛國と協調し、南阿に於ける自國權益を擁護せんがためホーア・ラヴアル案を作製提示致しましたけれども、之は伊太利の容るゝところとならなかつたので、遂に國際聯盟を利用し、侵略者なる名の下に對伊經濟封鎖を斷行して、百隻に餘る大艦隊を地中海に集結し、威嚇的態度に出でました。

當時、之に一脅を與へたムッソリーニは、

『斯くの如き英國の態度は、伊太利に對する宣戰と解釋するぞ、地中

海は浪が靜かだから英國艦隊の墓場には丁度好いだらう、モルタ島は風景がよいから英國艦隊全滅の記念碑はそこへ建てるが好い！

と豪語し、示威的大演習を擧行して、英國艦隊の眞近に潛水艦をポカリと浮き揚がらせたり、空を壓する空軍の精鋭を亂舞させたりして彼等の心膽を奪ひました。

之に怖れをなしたものかどうかは知りませんが、さすがのグランドフリートも、昔日の面影亦視るべき由もなく、蒼忽として地中海を去つたのでありました。

伊太利海軍十年の努力と苦節は茲に酬いられ、遂に一發の砲彈も放たずして大英國艦隊を壓伏し、祖國の急を救ひましたのみならず、大局に於て、暗澹たりし歐洲の風雲をも未然に吹晴らすことが出來たのであります。

斯くの如く、強力なる軍備の存在が戰爭の慘禍を未然に防止し、人類の讃仰する平和と人道との爲に絶大な貢獻を致しました事例は、敢へて英伊葛藤の場面を描きませんでも、我々日本人自身の手に綴り來つた光榮ある歴史の頁の中に、燦として輝いて居るものがあることを忘れてはなりません。

昭和六年九月十八日の夜半、支那兵に依つて點火されました彼の滿洲事變當時、日本の勃興と發展とを好まぬ歐米列强は、事毎に我等を非難し、世界の對日感情惡化に努め、國際聯盟は、正當なる我が主張に對してすら耳を藉さずして孤立に陷れ、遂には經濟封鎖を以て壓迫せんとするに至つたのであります。

殊に米國の如きは不戰條約及び九ヶ國條約に違反するものとなし、或は我を侵略者なりと臆斷し、國際聯盟と協力して日本膺懲の手段に訴へんとさへ致したのであります。

我が忠勇なる將兵が北滿の曠野に於て、上海の市街に於て、祖國の爲に應戰してゐる時、恰も米國の首府ワシントンに於ては、英國との間に對日經濟封鎖斷行に關する交渉の最中でありました。

國務長官スチムソンは、海軍作戰部長ブラット、海相アダムスの兩氏を招き、

『對日經濟絶交が實現するならば、それは單なるボイコットのみには終らないであらう』

と暗に對日開戰を示唆し、其の意見を求めたのでありますが、さすがにブラット大將は米國海軍の主腦者だけありまして、東洋の海上を嚴然と守護してゐる日本海軍の威容に想到し、今は開戰すべき時機に非ざる所以を懇々と說き含め、一方ホワイトハウスにフーヴア大統領を訪れて、自己の抱持する意見を率直に述べ、

『日本と一戰を交へると云ふ考へは無謀も甚だしい、米國艦隊はいま日本海軍と戰ひ得る狀態になつてゐない、國務省は經濟斷交を目論で居るらしいが、それは直に開戰を意味する、然も米國は、日本と戰つて絶對に勝算は無い』

旨を進言し、同席せるアダムス海相もハーレイ陸相も、同樣の見解を以て、スチムソンの無謀を誡め、之に反對致しました結果、遂に國務省に命じて對日經濟絶交を思ひ止らしめ、斯くして太平洋上將に起らんとした狂亂怒濤をば、一髮の間に平靜ならしめ得ることが出來たのであります。

若し此の事實を回想致しまして、當時に於ける我が海軍の實力が米國海軍のそれ以下にあり、米國艦隊進攻の前に一たまりもなく壞滅せらるゝ程度のものと假定致しますならば、果してどんな結果を招いて居りましたらうか、ブラット大將の腦中、職術的にも職略的にも、多少の勝算が畫がき出され、更にスチムソンや一般國民の輿論が、自信に滿ちた軍當局者を動かして居たとするならば、果して如何なる事態を惹起して居りましたらうか、恐らくは武力干渉に出て來ましたに相違なく、或は事變半にして日米開戰の餘儀なき立場に到つたであらうことは、容易に想像され得るところであります。

日米戰爭！。

それは、當時の國際情勢より推して直に英米聯合艦隊との開戰をも豫想せられるのでありますが、省みて當時の日本海軍が、米國海軍の砲炮にすら勝味の無い劣勢なものであつたと假定致しますならば、世界列强の海軍を敵手として良く之に堪へ、過去のそれの如き光榮ある戰果をば我が海軍の上に惠まれ得べしと何人が信じられましたらうか、結局は彼等の言ふがまゝに讓步に讓步を重ね、今日に視る、隣々たる滿洲帝國の出現も無く、或は遡つて日清日露の戰勝すらも、徒らなる一片の虛響と化し終つて居たかも計り知れないのでありまして、それが爲寸結果を想像致しますとき、慄然として肌の寒きを覺ゆるのであります。

斯くの如く、皇國の存亡にも關する危機重大の間に在りて、良く我が國運を援け、滿洲帝國の建設と相俟つて東洋の平和を保全し、延いては世界平和の維持に寄與致しましたものは、極東の海に嚴然と浮かんで居た帝國海軍の威力に他ならぬものでありまして、實に此の時に於ける我が海軍の威容ほど遺憾なき貢獻を發揮した例は他に無いのであります。

日清戰爭には清國北洋水師と黃海に戰つて之を破り、日露戰爭にはバルチック艦隊と對馬沖に戰つて之を擊滅し、共に砲煙彈雨の裡に赫々たる戰果を收め得たのでありました。

然るに、滿洲事變當時に於ける帝國海軍の威力は、戰はずして歐米列强の海軍を屈伏せしめ得たのでありまして、其處に華々しき戰鬪の場面こそありませんが、それにも、遙かに勝る偉勳の輝いて居ることを忘れてはならないのであります。

兵聖孫子は『百戰百勝は善の善なるものにあらず、戰はずして人の兵を屈するは善の善なるものなり』と訓へて居りますが、此の言葉を玩味すればする程、其の意味の千古不滅の鐵則であることを感銘せずにはゐられません。

私は今茲に、この既往の事實を回想し、其の榮譽に對して徒らなる讃辭を贈り、自己を樂しましめんとするものではありません。

私は、常に私の抱いて居る固き信念に基づいて、我々の祖國、日本の有つ運命を靜かに考へて見度いと思ひます。

申すまでもなく、我が日本の有する國家的地位は、純然たる海國であります、海國である以上、日本の將來を支配するものは、驀つて海洋にあることは明らかな事實でありまして、海國日本の將來は飽くまでも海

に依つて生き、海に依つて伸び、そして海に依つて榮ゆるところがなければなりません。

海に依つて生き、海に依つて伸び、海に依つて榮えた國家は、獨り現在の英國のみではありません、三千年餘に亘る世界史の中には、カルタゴを始め、スペイン、オランダ、イギリス等の名が記載されて居りますが、何れも我等の鄕土日本と殆ど同じやうな條件の下に、富み且榮えた事實が傳へられて居ります。

然もそれ等の國家の中、英國を除く他は、跡形もなく滅亡してゐるか或は見る影もなく落魄して居るのでありまして、其の滅亡或は落魄するに至つた徑路を辿つて調べて見ますと、何れも『海國でありながら、海軍々備を疎かにしたからだ』と云ふ一事を發見することが出來るのであります。

彼等は海に依つて榮えました、其の次に海の有難さを忘れました、有難さを忘れると共に、海軍軍備を疎かにするやうになりました、平時に於て巨大な海軍を備へて置くのは馬鹿らしいことだと云ふやうな理論が彼等の常識を支配して、海軍力は極度に萎縮し始めました、海軍力の萎縮したところに堂々たる海國の威嚴が有る筈はありません、此の機會に乘ぜられてカルタゴはローマの爲に、オランダやスペインは英國の爲に亡ぼされたり或は落魄せしめられたりしてしまひました。

我々の祖國日本はカルタゴではありません、彼等の興りつゝあつた時と同樣な地位に居つて興りつゝありますけれども、我々はスペインやオランダと同一運命を辿るべき、何等の羈絆も、何等の條件も持つものではありません、否、却つて彼等の辿つて行つた運命を良き教訓として、益々榮えて行くことは疑ふ餘地のない事實であります。

早い話が、敬慕して止まぬ我々の祖先は二千年の昔、既に海國民として海洋に興るべき自覺と運命とを識つて居りました、我々の祖先が海を識り、海を愛し、海洋に民族の繁榮を求めたればこそ、八幡船のローマンスや、勇壯なる倭寇の物語が我々の血を湧かせて居るのではありませんか。

我々の先輩は、排水量二千五百三十噸の寵驕が代表する時代の海軍、艦船十四隻、總噸數一万二千三百五十二噸より、短日月の間に、三万二千七百二十噸の陸奥が代表する時代の海軍、總隻數三百餘、總排水量百万噸にも達する世界第三位の海軍を自分の頭腦に依つて計畫し、自分の船渠に依つて建造したのであります。

そして此の海軍がありましたればこそ、清國を破つて亞細亞の日本となり、露國を破つて世界の日本となることが出來たのでありました。

先輩の遺考を遵守することに忠實である我々は、先輩の成し遂げた此の偉業に對して絕大の感謝を捧げると同時に、其の遺業を享け繼いで海國日本の完成に努力するところがなければなりません。

只今日本は、東洋永遠の平和を確保する爲に、東亞新秩序の建設を志す爲に、亦大和民族の發展を希ふ爲に、王師を進め、着々と大使命達成の彼岸に邁進しつゝありますが、然も目を擧げて歐米の空を、海を眺めますならば、其處に我が日本を目標とし、我々日本人の膨脹發展を阻害し、あはよくば死命をも制せんとする强大な怪物が、しきりに爪を研ぎ

牙を磨いて居る物凄い姿が映るのであります。

英國は何の爲に二百万噸を目指す大建艦に狂奔しつゝあるのでありますか、米國は他に如何なる必要あつて海空軍の大擴張をなしつゝあるのであります。

彼等が常に言ふところは權益の擁護だとか、國防の安全を期する爲だとか、至極尤もらしき美辭麗句を以て飾られて居りますが、而も日本の大陸政策に對し、强力なる發言を試むべく、其の背後を保證するために尨大な軍備を建設してゐることは疑ひなき事實でありまして、彼等の擴張しつゝある軍備が、遂には單なる擴張に終るものでないと云ふことに想到致しますならば、我々も亦現實の事相に據つて對策を講じ、東亞の萬全を期すべく、斷乎として決心と覺悟とを定めねばならぬのであります。

英佛ソ聯の援助に依つて蠢動を續けて居る蔣政權は、今なほ長期抵抗を豪語致して居りますが、たとへ彼等が壞滅せられましたからとて、今日の國際情勢より視るならば、それを以て直に今次事變が終幕となるものでないことは明らかでありまして、新生支那を繞り、其の後に來るものは列强の權益問題や、新政府への指導的援助や或は敗殘匪賊の跡始末など、日本の手に依つて成さねばならぬ忍耐と工夫と努力とは益々多事複雜となつて來ることでありませう、此の時に於て、更に軍備擴張の渦中に卷込まれ、之に對處せねばならぬと云ふことは甚だ迷惑な話でありますけれども、然も今日の此の苦難を經てこそ、やがて事あるの時一戰はずして敵を屈する』ための、善の善なる準備であると致しますならば、國民各位も我が當局の樹つる國策と方針とに十二分の理解と信賴とを以て、之に協力するだけの覺悟を示して頂き度いと思ふのであります。

『治に居て亂を忘れず』と申す言葉がありますが、今日我が日本の現狀は、治に居るどころの騷ぎではなく、亂の亂中に居るのでありまして殊に何時、如何なる方向より、豫想し得ない風雨に見舞はれるかもわからぬ狀態にあるのであります。

世上には、好い加減な氣休め的平和論や、好人物的國際協調論を口にし、樂觀してゐるものがあるやうでありますけれども、其の申すところの理論には何等的確なる根據は無いのであります。

我々は、須らく眞劍な態度を持つて此の切迫しつゝある世界の情勢を觀察し、以て機に臨み、變に應じ、皇國の興隆に翼贊する覺悟を堅持する必要があると思ふのであります。

二、支那事變を繞る國際狀勢

支那事變を繞つて複雜化せる現下の國際情勢を考察致しますには、先づ數年の昔に遡つて、彼の滿洲事變當時に於ける國際情勢をも檢討し

て見る必要があります。

柳條溝の爆破に端を發せる滿洲事變勃發の眞因は、當時全支那に瀰漫成長せる歐米列强の排日思潮が、漸次滿洲にまで流入し來り、我が國防上重要な生命線を脅威するに至りましたので、我が權益を確保し、日本民族の生存權を擁護せんがため、止むなく劍を按じて起つたことに始まります。

從つて、干戈を交へた當の相手は、張學良麾下の支那兵でありましたが、間接に敵として戰つた當の相手は、支那民衆でもなく、張學良輩でもなく、其の背後に在つて巴里講和會議以來、或は條約に依り、或は政治的手段に依り、徐々に高壓化し來つた排他的經濟ブロック政策であります。

歐洲帝國主義的支配勢力であつたと云ふことが出來るのであります。

申す迄もなく滿蒙の地は、歷史的にも、社會的にも、地理的にも、或は民族起源の上から申しましても、支那本土とは隔絶した別個の存在でありました。

日本は此の地域に、自國防衛のため大兵を動かし、高價な犧牲を拂ひ東洋平和のために之を確保して參りました。

若し日本にして、一たび滿蒙の地より手を引きましたならば、直に列强が之に入替り、其の傳統的手段とする侵略の歩を進め來ることは明らかでありまして、又此の地が列强の手に歸せんか、極東の平和は固より支那の安全も日本の存立さへも、直に脅されるに至るのであります、故に支那にして、眞に平和を念願とし、自國の安全を顧慮致しますならば日本が血と財との莫大な犧牲を拂つて、東洋平和の第一線に踏止まりました際、當然日本に協力し、其處に亞細亞民族の樂園を築かんが爲に參與すべきであつたのであります、然るにも拘らず前門の虎を防ぎ止めて居る日本の背後より、貪婪な群狼を誘ひ來つて我が存在を危うし、滿洲をば外來的支配勢力の獨占に委せんと致しましたので、茲に三千万民衆の合意に依る滿洲帝國が建設せられたのであります。

斯くて滿洲帝國建設の目的が、外來する支配勢力の排擊と、全亞細亞民族共存共榮の原則を確立するにあります關係上、我が日本は必然の勢ひとして、支那と對抗する以外一層激烈に、外來的支配勢力を排除せねばなりませんでした。

茲に於て外來支配勢力は、國際聯盟を根據として滿洲建國に反對し、日本の主張を排擊し、一面支那を鼓舞し、煽動し、援助し、强化し、遂に抗日陣營の先鋒に立たしめたのでありまして、此處に今次支那事變を勃發せしめるに至つた最大の原因があるのであります。

歐米列强は、何故斯くも執拗なる手段をもつて、日本を排擊せねばならないのでありませうか。

一部論者の中には、人種的優越感より來る一種の偏見に由來するものとなすものがあり、またそれも確に一因を成すは事實でありますが、最大なる原因として注目すべきは、日本の膨脹發展に依る脅威感と、日本の大陸進出に依つて、彼等の有つ舊權益が喪失されはしないかと云ふことを慾ふる打算的利害に由來するのも明白な事實であります、今日迄の支那大陸は、彼等の最も關心を有する大きな市場でありました、世界の寶庫とも云ふべき支那大陸を狙び續けつゝある彼等が、日本の大陸進出

のために、一朝にして驅逐せられますならば、それに基因して、やがて東洋に於ける一切の市場も權益も、或は植民地さへも失ふに至りはしないだらうかと云ふ恐怖觀念が、常に彼等の腦底を流れて居るのであります。

從つて、彼等の日本に對する非難も排斥も、乃至は壓迫も策動も、畢竟詰めれば自國の利害を土臺とする打算の上に行はれてゐるのでありまして、彼等が好んで口にする平和とか人道とかの言葉とは、如何に緣遠いものであるかを窺ふことが出來るのであります。

顧みれば七十餘年の昔、歐米列强が我等の門戸を叩き、鎖國の夢を破りました當時、我等に向つて約束せる彼等のモットーは、自由通商であり、自由貿易にあつたではありませんか。

彼等が以て常に稱ふる正義と人道と平和とを希求する觀念が、眞に僞りなく、崇高な正義人道の上に樹立されて居るものでありますならば、其處に七十餘年の歲月があると致しましても、今尙彼等のモットーとすべきは、自由通商であり、自由貿易でなければなりません、然も今日世界の何處に自由通商があり、世界の那邊に自由貿易が行はれて居りますか。

若し往年、彼等が示せるモットーにして、今尙行はれて居りますならば、我が日本帝國も、亞細亞の一局部に蹂躪して大陸政策を講ずる必要もなく、海陸空に亘る重き軍備を負擔する必要もなく、我が商船は世界の海港を壓し、我が商品は世界の市場に溢れ、大和民族は其の傳統的精神とする四海平和の手段に依つて、當年の英國以上に繁榮を招來せしむることが出來得ましたらうことは、私の固く信じて疑はぬところであります。

試みに數年來の我が通商貿易經過を一瞥してごらんなさい。

日本の製品は印度市場に驅逐せられ、蘭領南洋に壓退され、濠洲やカナダに排斥され、尙退いて南米に、アフリカに、次ぎから次ぎにと列國の强行する排他的經濟ブロック政策の犧牲となつて居るではありませんか。

歐米列强が、斯くの如く經濟ブロックの城壁を繞らし、日本民族の發展と、經濟政策に重壓を加へますならば、我が國としても亞細亞に歸り大陸に於ける未開發の大富源に基づいて、其處に日滿支を通じて共存共榮を目標とする新經濟組織を確立致しますことは、我が國の生存のために與へられた唯一の權利であり、最後に殘された唯一の繁榮策であります、然るにも拘らず、世界を風靡せる排他的經濟政策の餘勢は、遂に此處にも押寄せて參りまして、亞細亞に於てすら我等の安息を許さなくなつたのであります。

今日に至る、全支那を鼓動した排日思潮はそも何者が培養したものでありませうか、今次事變の背後にあつて蠢動を續け、我が國力を消耗せしめ、やがて乘ずべき機會の到來を待ちつゝあるは何者でありませうか

十年以來、政治的に、經濟的に、排日抗日を鼓舞し奬勵し、支那の無辜民衆を騙つて今日の事態を惹起せしめたものは、實に日本と競爭的立場に在る外來諸國の排他的經濟ブロック政策であります。

斯くて資源無く、市場無きものは、止むなく退いて餓死すべしとする

ならば、何で世界に平和があり得るものでありませう。

世界の平和とは、利己的人道主義者の、單に口にする巧言令色に依つて招來さるゝものではありません。

正義の爲に、人道の名の下に、百の條約を締結し、千の協定を作りましても、それが自己の利益を目標とし、排他的不正不義の匡正を忘れるものでありますならば、終には百の波瀾を招き、千の暴風を捲起すことになるのであります。

左手に十字架を捧げて世界の平和を希ひ、右手に劍を握つて不義に與せんとするが如き矛盾撞着は、歐米列强の好んで弄する手段衒策でありますが、斯かる不正と、利己的主義の絶滅しない限り、世界には禍根多くの是正を必要とし、なほ幾度かの慘禍を繰返さねばならぬと云ふことを警告せねばなりません。

三、支那事變の聖戰なる所以

昭和十二年七月七日、北京郊外蘆溝橋の夜暗を劈いて、一發の銃聲が轟きましてから、早くも茲に一年半餘の歲月を迎へました。

露しげき南北支那の野に、海に、大君と祖國のため、尊き人柱となつた幾多の忠魂に對し、謹んで敬弔の微衷を致すと同時に、風濤彈雨の裡に活躍しつゝある將士の勞苦に對しては、深甚なる感謝の意を披瀝せんとするものであります。

顧みれば蘆溝橋畔一發の銃聲は、我が亞細亞民族十餘億の上に、黎明を告げ、覺醒を促す曉鐘なのでありました、尠くも支那民衆に執りては軍閥多年の壓政と桎梏とより開放せられ、自由と平和との王道樂土の建設へスタートすべき、晴の合圖でありましたことは信じて疑はないところであります。

今や支那事變は武漢陷落を契機として第三段階に進み、時日の推移と共に、戰局は南方奧地に迄擴大されて居るのでありますが、茲に見逃すことの出來ない一事は、本事變の經過が、量的より質的に變化を來して居ると云ふことであります。

今次事變が、支那にとつては民族戰として戰はれ、日本に執つては國家的發展戰として戰はれて居りますけれども、又一面に於ては、支那が半植民地視せられて居りました關係上、列强間の植民地再分割戰の一形態としても戰はれ、更にソビエート社會主義體制と、國家主義的資本主義體制の一樣相としても戰はれるに至りましたので、日支間の戰爭は、單なる軍事的衝突として解決すべき領域を越え、民族的に、國家的に、或は世界的な問題として解決せねばならなくなつたのであります。

殊に局面は長期戰に入り、第三段階に進んで參りまして、日本は今迄に占領せる廣汎な地域に亘つて、一般支那民衆をば、戰時體制下に於て指導し、保護して行かねばならなくなりました。

此の現實の事相に對し、我々日本國民は大きな使命と任務と責任とを負擔せねばなりませんが、其の反面に於ては、歷史的な意義と、人類史的な貢獻と、なほ文化史的な發展とを得ることが出來るのであります。

茲に於て、我々に課せられてゐる當面の問題は、國家的發展過程の戰爭として戰ひつゝある今次事變をば、如何にして我が國策の路線に沿はしめ、如何にして有終なる戰果を收むべきかと云ふことであります。

以上の命題に對する私の解答は、一、亞細亞人の亞細亞を建設し、二、日滿支が强固に相提携し、三、防共同盟を締結する等でありますけれども、更に私をして率直なる意見を吐かしめますならば、以上の解答以外に、『今次事變を轉機として將來の禍根をも一掃すべし』と云ふことを申し度いのであります。

今次事變に於て、支那は國力を賭して戰ひ、日本も又擧國一致して戰ひつゝありますが、同時にそれは列强との經濟戰として、又日ソ間の政治的思想戰として戰はれ、進んでは太平洋爭覇戰としても戰はれて居るのであります。

歐米の排日論者は、今次の聖戰を以て、今尙支那に對する日本の侵略戰であるなどゝ申して居りますけれども、果して然りとするならば、我等の執るべき手段の、今少しく進出的に、今少しく徹底的に効果あらしめることもできたでありませう、然し我が政府が屢次に亘つて聲明致しました通り、我々は領土的に何等の野心を有つものではありません、のみならず、日本の目的とするところは、支那民衆をして軍閥政權の壓政より解放し、外來支配勢力の搾取より救ふにあります、故に日本が勝つと云ふことは、支那の民族戰を敗北せしめることではなくして、寧ろ勝利せしめることにすらなるのであります。

日本の勝利が、支那の民族戰を勝利せしめるものだとは、一見奇言であり、對立的な矛盾のやうにも聞えるのでありますが、然も支那民衆の解放と指導とを理想とし、支那國家の發展を支援し、大乘的見地より、日本の大亞細亞建設に參加協力せしめんとする我が方針に想到致しますならば、其處に矛盾も對立的見解も釋然として氷解するを覺ゆるものがあるでありませう。

今日迄、日本人以外の手に綴られ來つた世界の歷史には、相對的戰理に依り、『戰勝者の前には必ず戰敗者があるものだ』と云ふ事實のみが記載されて居りました。

然るに今次事變に於て、此の戰爭定義は顚覆され、『戰勝者の前にもなほ戰勝者があるものだ』と云ふ事實を靑史の上に記載せしめ得るのでありまして、我が政府の主張する正義が、如何に堂々たるものであり、大和民族の抱懷するところの平和と人道とを愛する觀念が、如何に正大なるものであるかは、後世史家の筆を俟たずとも、今次事變の聖戰なる所以を察知することが出來るでありませう。

私の申し述べましたところは、敢へて空想の論をなすものでもなければ亦非現實の論をなすものでもありません、既に北中南支に於ては現實

の事相となつて現れつゝあるのであります。

斯くの如くにして、日支兩國の政府當局者が如上の目的と目標とに向つて邁進し、萬難を排して使命達成に努め、兩國民亦信賴と同情と理解とに依つて相互に結ばれ、更に日支間が政治的に協調し經濟的に提携し、そして軍事的にも不可分の關係が結ばれますならば、その時こそ多年翹望せるところの『亜細亜人の亜細亜』が出現せられるものと視て間違ひはない筈であります。

以上を要約して申しますと、親日支那との提携に依つて、日本は安んじて極東海上の覇權を把持し、不脅威不侵略の傳統的海軍勢力を確保して、排日經濟ブロックへ進出せんとする日本商品の飛躍を擁護することも出來ませうし、一方支那に於ても同樣に、抗日戰に備へた軍事的勢力は之を北西國境に向はしめて防共の前線に備へることも出來ませう、そして今日迄日本を目標として計上せられ、國家豫算の八割を占めたと言はれる軍事費の大部分は、之を國内産業の發展に、民衆生活の改善に、自國文化の高揚に、建設的に發展的に消費することが出來るのであります、其の上に日本の指導を享けて國政の改革を行ひ、高度に發達した日本文化と、工業能力と、産業技術とを攝取吸收して、支那自身の産業と商工業との發展を圖り、更に更に、日本と協力して無限にも近い資源寶庫の開發に當りますならば、日支兩國及び兩國民の上に齎さるべき絶大な福祉は、期して待つべきものがあると思ふのであります。

近衛内閣總理大臣が、國民精神總動員實施の劈頭に當つて、國民へ論告致しました中に、『この日本國民の歴史的大事業を吾等の時代に於て解決するといふことは寧ろ今日生を享けたる我等同時代國民の光榮である』と云ふ言葉がありましたが、今にして之を考へ合はせますなれば、其の言葉の中に含まれてゐる意義の、如何に深長にして、如何に高邁なものがあるかを窺ふことが出來るのであります。

四、列强果して挑戰し來るか

今次の支那事變は、單なる日支間の抗爭のみに止らず、支那事變の名に依つて行はれて居る排他的經濟勢力との抗爭をも意味してゐるものだと云ふことは、前章に於て述べた通りでありますが、果して然るものとするならば、本事變の發展は究極するところ、列强との最後的爆發點に到達するものでありませうか。

言葉を換へて申しますならば、列强は或機會に於て、日本不動の國策である亜細亜大陸の經營に對し、一戰を覺悟してまでも干渉的態度に出るものでありませうか。

又斯かる國家的危機に臨み、我々は列强を敵手として之に應戰するだけの準備と覺悟は成つて居りませうか、更にその場合、何等かの方法に

依つて彼等の挑戰を回避し、世界動亂への移行を防止する手段が尙殘されて居るものでありませうか、今に於て之を檢討し、不斷の意力を注いで應急の對策を講じて置くことは、我等國民の荷ふべき最大の義務であります。

回顧すれば歐米の巷間に日露再戰説が豫想され、彼等の話題を賑したのは一九〇五年、ポウツマウスに於て日露講和條約が締結されたその翌日からでありました。

日米一戰説が叫ばれて、事を好む讀書子を喜ばせましたのは一九〇六年、米國に於ける日本學童の差別問題が起つた時からでありました。

日英戰爭が示唆せられ、東洋問題解決の爲に戰はざるべからずと唱へられましたのは一九二一年、ワシントン會議後、日英同盟條約が廢棄された直後のことであります。

斯くして、歐米人の構想に成る日本を對照とし、日本を敵手として描かれた戰爭に關する出版物は、積んで一つの書庫を滿たすに足り、各國民の志向も亦國際情勢の推移と共に弛張し、其處に雜多な輿論をさへ生じて來たのでありますが、然もそれ等の戰爭を構想せる文人の筆致は、幸か不幸か遂に時代を飾る一卷の勇壯な小説と化し去つたのでありますなる程國交の危機將に一髪の秋を呈した一二の事例はあつたとしましても、歐洲大戰以後、世界には戰爭らしい戰爭もなく、兎も角も平和に似たる平和の歲月を重ねて參りました。

然も其の據つて來たる所以を尋ねて見ますならば、世界大戰に消耗した各國の軍備狀態なり國情なりが、强國對强國の戰爭に堪へ得られる狀態になつてゐなかつたからだと申すことが出來るのでありまして、滿洲事變當時に於ける逼迫した日米間の問題の如きは、其の好例を雄辯に物語つて居るのであります。

されども、今日に於ける世界の情勢は、往年のそれに較べて、躍進的に大きな變化が生じてゐることを記憶せねばなりません。

米國の海軍々備は、軍縮條約に依つて增大强化されました。

ゼリコー提督の建策に據る新嘉坡軍港は、布哇のパール軍港と共に太平洋上有數なる大堅塞として既に完成されました。

浦汐には幾十隻かの潛水艦が配備され、事ある時を待つものゝ如くであります。

殊に太平洋を繞る列强の空軍根據地は、まるで碁石でもまき散らしたやうに建設されて居ります。

斯かる情勢下に於て、支那大陸に權益と市場とを有する列强は、今事變の經過と共に、日滿支を結ぶ大亜細亜聯盟の出現を見、列强の侵略的勢力と相容れぬ結果が生じました時、此の現實の事相に好感を寄せ、東洋民族の爲に祝福する程度と厚情とを示すものでありませうか、日本の大陸政策を是認し、人類共有の大精神に立返つて之に賛同し、之を支持するだけの雅量を持つものでありませうか。

然るとせば、問題は甚だ簡單でありますけれども、依然として新生支那を觀るに半植民地を以てし、不當の要求、或は往年の三國干渉にも等しい態度に出て參るとするならば、當時のそれとは少しく違つた地位と確信と實力とを有つ日本帝國が、往年と同樣に讓歩し、御機嫌を取結ぶ

ものだとは考へられぬところであります。

さすれば必然の結果として、極東の海空陸を舞臺とし、日本を主役とする一大ドラマが演出されることになるのでありますが、此の時之に配役されるであらうと想像される各國は、今や如何なる裝束に依つて身を飾り、如何なる粉黛を凝らして舞臺に現れんとして居ることでありませうか。

私はその舞臺面を一見する前に、先づ彼等の樂屋を覗いて、彼等がそれぞれ所持して居る臺本の上に眼を通し、その内容が如何なるものであるかと云ふことを檢討して見ることに致します。

（イ）ソビエート聯邦

只今、日本とソビエート聯邦との間には、領土的に、或は物質的利害關係に於て一致し難い溝渠が横たはつて居ることは事實でありますが、それよりも兩國間に戰爭を決定付け、之を誘發せしむる要因ありと致しますならば、それは兩國が斷乎として相容れない思想上の相違に由來することは明らかな事實であります。

滿洲事變以來、滿ソ國境には、種々な不祥事件が惹起され、幾度か東京モスクワ間の空氣を緊張せしめたのでありましたが、斯かる事件の發生に依り、其の情勢が逼迫するに連れ、シベリヤに於けるソ聯の戰備と武裝は常に增大强化されて參りました。

極東に派遣されてゐる現在の兵力は陸兵四十万、飛行機一千八百臺、戰車千七百臺が常備されて居ると傳へられ、又浦潮には數十隻の潜水艦が待機し、黑龍江を隔てゝ相對する滿ソ國境には、近代式要塞の精粹を誇るトーチカに依つて、一點の隙間もなく防備されて居ることは餘りにも有名であります。

之に對する日本の戰備が、如何なる程度に進められて居りますものかは私の知る限りでありませんが、然し當局者が、國家と國民とに對し、充分の責任を負つて、防備に盡くされて居るであらうことだけは想像し得られるのであります。

斯くの如く緊張した狀態下にあつて支那の有つ軍事的、政治事的地位は極めて重大なるものがあるのでありまして、日本が支那の民族問題を正しく解決し、指導を與へて之を我が陣營内に參加せしめると云ふことは、日ソ間の動向を左右する上にも必要であり、そして政治、軍事、外交の各工作が當を得ますならば、將來起るべき日ソ間の問題は、戰爭に訴へる直前に於て解決致すこともさまで至難事ではないと思ふのであります。

ソ聯と雖も、徒らに好んで、鐵塊の如き日本にぶつかつて來る愚は致しますまい。

地中海やバルチック海沿岸の情勢はどうでありませう、歐洲に於ける有力な國家は、日獨伊を結ぶ防共協定の一線に參加し或は參加せんとしつゝあります、チェッコ問題に就いてもだいぶ惱んで居る筈であります從つて獨ソ或は伊ソ戰爭が、獨伊對ソ聯の戰爭を意味するものでありますならば、日ソ戰爭が、日獨伊を根幹とする防共ブロック對ソ聯の抗爭

へ發展し得ないとは、何人が斷言し得られませうか。

さればとて友好關係に在る佛國が、現在の如き世界情勢下に於て積極的援助をして呉れるものかどうか、なほ疑問の存するところであります同時に英國の八面的外交を信賴することも出來ますまい。

傳ふるところに據れば、國内に在る數百万の白系？、反革命、不平分子等が、赤軍一度戰線に赴けば、後方内部に於て如何なる大事を惹起するものか、之にはさすがのスターリンも大いに惱まされてゐる筈であります。

望觀すれば現在の英佛ソ聯の關係は、環境と利害とを等しく致しますために相寄り、相通じて居るやうでありますが、然し彼等相互の腹を剖つて、眞實の意見を吐露せしめますならば、歴史的にも、民族的にも、或は亦思想上より論じましても、幾多相反すべき宿命の下に置かれて居るのでありまして、唯今日、世界に渦卷く急湍を渡らうとすればこそ、此の呉越は共に同舟してゐるのであります。

ロマノフ帝權を、根こそぎ掘返したレーニンの革命目標は、現代の世界を一手に支配せんとするアングロサクソンの强固な結帶を斷切つて、其の桎梏の下に苦しんで居る弱小民族を解放するにありましたが、其の後、自由と平等との美衣の下に隱れて過激な思想戰に移り、世界侵略を究極の目的とするに至りましたので、眞の平和と正義とを愛好する我が國是には絶對に相容れぬものとなりましたけれども、一面資本主義國家の巨魁であるアングロサクソン民族とも其の理想に於て、目的に於て、槓杆の兩極に立つものであることは、私の皮相な觀察や偏見とのみ一蹴し去ることは出來ますまい。

トルストイやドストエフスキーの偉大な文學は、彼等が赤魔の毒血に穢されぬ時代のスラブ魂が持つて居た、アングロサクソン民族に對する反感へ、神秘な示唆を與へましたところに不滅な價値があるのではありますまいか。

若しスターリンにして、眞に世界の動向を達觀するの明があり、又彼等が傳統的政策たる暖かき海への出口を求め、以て自國の繁榮を計らんとするならば、まづアレキサンダー大王遠征の跡を辿り、其の保護領であるボハラに軍を進め、アフガニスタン國境西方五百哩の中に通じて居る高原道路四本の中の何れかを選んで、浪青き印度洋へ志すのが順當であり無難であります、それだからと申して印度に對し、英國に代ふるにソ聯を以てすると云ふことを意味するものではありません。

然し乍ら今日のスターリン政權は、日ソ相戰ふ日の來るべきを覺悟するものゝ如く、戰備を進め、抗日支那を利用し、更に英國を巧に動かして、將來の日ソ問題を有利に展開せんと策動して居ります。

ソ聯と雖も今日の世界情勢下に於ては、餘程の決心と覺悟とが定まらぬ限り、日本に對して積極的行動は執り得ないでありませうけれども、日本としては『來らざることを恃むことなく、待つあるを恃む』爲に和戰兩樣の準備を完成し、一面國際工作に專念し、防共ブロックを根幹とする歐米國交の調整に努め、血に餓ゑるソ聯内情を巧に利用して、我が東方亞細亞に於ける政治經濟の地歩を安定確保して置くことは緊急なる必要事でありまして、斯くしてこそ、始めて日ソ戰を彼より回避せしめ

或は勝利の絶對性を我に在らしむる所以なることを高唱し、特に國民諸賢の關心を促すものであります。

（ロ）イギリス

支那事變を機として、英國の對東洋政策が積極化し來り、同時に兩國民の感情が次第に尖鋭化して參りまして、事を好む者より『砲火を交へざる日英戰』とまで極言せしむるに至つたのでありますが、此の時に於て、日英間の問題を究めますには、現在の日英關係が如何なる環境と條件の下に置かれてあるかと云ふことを、檢討して見る必要があるのであります。

ソビエート聯邦の爲に刺戟された支那の民族的思想と、帝國主義的排外思潮とが、強烈な國權恢復運動となつて現れて來ました當時、早くも支那の覺醒を看取した英國は、それを抗日運動へ轉換せしむることに依つて、自國の蒙る損失を回避すべく畫策したのであります、それが難想通りに成功し、爾來英國と抗日支那とは、密接不可分の關係を形成してユニオンジャックの光彩は、益々鮮かさを加へるが如く視られたのでありますが、時代は移つて支那事變となりますや、僅かに一年餘にして支那大半に旭日旗輝き、その光被するところ、親日政權は憑刺として育生し、舊權益を守るに汲々たる英國は、今尚餘命を喘ぐ蔣政權を支持しなければならぬ破目となり、一轉してそれを支持することに依つて、彼等も亦抗日戰の責任を分擔する煩悶が益々深刻となつて參りまして、茲に政策的に、經濟的に、悉く日本と基本的對立をなし、時局の進展は此の情勢を驅つて、太平洋爭覇戰をも激發せんと迄視らるゝに至りましたのは、巡る應報の然らしむるところでありますが、亦彼等の感懷も淺からぬものがあることでありませう。

日英同盟條約締結以來、支那を繞つて今日に至る日英間の國交は、お互に對米、對ソ等他問題の解決に繁忙を極め、一面日本の親善政策に依り、當面せる諸問題は友好的雰圍氣の下に處理されて、それを阻害すべき大きな過誤もなく經過して參りました。

然るに現在の兩國國交關係は、我が大陸政策の遂行と共に重大なる變化を來し、蔣政權援助の爲には往年同盟の誼を忘れ、國際信義も地に墮して顧みず、しかも親日政權の成育に伴なつて其の對立は益々甚だしくなり、遂には難想さるゝ太平洋爭覇戰に備へて、尨大なる軍備擴張をなさればならぬ環境と條件の下に居る、と云ふことは誠に遺憾とするところであります。

然らば此の日英間の基本的對立は、之を武力的解決に俟つ以外、平和裡に解決すべき餘地はないものでありませうか。

由來英國の最も怖れて居りましたところは、露國の南下政策に依つて蒙る印度の脅威であり、それに依つて激發せらるゝ印度の獨立運動でありました。

然れども今日に於て、何ものよりも怖れ、如何なる事よりも關心を持ちつゝありますものは、日本の大陸進出政策であり、やがては極東勢力後退の運命に逐滅せんとする一事であります。

從つて蔣政權を支持し、武器を與へて之を援助して居りますのも、一に今次事變を利用し、日本の軍事的能力と經濟的國力を消耗せしめ、以て機會あらば强力なる發言を試み、我が大陸政策を阻害せんとすることにあるのは明瞭な事實であります。

それのみではありません。

蔣政權壞滅後に於ける日本の大陸進出と、それに依つて必然齎される日本の太平洋制覇と、或は日本の世界支配への飛躍を怖るゝの餘り、米佛を誘つて三國共同の軍事的、或は政治的工作を創造翻策して居るのであります。

斯くの如き英國の挑戰的行動は、延長されて太平洋爭覇戰を速め、日英遂には砲火の間にまみえねばならぬものでありませうか。

私は戰爭謳歌者ではありません、從つて日英戰爭を論斷することを差控へ度いと思ひます、若しも條件が許し、事情が容れますならば、たとへ暫定的にもせよ、兩國の國交を調整し、極東の波濤を平靜ならしめることを希望するものでありますけれども、一方に於て、歐米勢力の重壓に惱む亞細亞民族の解放を使命とする我が日本帝國と、東洋民族を壓迫して、其の上に自國の繁榮を打樹てんとする英國とは、國策に於て、精神に於て、隔絶した相違があると致しますならば、表面上一時小康を得る一途ありと致しましても、兩國の對立は、依然として將來に持越されるものではないかと思ふのであります。

我々國民は、近き未來に於て、清算せざるべからざる日英問題に對し充分の覺悟を以て、時局の推移を見守る必要があるのであります。

（ハ）アメリカ

對獨、對伊、スペイン問題及び其の他地中海を繞る國際情勢に緊縛され、多事益々多端を極めて居る英國は、米國の諒解乃至は支持なくして對日積極行動はとり得ないであらう、とは國際通の等しく想像してゐるところでありますが、斯かる時に於て米國の動向こそは、列强の進むべき針路と、選ぶべき方向とを指示するものとして、世界の識者が關心注目を怠らないのであります。

ルーズヴェルト大統領が世界に宣明致しました如く、飽迄も中立的地位を確保して、其の據つて樹てし政策に忠實なるものがありますならば日英間の危機を幾分でも緩和する上に役立つものがありませう。

殊に米國が、日本の大陸政策を承認し、大亞細亞建設に協力を惜しまぬものでありますならば、彼等が常に呼びかけて居る、世界人類の平和と安寧とは、燦然たる光輝を放つて實現せられ、ワシントンやジェッファーソン時代の高貴な理想と一致して、世界人類讃仰の的となるのは明らかなことでありまして、尠くも極東の事態を理由とし、大建艦競爭の先驅者となつて、平和と人道との名に次第に遠ざかり行きますことに較べて如何に意義深く、如何に神の思召に協ふ所以であるかを識るべきであります。

米國が日本の地位を承認致しますことは、英國の對日戰を斷念せしむることになります、從つて英國も蔣政權援助の手を止め、支那事變の終

幕を急がしめて、國際紛爭の危險を解消する礎因を成すことになるのであります。

以上の觀點は、之を推し進めてソ聯の極東工作と、對日抗戰準備とを後退せしめ得ることにもなりませう。

資本主義世界に於ける米國最後の競爭者は英國であり、又支那を舞臺とする太平洋に於ても、米國最後の競爭者は英國である點に想ひ到りますならば、自由と正義とを愛すること深き米國及び米國人は、今や極東に起らんとし、當に起りつゝある新事態に對し再檢討をなして、認識を正す必要がありはしないでせうか。

米國は今、支那問題に就いて、或は太平洋問題に關して、日本と對立し、日本と軋轢せねばならぬ程、しかく逼迫した情勢下に置かれては居りません、若し政策的に對立すべきものがあると致しましても、それを以て直に强大なる軍備を必要とする理由は薄弱であります、日米兩國當面の問題は、お互に接近し、相共に和協して解決し得る條件の下にあります、然も其の和協接近に依り、兩國の對立は直に解消し得られる可能性のあるものゝみであります。

試みに、兩國の經濟關係に付いて考へて御覽なさい。

日本は、米國の世界貿易に於て最上の顧客であります、米國の對支貿易と、對日貿易とを比較して見ますと、對支輸出の一に對し、對日輸出は三乃至四以上の割合を示して居ります、然も米國が對支貿易に依つて得る利益は、在支米國人の生命財產を保護する爲に派遣されて居る陸戰隊や、派遣艦隊の費用に相殺されて、米國としては何等の利益も得てゐないのであります。

一艦一兵の保護を要しない、然も最大の顧客である對日貿易を犧牲にしてまで、日本に挑戰しなければならぬ理由は、如何なる角度より視ても發見することは出來ないのであります。

嘗て米國は、世界の平和と人道との名のために、歐洲大戰へ參加致しました。

今日に於ても亦同樣な名目に依つて、日支戰を繞り、英佛と共同し大平洋爭覇の冒險に乘出さうとするやうな相貌を表して居ります。

米國が英佛と共同し、對日動作を執ると云ふことは、戰債協定破棄の筆頭である彼等の爲に、領土の保全と、既存權益の確保を策謀してやると云ふ以外に何の得るものもありません、若し有り得るとすれば、其の代償は極東の安定を破壞し、世界の平和を攪亂したと云ふ汚名と責任とでなくてはなりません。

米國は極東に於て獵犬となり下つてまで、日本と爭ふべき大義名分は無い筈であります、從つて其の極東政策は日本と諒解を遂げることを第一義とし、日本の手に依つて、新生支那の復興と開發とが成し遂げられ支那の購買力が增大して參りますならば、彼等の對支貿易も振興し、米國の經濟界に齎す利益も倍加せられて、日米支を通じて相互に享ける福祉は、計り識れぬものがあると云ふことを銘記せねばなりません。

斯かる見易き事理にも眼を蔽うて、支那に於ける投資三億弗を保全するために、日本の感情を殊更激發する如き態勢を持し、日本を目標として渡洋作戰に必要な大艦巨砲主義を踏襲し、尨大なる建艦に着手するが

如きは、我等の最も不可解とするところでありますと同時に、それは單に日米兩國の不幸に止らず、世界人類を不幸の深淵に投ぜんとする危險でなくてなんでありませう。

私は、此の機會に於て、米國及び米國民に一言を呈し度いと思ひます

即ち

『米國が建艦のために投ずる八億弗の巨費を、日本の大陸經營を支援して之に投じて見よ、背て國際債務の履行に忠實であつた日本は日米支の繁榮のために、忠實に事業の遂行と責務を履行して、民族相互の福利と世界平和の上に必ず貢獻するであらう』と。

此の項を終るに當り、結論として、支那事變を繞る列强の動向は、驟つて英米兩國の態度如何にあると申し得られるのであります。

要約すれば、極東に對する英米兩國政策の積極化と否とに依つて、列强の動向が左轉し、右行するに至るものであります。

日英爭ふの日、米國が英國に與しないならば、英國は日本と戰ひ得ないでありませう、同樣に、日米爭ふの時、英國が米國に協力するところがないならば、米國と雖も四千海里の渡洋作戰を强行するものではありますまい。

一方に於て、佛國もソ聯も、英米の協力無くして何事をか成し得るものでありませう。

然も英米兩國が、終局に於て協同すべき可能性は、之を歷史的に、人種的に、宗教的に、或は資本主義的國家體制に於て、果ては現在に於ける兩國々交狀態より視ても、大いに有り得ることゝ思はれるのであります。

今や英米佛ソ聯の各國は、目指す目標を等しくして、海軍々備の大擴張をなしつゝあります、こゝ數年後を待つ迄もなく、我が日本海軍の勢力が、各國のそれに對し、均衡が失はれましたならば、其の時にこそ極東に如何なる重大事態が惹起されるものでありませうか、私の筆に依つて、始めて知るべきことではありますまい。

斯かる情勢下に於て、現在我が海軍の負荷する任務が、國策と國防上如何に重大なものがありますか、以下私の述べんとする無味乾燥な數項を、我が海軍のために敢へて味讀して頂き度いと思ふのであります。

五、世界列强の建艦狀況

皇紀二千五百九十七年一月一日午前零時。

寺々から撞き出された除夜の鐘の音が、渺々とした餘韻を街から村へ漂はせ始めた時、帝國海軍多年の桎梏とも云ふべきワシントン、ロンドン兩條約は、遠く過去の歷史の中に溶け去つて、日本にとつては誠に結

構な正月と、海軍々備不拘束時代がやつて參りました、其の屠蘇の味が如何に美味く如何に愉悦に滿ちたものであつたか、今もなほ忘れることが出來ないのであります。

これよりさき歐洲に於ては、伊エ戰爭を繞り、地中海に於て、伊太利空軍の爲にあつさり嘗められてしまつた英國は、自國海空軍の缺陷を痛切に感じまして爾來、國内に於ける軍需工業の主力を動員し、準戰時體制の下に軍備の强化に專念して參りましたが、無條約時代が到來致しますや、大手を振つて軍備擴張に乘出しました、之に向つて拍手を送つたのは米國であり、劣らずと立上つたのは佛國であります。

然も極東に於ける國際情勢が緊迫し、現在列强の有する軍備實力は、極東に於て到底何事も成し得ない事實が立證され、且老練を以て鳴る英國さへ、自國外交の後退を豫想せられるに到り、『强力な背景なき外交は滑稽に等しい』といふ鐵則を如實に味はせられました列强は、東洋に於ける强力なる發言權を維持するには、是非共强大なる海軍の實力が必要であると云ふ結論に到達し、殊に英國は、北海及び地中海方面の制海權を確保すると共に、極東に於ても一朝有事の秋に際し、本國艦隊の增援を待たずして活動し得られる東洋艦隊建設を必要とするに至り、茲に之を理由とし、之を主眼として積極的海軍擴張を開始したのであります

一方米國は、過般ルーズベルト大統領が宣言致しました如く、『國際情勢の極度の緊張及び無秩序』を理由とし、平和の維持と一面國内に於ける深刻な不況打開の爲に、或は失業問題の解決に資せんとする内政的理由の爲に、一昨年二月十七日作戰部長リーイ提督をして『米國政府は英國の海軍計畫に匹適する海軍計畫を樹立する』旨を言明せしめましたが、たま〳〵支那事變が勃發致しますや、『今や歐洲及び極東に於ける政局は、一九一八年以來、最も險惡な狀態に在る、若し我が海空軍を擴張するにあらざれば、米國の安全は危殆に瀕する』ものであることを國民の前に警告するところがありました。

米國の國防が、海軍を擴張しなければ、如何なる危殆に瀕するものであるか、私は寡聞にして知るを得ないのでありますが、然も米國の固執する大艦巨砲主義なるものは、單に自國々防に備へんが爲ばかりでなく太平洋作戰、即ち東洋に對する渡洋作戰上必然的要求として、攻防速共に大なる巨艦を建造せんとするのは餘りにも明白であります。

斯くの如き英米の軍備擴張は、勢ひ獨伊佛の各國を刺戟し、それに對應する海空軍備の擴張を誘發せしめるに與つて力があり、今や世界列强は、一九二一年の昔に返り、往年以上の大旋風を捲起して幾多の波瀾を生じ、その渦紋の波及するところ、世界の何處かに於て不測の慘禍を招かんとして居ります。

軍神マルス、恐らくは劍を撫して氣味惡い妖笑を洩へ、暗雲こむる何處かの空を眺めてゐることでありませう。

私は茲に少し筆を改めて、只今各國が着々と進めつゝある軍備擴張の狀態を寫し、以て諸賢の參考に資し度いと思ふのであります。

(イ)イギリス

英國は一昨年の春、海軍々備無條約時代が到來すると同時に、大軍擴に着手したのでありますが、多年周到なる準備と、精細なる研究が積まれて居りましたゞけに、其の熱意には驚嘆に價するものがあります、一昨年春發表されました一九三七—四一年に至る、五ヶ年計畫の軍備豫算總額は、實に二百五十五億圓（十五億ポンド）に達し、只今建造中乃至計畫中の主要艦船は

主力艦		七隻	約二五五、〇〇〇噸
巡洋艦（乙級）		一九隻	約一二七、〇〇〇噸
航空母艦		五隻	約一一五、〇〇〇噸
驅逐艦		二四隻	約四一、〇〇〇噸
潛水艦		一〇隻	約一一、〇〇〇噸

の多數に上つて居りますが、之が完成する曉には、

主力艦		一五隻	四七五、〇〇〇噸
巡洋艦	甲級	一五隻	一四五、〇〇〇噸
	乙級	四九隻	三一四、〇〇〇噸
航空母艦		七隻	一三七、〇〇〇噸
驅逐艦		一七六隻	二二九、〇〇〇噸
潛水艦		六三隻	六五、〇〇〇噸
合計		三二五隻	一、三六五、〇〇〇噸

（其の他の艦艇は省略す）

の現有勢力を合しまして、主力艦のみに於てもその數實に二十二隻に達し、總艦艇の排水量は二百万噸を超過する、名實共に世界第一の海軍が出現することになるのであります。

嘗ては二國標準主義、即ち世界最强海軍の二つを併せた威力を保有することを以て、傳統的海軍政策となし來つたグランドフリートが、强敵獨逸を驚して胸撫で降したのも東の間、次いで現れ來つた米國海軍の脅威に依り、ワシントン會議を一轉機として、百年以來の海上優越主義をば遂に放棄するの餘儀ない破目となり、海上の覇者を以て自ら任じて居る彼等を痛く憤激せしめましたのは、十餘年の昔でありました。

回顧すれば一九一六年頃、世界大戰最中の米國海軍は、世界の大勢に乘じて、海上の覇權を掌中に收むべく、第一着手として戰艦十隻、巡洋戰艦六隻、巡洋艦六隻、驅逐艦百十七隻、其の他潛水艦並びに特務艦多數を建造せんとする海軍大擴張案が議會に提出され、實現されさうになつたのでありました。

此の時に於ける英國海軍の現狀は、一九一四年以來、たゞ戰爭にのみ忙しく、戰艦建造の如きは事實上中止されて居りまして、一九一五—六年度に起工された六隻の巡洋戰艦も、其の中の三隻は建造を放棄し、僅かに數隻の輕巡洋艦や小艦艇を竣工せしめたに過ぎなかつたのであります。

それで若し米國海軍の計畫が實現致しましたならば、數に於ては勝ると致しましても、實力に於ては到底米國新鋭艦隊に對抗することは出來なかつたのであります。

斯くて英米海軍力の均衡は、茲に全く破れんとし、英國は米國の前に數百年來の傳統的海軍優越主義を放棄するか、或は又斷然起つて之に對抗し、同樣の海軍大擴張を行ふか、二者の中何れかを選ばねばならぬ苦境に立つたのであります。

米國が此のまゝ建艦を續けんか、一九二一年には、主力艦に於て英國を凌駕し、尚一九一八年の第二次擴張計畫が實現するならば、ポスト・ジャットランド型主力艦は二十隻となり、快速巡洋艦は四十隻に及び、殊に驅逐艦潛水艦に至つては、二倍に近い數となりまして、その實力に至つては格段な相違を來すことになるのでありました。英國の朝野が身を震はして驚いたのは當然かも知れません。

米國海軍は如實に世界第一海軍となりつゝありました、始めは英國同等を標榜しながら次第に英國以上の絶對優位を占めんとし、茲に英米兩國の大建艦競爭が將に開始されんとして居りました時、一九二一年十一月十二日、ワシントン會議が開かれまして、英米兩國の保有すべき主力艦は之を對等とし、兎も角も主力艦だけは制限することが出來ましたけれども、補助艦のみは佛國の反對に會つて成立するに至りませんでした

密かに喜んだのは英國であります、それは大戰の創痍に苦しむ英國が米國の有つ無限にも近い富の前に止むなく泣寢入りして、金のかゝる戰艦や航空母艦には同率に甘んじましたけれども、自分等に執つて、最も必要な、最も都合の好い巡洋艦以下の補助艦に於て米國以上の勢力を維持して行けますならば、全體に於ても亦從來の優越主義を維持することになるからであります。

一九二三年、ボールドウキン保守黨内閣當時に議會を通過した、バークンヘッド五ケ年計畫案と稱せられる補助艦建造案は、斯くの如き目的の下に成された其の現れに他ならないものであります。

英國の此の計畫は、自然四大海軍國を刺戟して、補助艦建造競爭は火を發する如き猛烈さとなつて參りました。

然るに、米國が之に落伍して居る現狀を看て取つた大統領クーリッヂは、一九二七年、ジエネバに日英米三國の補助艦に關する軍縮會議を開き、之を阻止せんと致しましたが、巡洋艦に於ても大艦巨砲主義を執れる米國と、小艦小砲を主張して隻數の大なるを望み、併せて優勢なる商船をも利用せんとする英國とは、直に正面衝突となり、日本の調停も効を成さず、遂に決裂するに至つたのであります、即ち二吋の爭ひ—米國の八吋砲に對する英國の六吋砲—がこれであります。

餘談に亘りますが、一般の人々は、此の二吋の差を餘り深く考へて居らぬやうでありますけれども、事實は二吋の差に容易ならぬ實力の相違が密んで居るのでありまして、專門家の方では、其の差を三と一位に當ると申して居ります。

左の數字は、その當時、英國ヴイッカース社が計算したものでありますが、各國海軍の製砲表も大同小異であると思はれることを附言して置きます。

	口徑	長さ	砲彈重量	口徑に於ける秒速	破壞力
六吋砲	五〇口徑	一〇〇封度	三,〇〇〇呎	六,二四〇呎噸	
八吋砲	五〇口徑	二六六封度	三,〇〇〇呎	一五,九六〇呎噸	

（破壞力は彈重に秒速の自乘を乘じたもの）

此の系數に依つて見るも、八吋砲は六吋砲の約三倍の威力のあることがわかります、我が加古衣笠級八吋砲六門の巡洋艦が、七千百噸の小驅でありながら、世界各國の一万噸甲級巡洋艦の列中に伍して怖れられて居り、先年川崎造船所に於て竣工した熊野は、排水量八千五百噸、六吋砲十五門を搭載して居りますが、六吋砲搭載艦なるが故に乙級巡洋艦と呼稱されて居ります、斯く申しますと、六吋砲艦の價値を大分割引せねばならぬやうでありますが（委しいことは後章に於て述べます）必ずしもさうではありません、職衙的に視て、八吋砲と六吋砲とが對戰した場合、六吋砲艦は、自分の彈丸が屆かぬ距離、即ち射程外に於て、八吋砲艦の自由射擊に委せねばなりませんけれども、六吋砲艦同志、又は以下の巡洋艦、驅逐艦、潛水艦、或は武裝商船等に對しては、堂々たる威力を發揮することが出來るのでありまして、巡洋艦の重なる任務たる、通商の保護或は破壞に從事する場合には、二吋の差は三對一程の相違は無くなるのであります。

斯くて米國は、憤然として補助艦建造に着手致しました、五ケ年繼續を以て、一万噸巡洋艦二十五隻、驅逐艦九隻、潛水艦三十二隻、航空母艦五隻、合計七十一隻、總豫算七億二千五百万弗と云ふ尨大なものでありました。

再び驚いた英國は、到底競爭に勝算の無い見極めが付きますと、其の得意とする『柔よく剛を制す』の策に出で、バークンヘッド案を撤回して米國に笑ひかける一方には、英佛海軍協定を結んで對抗せんと致しましたことが却つて米國の怒りを買ひ、あわてゝ之を破棄するなどの醜態を演じて、其の如何に變節極まりないものであるかを世界に銘記せしめました。

次いでロンドン條約となりまして、時勢の推移と、國力の相違は如何とも致し難く、嘗ての二國標準主義も、海上優越主義も、榮枯盛衰の法理の前に止むなく諦めて、遂に補助艦に於ても亦、米國と同等の地位に轉落し、今日に至つたのであります。

斯くて、ジャットランドの海戰以來、鼎の輕重を問はれるに至つた英國海軍も、本國及び各植民地防衛の爲に、全力を盡くして海軍再建に奔命し、前章に於て述べました通り、無條約時代の到來と歐亞の情勢に刺戟され、尨大な建艦に着手致しましたが、現在太平洋方面に配備されて居る艦隊勢力は、地中海方面に比較して、餘り優勢だとは申せません

スエズ運河以東に於ける配備狀況を一見致しますと、

支那艦隊（根據地香港）

巡洋艦甲級	四隻（ケント級）	
巡洋艦乙級	二隻（カーデッフ級）	
航空母艦	一隻（イーグル）	
驅逐艦	一〇隻	
潛水母艦	一隻（メッドウエー）	
潛水艦	一五隻	
河用砲艦	一八隻	
護衛艦	五隻	

測量艦　一隻
特務艦　數隻

東印度艦隊（根據地コロンボ及びツリンコマリー）

甲級巡洋艦　一隻（ノーフォーク）
乙級巡洋艦　二隻（エメラルド級）
スループ　六隻

濠洲海軍（根據地シドニー）

甲級巡洋艦　二隻（オーストラリア級）
乙級巡洋艦　三隻（シドニー級）
水上機母艦　一隻
驅逐艦　五隻
工作艦　一隻
測量艦　一隻
特務艦　九隻

新西蘭艦隊（根據地オークランド）

乙級巡洋艦　二隻（リアンダー型）
練習艦　一隻（ヴアイキング）
スループ　二隻
特務艦　一隻

印度海軍（根據地カルカッタ）

乙級巡洋艦　二隻
スループ　五隻
巡邏艇　一隻
測量艦　一隻
トロール　一隻
母艦　三隻

加奈陀海軍（根據地ハリフアックス）

驅逐艦　六隻
練習船　一隻
掃海艇　三隻

但し半數は大西洋に在り。

以上の如きものでありますが、私は事の序を以て、私の識る範圍内に於て、英國海軍艦艇の有つ性能と、その要目を擧げて見ることに致します。

先づ戰艦より申しますと、

艦名	排水量	主砲	副砲	速力	竣工
クイン・エリザベス	三二、一〇〇噸	三五糎八門	一五糎一三門	二五・〇節	一九一五年
ヴアリヤント	〃	〃	〃	〃	一六年
ウオースパイト	〃	〃	〃	〃	一五年
バーラム	三一、一〇〇噸	〃	〃	〃	〃
マレーヤ	〃	〃	〃	〃	一六年
ロイヤルソヴレン	二九、一五〇噸	〃	〃	二五・〇節	〃
ロイヤルオーク	〃	〃	〃	〃	〃
レベンヂ	〃	〃	〃	〃	〃
レゾリユーション	〃	〃	〃	〃	一七年
ラミリーズ	〃	〃	〃	〃	〃

ネルソン	三三、五〇〇噸	四〇糎九門	〃	〃	二七年
ロドネー	三三、九〇〇噸	〃	〃	〃	〃
レパルス	三二、〇〇〇噸	三八糎六門	一〇糎一五門	三一・五節	一六年
ソンド	〃	〃	〃	三門	〃
フレド	四二、一〇〇噸	〃	八門	一四糎三門	三一・〇節	三〇年

以上の他、ロンドン條約に依つて廢棄された戰艦二隻は、練習艦及び測量艦として就役して居ります。

これ等の戰艦は、今や悉く近代化せられましたが、改裝の目的は、主として空襲に對する防禦力を補強し、一面攻擊力をも增大し、艦體、機關、兵器等が改良され、速力も幾節かを增加せしめた筈でありますが、細目の點は嚴秘に附せられて居りますから知るを得ません。

目下建造中の新戰艦キング・ジョージ五世及びプリンス・オブ・ウエルスは一九三九年二月及び三月各淮水の運びとなり、又アンソン、ビーチーゼリコは本年秋頃何れも淮水する豫定であります

これ等主力艦の要目は、基準排水量三五、〇〇〇噸、主砲三六糎九門、速力は如何なる國の主力艦よりも五浬を速くして、巡洋戰艦フッドの三一節よりも速くなり、裝甲は厚さ一三吋に過ぎませんけれども、進歩せる製鋼術に依り著しい强靱性を有し、現在の最大爆彈と雖も之を貫徹することは出來ないやうにし、搭載飛行機は列强戰艦の何れよりも多く、その建造費は各六百万磅を要するとのことであり、尙本年三月には四万噸級の戰艦ライオン及びチメレーアの二隻が起工された旨報ぜられて居ります。

◇　◇　◇

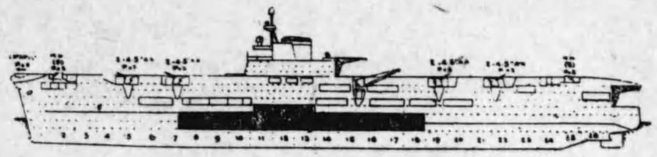
航空母艦に就いて見ますと、

艦名	排水量	備砲	速力	搭載機數
フューリヤス	三二、四五〇噸	一四糎一〇門	三一・〇節	五四機
アーガス	一四、四五〇〃	一〇〃 六〃	三〇・二〃	二七〃
イーグル	二二、六〇〇〃	一五〃 九〃	二四・〇〃	二七〃
ハーミーズ	一〇、八五〇〃	一四〃 六〃	二五・〇〃	二〇〃
カレージヤス	二二、五〇〇〃	一二〃 一六〃	三一・〇〃	八一〃
グローリヤス	〃	〃	〃	六三〃
アーク・ロイヤル	二二、〇〇〇〃	〃	三一・五〃	六〇〃

右の中イーグルは、支那艦隊に配屬され香港に常駐して居ります。

これ等航空母艦の中で最近竣工したアーク・ロイヤルを除けば、一九二三年に竣成せしハーミーズのみが航空母艦として建造せられた最初のものでありまして、他は凡て他艦種を改造したものであります。

英國戰艦ネルソン（33,500噸）



英國航空母艦アーク・ロイヤル（22,000噸搭載飛行機70機）

英國海軍は、大戰後永らく航空母艦を建造せず、右の改造航空母艦を以て實驗を重ねて參りましたが、一昨年久し振にアク・ロイヤル（二二、〇〇〇噸）が進水して、昨年十一月竣工致しました。

又、イラストリアス、ヴイクトリアス、フオーミダブル及びインドミタブルの四隻も一昨年起工せられて、今や其の工事は鋭意進められつゝありまして、一九四〇年には竣工の豫定であり、更に昨年末に於てインプラカブル一隻を建造することになりました。

これ等航空母艦は排水量二二、〇〇〇—二三、〇〇〇噸、速力三十節、搭載機の數は各艦七十機を有すとのことであります。

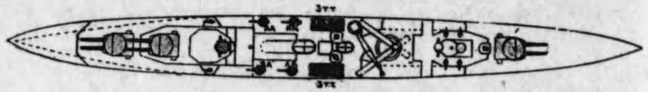
◇　◇　◇

甲級巡洋艦に就いて一通り申しますと、

艦名	排水量	備砲	發射管	速力	竣工
ケント	九、八五〇噸	二〇糎八門	五三糎八門	三一・五節	一九二八年
サフオーク	一〇、〇〇〇噸	〃	〃	〃	〃
コーンウオール	〃	〃	〃	〃	〃
バーリック	〃	〃	〃	〃	〃
カンバーランド	九、八五〇噸	〃	〃	〃	〃
オーストラリア	九、八五〇噸	〃	〃	〃	〃
キャンベラ	九、八五〇噸	〃	〃	〃	〃
ロンドン	九、八五〇噸	〃	〃	三一・三節	一九二九年
シユロップシヤア	九、八五〇噸	〃	〃	〃	〃
サセックス	〃	〃	〃	〃	〃
デボンシヤー	九、七五〇噸	〃	〃	〃	〃
ノーフオク	九、九三五噸	〃	〃	〃	一九三〇年
ドーセットシヤー	九、九三五噸	〃	〃	〃	〃
ヨーク	八、三五〇噸	〃	二〇糎六門 一〇糎四門	〃	〃
エクセター	八、三五〇噸	〃	〃	三一・〇節	一九三一年

以上十五隻でありますが、その内カンバーランド、ケント、ドーセットシヤー、サフオーク等は支那艦隊に配屬され、時に上海方面の戰地ニユースに、その姿を見受けることがありました。

先年我が神戸にも、ケント、カンバーランドなどが訪れて參りまして豪華な客船の如く純白に塗裝されたその艦容は、今倍港都人士の記憶に新たなるものがあるでありませうが、私は此の機會に於て、自大亞流者たるの非難を甘受する覺悟を以て、英國甲巡ケントの持つ威力と、外國軍事雜誌に記載せられて居る我等の甲巡那智とに就いて、其の戰鬪價を比較して見たいと思ひます。



英國甲巡エクセター（8,390噸）

基準排水量は、那智の一〇、〇〇〇噸なるに對しケントは九、八五〇噸でありますから其處に一五〇噸程の差がありますけれども、見た眼にはケントの方が大きく映り、何となく朗かに、何となくのんびりしてゐるやうであります、那智が強敵を迎へ擊たんとする士佐犬を想はすならば、ケントは長閑な春の陽にメーメーと啼く野羊の如き感じを與へます此の相違の據つて來るところ、艦體の强弱が決定されるのではありますまいか。

兩艦の主砲は、何れも最新式八吋砲でありまして、二聯裝砲塔が、那智は前部に三基、後部に二基の五砲塔十門なるに對し、ケントは前後に二基づゝ四砲塔八門であります。

既に主砲に於て二門の差があります、此の差が曾戰の場合、どういふ結果になるかと申しますと、同じコンヂションの下に、同樣な腕前を以て、同等に戰ふ爲には、那智級四隻四十門に對し、ケント級の四十門は五隻を揃へなければなりません、手取早く申しますと那智級四隻は、ケント級五隻と同等の價値を有つものであります。

對空高角砲は、那智の〇〇吋砲〇門に對し、ケントは四吋砲四門であります、數に於ては〇對〇でありますが、實力に於ては二と一位の差がありませう。

帝國甲巡那智

魚雷力はどうかと申しますと、那智の發射管（〇〇〇〇〇〇）〇〇門に對し、ケントは二十一吋發射管八門でありまして、之又〇對〇となつて居ります。

速力の點より申しますと、那智は三十三浬（〇〇万馬力）なるに對しケントは三一・五節（八万馬力）でありますから、其處に一浬半の差が生じます、實戰に於て此の差が物を言ふことになりますと、那智は夕陽を背にして陣取るとか、風上に在つて戰ふとか、好機會に惠まれる場合が多いのでありますが、ケントに至つては、自分に都合の好い時には何時も相手に退避されてしまひ、自分に都合の悪い場合は、頭からやつつけられる、と云ふ甚だ割の悪い場合が起り易いのであります。

對馬海戰の劈頭、東郷司令長官の執れる丁字戰法は、有名な敵前一齊

回頭に其の端を發して居りますが、その敵前回頭の如き大冒險戰術は、我が艦隊の速力が敵に勝つて居りましたればこそ斷行し得られたものでありまして、若し我が速力が敵に劣つてゐたとしましたならば、最早丁字戰法も乙字戰法も施す術はなかつたであります。

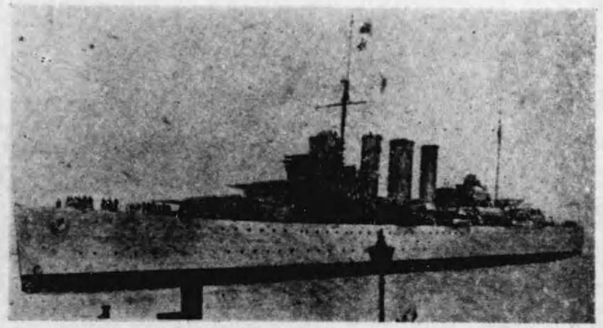
實戰に際して、斯かる理論的な傳倖ばかりを豫期することは出來ませんけれども、然も速力の優劣は、半理の差と雖も等閑視することは出來ない理由があるのであります。

現に各國新造主力艦を視まして、之に附與する各艦の速力が、砲力其の他を犧牲にして著增大され、殆ど巡洋艦にも匹敵する現狀にありますのは、あながち潛水艦や、航空機に備へんとする爲のみではありますまい。

防禦力としての裝甲は、那智の舷側〇吋、砲塔〇吋なるに對し、ケントの舷側は彈庫のみ四吋、砲塔は一吋でありまして、そこに格段の差を發見するのであります。

或外國の軍事雜誌が記載するところに據りますと、我が那智級に使用されて居る裝甲鈑は、〇〇鋼とか申しまして、其の强靱さは他の何れのものに比較して〇倍に當るとのことでありますから、それが若し事實であると致しますなれば、我が那智の防禦力は完璧に近いものと申すことが出來ませう。

飽く迄も攻擊の態勢を持して戰ふ場合、防禦力は第二義的のものである、と申すものもありますけれども、敵に迫り、有利な情況の下に、之に致命的打擊を與へますまでには、相當の耐久時を必要とし、多少の敵



英國甲巡ケント

彈に沈まぬだけの防禦力がなければなりません。

三笠を始め、第一戰隊六隻が行つた彼の敵前回頭の場合の如き、その好例を示すものであります。

ジャットランドの海戰に於て、英國巡洋戰艦クイン・メリーは獨逸巡洋戰艦デルフリンゲルの擊つた十二吋砲彈二發を受けて沈沒し同じく巡洋戰艦インデフアチガブルは、獨逸巡洋戰艦フオン・デア・タンの擊つた十一吋砲彈二發を受けて沈沒し、英國艦隊司令官ビーチー提督坐乘の旗艦ライオンも、獨逸艦隊司令官ヒツペル提督坐乘の旗艦リユツツオの擊つた十二吋砲彈一發の爲に、後部砲塔を破壞され、沈沒は免れましたけれども戰鬪力の大半を失ひ、乘組んで居た日本の觀戰武官下村海軍中佐が戰死を致しました。

同じ巡洋戰艦でありながら、斯く脆くも擊沈せられた原因が何處にあ

るかと申しますと、主なる理由の一として、英艦は上甲板防禦裝置が極めて劣弱であつた、と云ふことが擧げられて居ります、二万數千噸の大艦が、十二吋砲彈の一二發位をくらつて、直にお陀佛を極め込むやうでは、甚だ頼りないと申す他はありません。

英國甲巡は、見かけは誠に立派でありますけれども、力と云ふ點になると誠に頼りないものと見えまして、英國海軍將校達が、我が那智を見高雄を見、そして自分達の艦を省みまして、

『あれでこそ本當の軍艦だ、我々のはまるでブリキ張りではないか』

と惡口を言つたことがあります。

けれども、彼等海軍の將兵達が、

『居室は廣く取つて呉れ』『食堂が狹くては飯が食へん』『娯樂室はなるべく立派にしろ』

と云ふやうな遊山氣分や、豪勢な船客の如き注文を出し、容れられなければ尻込みする、と云ふことになりますと、造艦官たるもの、勢ひ、

『裝甲を止めて置け　大砲も少くしろ』『速力なんかどうでも好い』

と云ふやうな仕儀となり、結果はのんびりとした豪華船が出來上る次第であります。

『我が英國の軍艦は、植民地保護の任務に就く關係上、兵員の居室だけは……』

と辯明して居りますが、いや誠に御尤も至極と申さねばなりません。

それに比べまして、我が那智を見ますと其の値打がよくわかります。

たゞたゞ、戰ふために造られた艦、同じ一万噸でありながら、砲力を充實し、速力を高めた上に、防禦力を厚くすると云ふ、此の三大要素に就いては、何ぞ獨り英艦に勝るのみでありませう、米國甲巡ペンサコラや、佛國甲巡デユケーヌに較べましても悉く優秀を誇つて居ります。

我々は、自國の足らぬところ、劣れるところは率直に之を認め、三省以て發奮を促す道は良く識つて居ります、けれども私は、我が造艦に關する限り、感激の喜びを以て謳歌せずには居られません。

然らば我が國は、どうして斯くも優れた艦が出來るのでありませうか！

歐米造船學者の集中頭腦を常に凌駕して、何故斯くも優秀な軍艦が出來たのでありませうか、そこには勿論他に劣る點が無いとは申せません換言せば、幾多の點に於て犧牲が拂はれて居ります。

第一には居住性の粗末なことが擧げ得られませう。

兵員の住む所、居住に關する設備がすべて簡にして粗であります、體がやうやく入るやうな洗面所、頭を壓する食堂、窮屈な寢臺、少し贅澤を云ふ者は到底乘つて居れない實情であります、英米の兵士などは見たゞけで愛想をつかすでありませう。

嚴格を以て鳴る海の猛將が檢閲に赴いた際、此の有樣を見まして

『これではあんまりひどからう、もう少しなんとかせにやあ、乘員がかはいさうだ』

と呆れましたのは有名な話であります。

第二は航續力―航海し得る距離―でありますが、單艦なほ〇〇浬を航し得るとのことでありますから、さまで心配すべき程のものではありますまい。

斯く繰じ來りまして、第一の缺點は、忠勇な軍人精神に依つて解決され、第二は戰術的に正解されるものでありませうが、其處には、國防の重責を全うせんとする我が海軍獨特の計畫の跡を、まざまざと見ることが出來るのであります。

又建造費も隨分高價であります。

我が那智は二千七百万圓を越え、米國のソート・レーキ・シチーなどは三千四百万圓を要したとのことであります。

時代が違ひ、物價も騰貴して居たとは申せ一万噸の那智と、現主力艦「山城」（建造當時三万六百噸、十四吋主砲十二門、速力二十三節）との建造費が、ほゞ同額であるとは驚くべきでありまして、そこに兵裝の進化と、造艦技術の微妙さとを知ることが出來るのであります。

◇　◇　◇　◇

英國海軍が主力艦に次いで最も重要視して居りますのは、乙級巡洋艦であります。

六吋砲艦多數主義を政策とする英國海軍は、過去に於てジェネヴア軍縮會議を決裂せしめ、ロンドン條約に於て八吋砲艦の優勢を米國に譲りました。

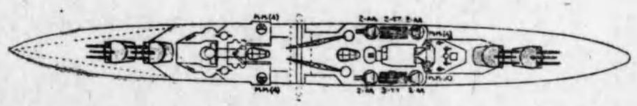
米國の大艦巨砲主義に對し、英國があくまで小艦多數主義を固執して止みませんのは、危大な屬領植民地、並びに貿易路保護のため必要とするのは申す迄もありません、然も皮肉なことには、英國は常に此の乙巡の不足に悩んで居るのであります。

現在保有して居る乙巡を視ますと、その先驅をなし、艦型を決定付けましたものは、歐洲大戰直前に建造され、驅逐艦の驅逐艦として紹介されたアレスーザであります。

次いで之を改良したC級、及びD級を建造し大戰に活躍せしめましたが、更に進んで七千五百噸級のE級、九千八百噸の植民地用F級となりました。

ワシントン條約後は、專ら一万噸甲巡のみを建造して參りましたが一九二九年、之が規定量に達しましたので、茲に始めてリアンダー級二隻を建造する事になりました時、偶々ロンドン軍縮會議が開かれ、工事が遷延致しまして、之が竣工を見たのは一九三三年でありました。

爾後英國は乙巡の最大排水量を六、〇〇〇噸乃至七、〇〇〇噸とし、尚此の最大型艦の建造は一定歩合に止め、なるべく條約量内にて多數の小型艦を得んとし、毎年三隻乃至四隻づゝを建造し以て新鋭艦のみ五十隻を揃へようとしたのでありますが、併も在來の乙巡が、次ぎ次ぎと艦齢に達して參りますので、此の目的を早急に達せんためには、毎年七八隻の割合で建造せねばなりませんでした、けれども今や無條約時代の到來を契機



1937年3月竣工せる英國乙巡サウサムプトン）9,000噸6吋砲12門）

とし、大型艦七十隻を目標として建造することになつたのであります。

英國乙巡の持つ性能は、建艦費を出し惜しんだが爲に、列强のそれに較べて著しく劣つて居り、攻、防、速の三點が、共に遜色ありますことは世界識者の等しく認むるところであり、亦英國の論者も之を自認し、非難の的となつて居りました。

現有乙巡の代表艦を掲げて見ますと、

艦名	排水量	主砲	副砲	速力
カレドン級	四、一六〇噸	一五・二糎五門	小口徑砲六門	二九〇節
ケープタウン級	四、一〇〇噸	〃	〃	〃
キユラソウ級	四、二九〇噸	〃	〃	〃
デスパッチ	四、八五〇噸	〃 六門	小高角砲九門	〃
エメラルド	七、五〇〇噸	〃 七門	〃	三二・〇節
リアンダー	七、〇〇〇噸	〃 八門	〃 八門	三三・五節
シドニー	〃	〃	〃	〃
アレスーザ	五、一〇〇噸	〃 六門	〃	三三・三節
サウサムプトン	九、〇〇〇噸	〃 一三門	〃	三五〇節

◇　◇　◇　◇

英國海軍には、嚮導驅逐艦と驅逐艦との二種があります。

尤もこれは英國ばかりでなく、歐米各國とも皆持つて居ります。

我が日本には此の名稱はありませんが、之に相當するものはあります

今迄に於て、嚮導驅逐艦と、普通驅逐艦とは、別に何等の相違も見られなかつたのでありますが、最近に建造される嚮驅を見ますと、排水量速力、武裝等が幾分勝つて居るやうであります、即ち一驅逐隊に一隻づつ配屬せられてゐる嚮導驅逐艦と、普通驅逐艦とを比較して見ますと、

艦種	艦名	排水量	主砲	高角砲	發射管	速力
嚮導驅逐艦	エキスマス	一、四五〇噸	四、七吋五門	小口徑砲七門	五三・三糎八門	三六節
驅逐艦	エクリップス	一、三五〇噸	〃 四門	〃	〃	三二・五節

英國驅逐艦ジヤヴリン（1,690噸12糎砲6門）

英國海軍は、一九三〇年以來、毎年八隻づつの驅逐艦を建造して居りまして、艦名はその頭字に、毎年順を追つてABCを附して居ります、一例を擧げて見ますと、

一九三〇年、A級（アカスタ級一三五〇噸型）
三一年、B級（バリスク級一三六〇噸型）
三二年、C級（クルーセーダー級一、三七五噸型）
三三年、D級（デフエンダー級同型）
三四年、E級（エクリプス級同型）
三五年、F級（フライヤーレス級同型）
三六年、G級（グレーハオンド級同型）
三七年、H級（ヒアロー級同型）
三八年、I級（イントリピッド級同型）

でありまして、その艦型の如きも一、三七五噸に一定されたやうでありますが、今回の大建艦計畫に依つて、或は變化を生ずるものと觀測されて居ります。

英國の現有する驅逐艦は、一七六隻、二二九、〇〇〇噸の多數に上りますが、各級代表艦の要目を擧げて見ますと

級別	艦名	排水量	主砲	高角砲	發射管	速力
A級	アントニー	一、三二〇噸	三糎四門	四糎二門	五三・三糎八門	三二・〇節
B級	ブリリアント	一、三六〇噸	〃	〃	〃	〃
C級	クレセント	一、三五五噸	〃	七・六糎一門	〃	三二・五節
D級	ダイアモンド	〃	〃	〃	〃	〃
E級	エクスプレス	〃	〃	〃	〃	〃
F級	フュリー	一、三二〇噸	〃	〃	〃	〃
G級	ヂプシー	〃	〃	〃	〃	〃
H級	ヒアロー	〃	〃	〃	〃	〃
I級	イントレピッド	一、三七〇噸	〃	小口徑七門	五三糎二〇門	三六節
J級	ジヤヴリン	一、六九〇噸	〃	六門	〃	〃

C級以後のものは、長さ九六、九一米、幅一〇、〇五米、吃水二、五八米であり、他に機銃五門を戴せ、馬力は三六、〇〇〇であります。

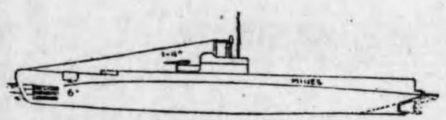
これ等の驅逐艦の外型を觀ますと、誠に平凡のやうでありますけれども、然も優秀な技術と、驅逐艦建造に永年の經驗を有する英國海軍が、大戰の實驗を土臺として、各艦型の利害を研究した上の產物であると致しますならば、理想に近い新鋭艦であるのはむしろ當然でありませう。

英國はこれらの新鋭艦を以て、逐次本國及び世界各地に派遣せられて居るものゝ全部を交代せしめんとするのでありまして、現に香港駐在中の第八驅逐隊はD級であつたと思ひます。

◇　◇　◇

英國は、現在六三隻、六五、〇〇〇噸の潛水艦を有つて居ります。

英國は、世界大戰に於て、獨逸同樣潛水艦を哨戒に、偵察に、封鎖に、或は監視に索敵に、あらゆる任務に就かせました、然も潛水艦に依つて自らを利したことよりは、潛水艦に依つて苦しめられたことの方が、どれ位多いか知れないのであります。



英國潛水艦 ポーパス（1,520水上噸發射管6門）

さすがに優越を誇つたグランドフリートも獨逸潛水艦のためには、北海を追はれ、又ある時機にあつては國家の存亡、國民の死活をすら脅威せられるに至つたのでありました。

さればこそ大戰以後、潛水艦を仇敵視し、軍縮會議に於ては執拗に之が全廢或は大縮減を主張し續けたのであります。

然しながら時代の趨勢は、潛水艦を防禦的武器として、奇襲部隊の優

者として、益々發達せしめつゝあります故に、潛水艦の目標となるべき水上艦艇を多數保有して居る英國も、亦列國に劣らざる潛水艦兵力を備へ、之を最も効果的に使用する方策を樹てつゝあることは想像し得られます。今代表的潛水艦を擧げて見ますと、

艦名	排水量	速力	備砲	發射管
クライド	水上一、八五〇噸 水中二、七一〇噸	水上三二・五節 水中一〇・〇節	一三糎一門	五三糎六門
ナーワル	水上一、五二〇噸 水中二、一四〇噸	水上一六・〇節 水中八・八節	一〇糎一門	〃
サルモン	水上 六七〇噸 水中 九六〇噸	水上一三・八節 水中一〇・〇節	八糎一門	〃
シーウルフ	水上 〃 水中 〃	水上 〃 水中 〃	八糎一門	〃

右の中の優秀艦一五隻は、支那艦隊に配屬せられ、香港に常駐して居りますことは英國東洋政策の反映とも見られるのでありまして、今後新嘉坡軍港に有力な潛水隊が配備せられ、有事の日、積極的行動に出でんとする噂も一笑に附し去るべきでないと思ふのであります。

斯くて忍從茲に十五年、此の頽勢を何時かは既到に挽回せんと、虎視眈々たりし英國海軍が、ゆくりなくも無條約時代の春に廻り會ひ、又地中海及び極東方面に於ける情勢が、彼等の軍備大擴張に對し、旱天の慈雨にも等しい時機と理由を與へることになりました。

色褪せ初めんとしたユニオンジヤックに、再び往年の如き陸離たる光彩を副へ以て東西の大洋を席捲せんとする彼等の意氣の、尙未だ衰へざることは視るべき必要があります。

（ロ）アメリカ

一九三八年一月五日、ルーズヴエルト大統領が議會に送つた國防豫算五億五千三百二十六万弗（一九三八——三九年度分）は、議會に於て一七八票對一五票と云ふ壓倒的大差を以て下院を通過したのでありますが上院も亦何等特別の修正を加ふることなく之を承認し、茲に米國の新軍備擴張計畫は決定成立したのであります。

然して一九三四年に決定したヴインソン案は、條約の最大限である一〇二隻、二十万噸建造を規定して居りますけれども、米國海軍當局は、該法案の規定した建艦のみを以てしては、各國の建艦狀況に比較して見るとき、尙不足であるといふ理由を以て、ヴインソン案の改訂を求め、既定計畫の二割を增大すべく、第二ヴインソン案として協賛を求めたのであります。

この補充計畫により目下建造中又は未起工に屬する潛水艦以上の有力艦は左の通りであります。

主力艦	六隻
航空母艦	二隻
巡洋艦乙級	六隻

驅逐艦			三五隻
潜水艦			一六隻

であります、これが完成されましたならば、

主力艦		一五隻	四六四、〇〇〇噸
航空母艦		五隻	一二〇、〇〇〇噸
巡洋艦	甲級	一八隻	一七一、〇〇〇噸
	乙級	一七隻	一四一、〇〇〇噸
驅逐艦		二二三隻	二七六、〇〇〇噸
潜水艦		九一隻	八五、〇〇〇噸
合計		三六九隻	一、二五七、〇〇〇噸

（其の他の艦艇は省略）

の現有勢力等を加算致しますと、恐らくは英國同様二百万噸に近い大海軍が出現することになりませう。

只今建造中の主力艦二隻は、排水量各三万五千噸でありますが、ワシントン電報の報ずるところに據りますと、新計畫の主力艦排水量は四万五千噸、十六吋砲を裝備（十八吋砲は着彈距離が延長するに從ひ照準が不正確となるとの理由で放棄）する旨、英國政府に通告したさうでありますから、爾後建造される主力艦は悉く四万五千噸となり、他國に率先して大艦を建造することになりました。

由來米國海軍の使命とするところは、大西太平兩洋の防備にありまして、艦艇はそれを目標として建造せられたものでありますが、其の後自國の經濟發展を東洋に求め、その政策を遂行せん爲には、是非共強力な海軍を必要とするに至り、やうやく世界第三位の海軍國として、彼の歐洲大戰を迎へたのであります。

當時獨逸海軍は、世界大戰勃發の始めより、一九一六年米國海軍擴張開始の時に至るまで、依然第二位を保ち、然も其の造船所に於ては晝夜兼行で造艦に多忙を極めて居りました、或は場合によつて戰前よりも却つて優勢となりはせぬか、と云ふ懸念がありましたのみならず、當時未だ戰爭の勝敗も不明でありました上に、米國へは公然と敵意をさへ表して居りましたから、若し獨逸にして戰勝するならば、或は米國へ報復し來ることは極めて有り得べきことでありました。

從つて此の危險を防止するためにも、海軍强化の必要が、米國の上下を擧げて叫ばれてゐたのであります。

然るに大戰終了と共に獨逸海軍は全滅し、此の方の脅威は自然消滅致しましたけれども、同時に現れて參りましたものは、一九一二年の日本人土地所有禁止法案通過以來、日米間の空氣が險惡化して參りました事と、一方英米間に於ける經濟關係の衝突とでありました。

大戰中、米國が未だ中立を守つて居りました當時、米國の海上貿易に對して英國海軍が加へた壓迫は、米國々民の腦裡に深く刻まれて居りまして、米國參戰以後に於きましても、此の悪感情は殘つて居たのであります。

その結果として、將來再び斯かる屈辱と不利とを蒙らぬ爲には、英國と同等、或はそれ以上の海軍力を保有せねばならぬ、と云ふ輿論が勃然として起つて參りました、即ち「世界第一位の海軍に劣らざる海軍」の

叫びであります。

時の大統領ウヰルソンは、此の擴張案と國際聯盟草案とを携へて、巴里講和會議に臨んだのでありますが、此の手製の草案が物にならない見極めが付きますと、直に歸つて自國民に對し、海軍擴張の餘儀なきことを說明し、茲に尨大な建艦に着手したのであります。

其の後の經過は、英國の項に於て述べましたから重複の煩を避けますが、此の時以來、米國の注視が疲弊せる歐洲より、隆々と勃興しつゝある極東日本の方向に轉じて參り、ワシントン會議以來、建艦の目標は再轉して對日軍備の强化となり、兩度の軍縮會議に於て、條理ある日本の要求には一切耳を藉さず、五・三の比率を押し通しました原因も、由來するところは此處にあるのであります。

第二次ロンドン會議に於て、時代の變化には眼を蔽うて、又も五・三の比率維持を固執して會議を失敗に終らしめ、「條約は廢棄されても米國は此の比率を維持しなければならぬ」と豪語致しましたのも、一は東洋政策の强行に準備せんが爲と、一は滿洲事變當時、自國海軍力の缺陷の爲に喫せしめられた苦盃の味を、スチムソンに代つて今なほ忘れかねて居るからだ、と想像し得る理由があるのであります。

滿洲事變以來、米國海軍の主力部隊が、擧つて大西洋より太平洋岸に移り、メーアアイランド其の他の軍港に常駐せられて居りますことは周知の事實であり、現在では主力艦十五隻の中、十三隻までが太平洋岸にありますが、本年度の海軍大演習は久し振に大西洋に於て行はれ、歐洲方面情勢の緊迫と共に再び太平洋に歸つて參りました。

戰艦			二二隻（十五隻の中）
航空母艦			三隻
巡洋艦	甲級	一五隻（一八隻の中）	
	乙級	九隻（一〇隻の中）	
水上機母艦		二隻（同小型八隻）	
驅逐母艦		四隻	
驅逐艦		八一隻（二〇六隻の中）	
潜水母艦		五隻	
潜水艦		二八隻（八五隻の中）	
潜水救難艦		二隻	
敷設艦		六隻	
掃海艇		一五隻	
特務艦		一〇隻	
其の他小艦艇若干隻			

之には亞細亞艦隊が含まれて居りません、比律賓のカヴイテ軍港には甲級巡洋艦を旗艦として、左の艦艇が配屬され、上海を中心として、長江筋、及び南支方面（厦門、汕頭、廣東）の警備に當つて居ります。

甲級巡洋艦	一隻（オーガスタ）
乙級巡洋艦	一隻（マーブルヘッド）
驅逐母艦	二隻
驅逐艦	一二隻
潜水母艦	一隻
潜水艦	六隻

潜水救難艦	一隻
補助航空母艦	二隻
砲艦	一〇隻
掃海艇	二隻
特務艦	三隻

以上の他、サモア、グアム方面には、特務艦艇十一隻があります。

私は英國の例に倣つて、米國海軍艦艇の有つ性能と、その要目の概略を記して見ることに致します。

◇　◇　◇　◇

先づ現有の戰艦に就いて申しますと、

艦名	排水量	主砲	副砲	速力	竣工
ウエスト ヴアジニア	三、八〇〇噸	一六吋砲八門	五吋砲二門	二一・〇節	一九二三年
コロラド	三、一〇〇噸	〃	〃	〃	〃
メリーランド	三、五〇〇噸	〃	〃	二一・〇節	二一年
カリフオルニア	三、六〇〇噸	一四吋砲三門	〃	〃	〃
テネシー	三、三〇〇噸	〃	〃	二一・〇節	二〇年
アイダホ	三、四〇〇噸	〃	〃	二一・五節	一九年
ニユーメキシコ	〃	〃	〃	〃	一八年
ミスシツピー	三、〇〇〇噸	〃	〃	〃	一七年
アリゾナ	三、六〇〇噸	〃	〃	二一・〇節	一六年
ペンシルバニア	三、一〇〇噸	〃	〃	〃	〃
オクラホマ	二九、〇〇〇噸	〃	一四吋砲一〇門	〃	二〇・五節	〃
ネヴアダ	〃	〃	〃	二〇・五節	〃
ニユーヨーク	二七、〇〇〇噸	〃	五吋砲一六門	二一・〇節	一四年
テクサス	〃	〃	〃	二一・〇節	〃
アーカンソー	二六、一〇〇噸	二吋砲二門	〃	二〇・五節	二年

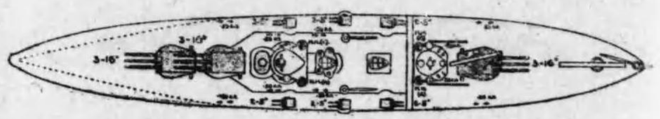
以上は最近發表せられた要目でありまして、爾來遂年改裝が施され、只今では米國海軍獨特の籠マストも見られなくなりました。

ワシントン條約後、米國戰艦の搭載する主砲の仰角は、列强の戰艦に比較して、著しく低くなつて居る點が問題となり、又速力の劣ることも憾みの種となつて居りました。

然し現在は、新式砲火指揮裝置を施し、主砲の仰角を引上げ、汽罐を更改し、上甲板防禦裝甲は補强され、高角砲を增加するなど、あらゆる點に亘つて改裝されましたから、其の威力は相當强化せられたものと想はれるのであります。

右の他米國には、ロンドン條約に依つて廢棄されたワイオミング、ユータ、フロリダの三戰艦がありまして、現在では特務艦として就役して居ります。

御承知の通り、米國が右三艦を廢棄する代償として、我が國も亦比叡一隻を犧牲とせねばなりませんでした、米國の三隻に對する我が一隻は一見甚だ割のよいやうに思はれますけれども、米國の三艦は悉く老朽、然も備砲は十二吋なるに對し、我が比叡は十四吋砲を搭載し、速力の點に至つては、格段の相違がある點に考へ及びますならば、決して安價な



建造中の米國戰艦ノース・カロライナ（35,000噸1941年竣工の豫定）

代價であつたとは申されません。

されども比叡は、現在練習艦として海のつはもの達の輝かしい夢を乘せて居り、さきには、滿洲國皇帝陛下日本御訪問の御途次御召艦たるの光榮に浴し、亦先年神戸沖に行はせられし觀艦式には、畏くも大元帥陛下の御召艦として晴の式場に大任を果し、雄姿颯爽今なほ我が海軍にありますのは切めてもの慰めであります。

最近ニューヨーク電報の傳へるところに依りますと、昨年度に起工せられたる米國新主力艦四隻の性能は、現在建造中の主力艦ワシントン、ノースカロライナ二隻と同型でありまして、主砲十六吋（三聯裝三基九門？）速力二七・五節、裝甲十六吋の豫定であるとのことでありますが、艦體、機關は一層優秀となる見込であり、一面四万五千噸型新主力艦の設計は目下着々と研究が進められ、數ヶ月以内には設計を終つて造船臺上のものとなる管であり、その性能はワシントン級同樣十六吋砲九門でありますが、速力に至つては實に三十二乃至三十三節にも及び、裝甲の如きも十六吋以上となる豫定とのことでありまして、航續力の如きも增大せられてゐると考へられる理由があり、彼等が如何に渡洋作戰の準備に腐心しつゝあるかを判知することが出來るでありませう。

◇　◇　◇　◇

次ぎに、主力艦を補佐し、その機能を發揮せしめる爲に必要な補助艦の中、甲級巡洋艦に就いて視ますと

艦名	排水量	主砲	副砲	速力	竣工
ペンサコラ	九、一〇〇噸	二〇糎一〇門	三・七糎四門	三・七節	一九三〇年
ソートレー	〃	〃	〃	〃	二九年
キシチー	〃	〃	〃	〃	〃
ノーサンプトン	九、〇八〇噸	〃	九門	〃	三〇年
チエスター	九、一〇〇噸	〃	〃	〃	〃
ヒユーストン	九、〇八〇噸	〃	〃	〃	〃
ルーイス	〃	〃	〃	〃	三一年
ヴイルシカゴ	九、三〇〇噸	〃	〃	〃	〃
オーガスタ	九、〇八〇噸	〃	〃	〃	〃
ポートランド	九、八〇〇噸	〃	〃	〃	三三年
インデアナポリス	九、九五〇噸	〃	〃	〃	三三年
アストリア	〃	〃	〃	〃	三四年
ニユーオリアンス	〃	〃	〃	〃	〃
ミネアポリス	〃	〃	〃	〃	〃
サンフランシスコ	〃	〃	〃	〃	〃
タスカルーサ	九、九七五噸	〃	〃	〃	〃

クインシー　九、三五噸　〃　〃　〃

米國巡アストリア甲

「日本の特型二十四隻と我々の驅逐艦全部とを取替へても惜しくない」

と羨望の歎聲を洩らしたのは有名な話であります。その後一九三二年に至り、やうやく驅逐艦建造を開始し、デューイ級三隻が起工され、次いでフアラガット級同型艦五隻が建造されました、其の要目は、排水量一、三六五噸、備砲一二・六糎五門、小口徑砲八門、發射管五三・三糎八門（四聯裝二基）速力三七節であります。

その後に起工された二十八隻の新艦は、排水量が一、五〇〇噸に增大されました、又一九三三年度臨時建艦計畫の中には、ポーター以下一〇隻の響導驅逐艦が含まれて居ります、要目は排水量一、八五〇噸、備砲一二・六糎五門、機銃八門、發射管五三・三糎八門（四聯裝二基）速力三七節でありまして、これは明らかに我が特型に抗するものであります

これ等の艦型は、前部甲板が一段高くなつて居り司令塔下より艦尾までは、一段低くなつてゐますので前の水平甲板艦に對し、中斷甲板艦と呼ばれて居ります。

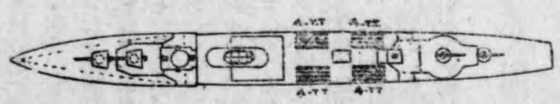
只今新建艦計畫に依つて、新造されつゝある驅逐艦は、何れも一、五〇〇噸前後を基準とし、渡洋作戰に於ける耐波性に重點を置き、面目を一新しつゝあるとのことでありますから、之が完成致しました曉には米國海軍の水雷戰隊も、昔日に見られぬ新鋭艦に依つて充實されることでありませう。

◇　◇　◇

米國の潛水艦は一九三九年一月現在に於て、九一隻八五、〇〇〇噸でありました。

これら在來のものの中には老朽艦が多く、英佛のそれに比較して艦齡に就いて觀るも優勢だとは申されません、試みに一二の代表艦を擧げて

1938年7月竣工せる米國驅逐艦クレーヴン（1,500噸5吋砲4門）



見ますと、

艦型	艦名	排水量	速力	發射管	備砲	進水年
S型	S四八	水上一、〇〇〇噸 水中一、四五八噸	水上一四・八節 水中一一・〇節	五三・三糎五	一〇糎一	一九二〇年
V型	V七	水上一、五四〇噸 水中二、二五〇噸	水上一七・〇節 水中八・〇節	〃	〃	三年

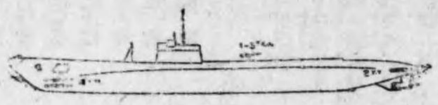
一九二五年、太平洋上に擧行せられし米國海軍大演習に於て、航空母艦ラングレーの華々しき活躍に引替へ、艦隊戰闘に參加した潛水艦は種々の故障を續出し、遺憾なくその無能ぶりを發揮したものと見えまして時の司令官より、

『凡そ潛水艦位厄介なものはなからう』

と云ふやうな惡評を蒙りましたのは著名な事實であります。

戰場に於て故障のため動けなくなつたり、敵驅逐艦に救助を求めるやうな潛水艦でありましては、亟勵ばかりが如何に揃つて居りましても甚だ厄介な存在に相違ありませんが、然し現に建造中のものは、東洋作戰を基調として計畫せられた、巡洋潛水艦とも申すべき大型の精鋭であると傳へられ、之が完成後は兎角の批評ある米國潛水戰隊も、艦隊から邪魔者扱ひにされるやうな不名譽のものではなくなるでありませう。

米國潛水艦パイク（1,310噸水上21節20力速水上6門）（6門發射管）



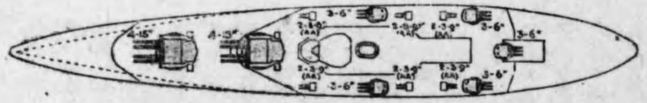
（八）フランス

佛蘭西の惱みの種となつて居りますものは、獨逸の復興であり、伊太利の勃興でありますが、就中最も脅威を感じて居りますのは、獨逸より加へられる復仇でありませう。

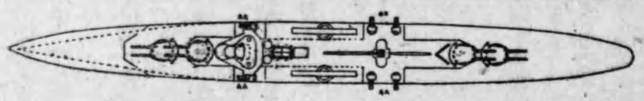
一九三五年、ドイツが再軍備を宣言し、ラインランドに軍を進める一方、海軍再建に着手致しました日から、ヴエルサイユ會議に於て約束された、獨逸に對する唯一の『安全保證』は著しく信賴性を薄弱ならしめて來ましたから、佛國も亦國防の建直しにかゝらねばなりませんでした

一昨年度豫算に於て、百二十億フランに達する軍備充實特別支出を計上致しました他、更に一昨年二月には、百九十億フランの巨費を投じて四ヶ年繼續の大國防計畫が議會を通過し、茲に積極的に、飛躍的に、大軍擴の波に乘つたのであります。

フランス海軍の現有勢力は、



水進月1939年1（35,000噸）ユーリシュリュー級戰艦佛國の中の建造

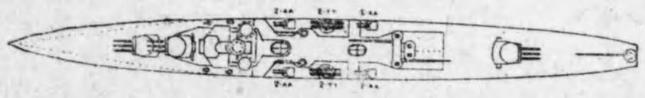


佛國甲巡アルヂエリー（10,000噸）

主力艦	七隻	一六二、九四五噸
航空母艦	一隻	二二、一四六噸
水上機母艦	一隻	一〇、〇〇〇噸
甲級巡洋艦	七隻	六九、七五〇噸
乙級巡洋艦	一二隻	八四、六三七噸
驅逐艦	五九隻	一一三、八八一噸
潜水艦	七七隻	七四、八五四噸

（其の他の艦艇は省略す）

合計百六十四隻（五三八、二一三噸）でありまして、目下建造中もしくは準備中と目される三五、〇〇〇噸級戦艦四隻、乙級巡洋艦三隻、航空母艦二隻、驅逐艦二三隻、潜水艦二四隻を加へれば、その總計は二百二十隻（約八十万噸）にも達します。



佛國乙巡マルセエーズ（7,600噸6吋砲9門）

從來佛國の造艦能力と工事進捗率は、他の列強海軍に比べて著しく遜色あるを常として居りますから、今世界の軍備擴張に應じて建艦に着手致しましても、海軍に關する限り相當の年月を要することゝ思はれるのであります。

斯くて佛國は、一朝有事の秋、英國、ソ聯等の協力を期待致しますためには、佛蘭西自身も亦、兩國救援の義務を忠實に履行し得るだけの用意がある、と云ふ事實を示す必要があり、又ローマ、ベルリン樞軸の強化や、獨伊兩國の軍備擴張や、或は地中海並びに東洋方面に於ける新情勢發生等の爲に、いよ〳〵國防力の擴大強化に拍車をかけ、時代趨勢の潮流へ押出されるに至つたのであります。

今や歐洲の風雲混沌として、何時晴るべしとも見えぬ狀勢下に置かれて居る佛國海軍は、英佛海峽沿岸、地中海沿岸、北アフリカ屬領地沿岸等を守るに忙しく、ために極東へ派遣せられてゐる艦隊勢力は、英米兩國のそれに比較して著しく劣つてゐるのは當然でありまして、現に西貢を根據地として、佛領安南並びに上海を中心として長江筋に於ける自國民の生命財産を護り得る程度以上に出て居ないやうであります。

只今東洋に在る艦艇を擧げて見ますと、

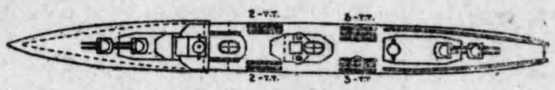
乙級巡洋艦	二隻（ブリモーゲ、ラモットピケ）
砲艦	八隻
河用砲艦	一〇隻
測量艦	三隻

でありまして、最近に至りある種の艦艇が增派せられたやうに報道されて居りますけれども、確證あるまでは記述を差控へておきます。

日本の南方進出に依つて東洋唯一の植民地佛領安南が、漸次脅威せられんとするを怖るゝ佛國は、蔣政權援助に狂奔しつゝある一面に於て、日本の海南島占據の事前不服申し入れや、こと更に西沙島領有聲明などを發表致しまして、我が軍事行動を牽制せんとするなど、極めて非妥協的排日的態度に出て居りましても、東洋に於ける海上武力は微々として消極的な觀があるやうであります、佛國海軍の現有勢力を以てしては、

到底東洋方面に有力な海軍を派遣する餘力が無いのでありまして、ひたすらに外交的手段に依り、英米ソ聯などの力を借り、日本を制壓せんとする魂膽があるに據るからであります。

傳へられるところに據りますと、フランスは日露戰役當時、露國太平洋第二艦隊や第三艦隊を在泊せしめ、中立義務違反として物議を釀せしカムラン灣をば、今又英米ソ聯等の利用するを認めるとのことでありますが、果して然りとするならば、斯くの如き他力本願の招來する結果が如何なるものであるか、佛蘭西人と雖もやがて廻り來る因果應報の理の當然さを識る時が參るでありませう。



ルードガモ艦驅逐國佛の工竣月6年1938
（2,884噸5,5吋砲8門）

佛國の主力艦ブルタニュー、ローレーン、ブロバンス、クールベー、ジャンバール、パリの六隻一三三、一三一噸と、甲級巡洋艦十隻、一〇五、九二五噸、及び乙級巡洋艦九隻、五八、八二五噸の中、乙巡一、二隻の他は何れも地中海方面に在りまして、太平洋方面では英米海軍のそれに比較して、極東問題に少し緩遠いやうでありますから之を剽變し、我が日本と同樣の立場に在つて、日本と同樣に潜水艦の必要を主張して參りました關係上、佛國の奇襲艦艇に就いて少しく述べることに致します。

◇　◇　◇

世界列强の中、驅逐艦建造に最も熱心であり、優秀艦を多く持つて居りますのは佛國でありますが、又嚮導驅逐艦の名の下に、世界最大の艦型を持つて居るのも佛國海軍であります。

一九三四年度の建造案にかゝるボルタ（一九三八年竣工）の如きは其の排水量實に二、九三〇噸にも及び、茲に至つて最早驅逐艦と云ふよりは巡洋艦の部に入るべきであり、我が乙巡夕張よりも大きな排水量を有つて居りますのは興味ある問題であります。

試みに英國乙級巡洋艦C級中のカレドンと、佛國の代表的嚮導驅逐艦ル・ファンタスクの性能とを比較して見ますと、

艦名	排水量	主砲	高角砲	發射管	馬力	速力
佛國驅逐艦ル・ファンタスク	二、五六五噸	一四糎五門	三・七糎四門	五五糎九門	七四、〇〇〇	三七
英國巡洋艦カレドン	四、一八〇噸	一五・二糎五門	七・六糎六門	五三・三糎八門	四〇、〇〇〇	三九

右の表を見てもわかりますが、カレドンの六割の排水量を有つル・ファンタスクが、高角砲に於て一歩を譲る代り、一五・二糎新式一四糎砲の性能は、勝るとも劣らぬものがあると言はれ、魚雷力は遙かにカレドンを凌駕し、馬力、速力に至つては比較にならぬ程の相違があるのであります。

之は、常に英國海軍の頭痛の種となつて居りますが、斯くの如く列强の同艦種に比較して、甚だしく大型でありますのは、佛國がロンドン條約に加盟せず、自由に建艦することが出來たからでありまして、奇襲を本務とする驅逐艦が巡洋艦の如く大型となりました結果、戰術上如何な

る利害影響を及ぼすものかは、專門家の所論に委せねばなりませんが、少くも對馬沖の夜襲戰に於ける我が艦艇の如き行動を、彼等の上に待ち望むは至難のことでありませう。

代表艦の要目を擧げて見ますと、

艦名	排水量	主砲	高角砲	發射管	速力
シムーン級	一、三九噸	三糎四門	五七粍 二門	五糎六門	三三・〇節
リンクス級	二、三六〃	〃 五〃	一三〃 八〃	〃	三五・五〃
リオン級	二、四六〃	一四糎五〃	三〃 四〃	〃	三三・〇〃
モガドール級	二、五六九〃	〃	〃 四〃	〃 一〇門	三八・〇〃

◇　◇　◇

佛國が潜水艦に期待するところ、大なるものがあるのは申すまでもありません。

佛國の海軍政策が、對英には守勢實力對抗、對獨には絶對優勢、對伊にば現狀優勢を維持を目標とし、尙地中海西部の制海權を確保して、植民地との交通路、陸兵輸送路の安全を期することにある以上、英國に對し、水上艦艇の劣勢を補ふ意味に於て、亦地理的環境に應ずる上より見ても、空軍と潜水艦の活用に俟たねばならぬ理由は、充分に肯定されるところであります。

代表的のものを記して見ますと、

艦名	排水量	速力	備砲	發射管
アルゴー	〔水上 一、三九九噸 水中 二、〇六〇〃〕	水上一七節 水中一〇〃	一〇糎二門	五糎二門
シュールクーフ	〔水上 二、八八〇〃 水中 二、三四〇〃〕	水上一八〃 水中一〇〃	二〇・三糎二〃	〃 一四〃
オリオン	〔水上 五五八〃 水中 七八七〃〕	水上一四〃 水中九〃	七・五糎一〃	〃 八〃

以上は地中海及大西洋方面に配備されて居りますが、四隣の狀勢及び海軍政策の要望するところに依り、來る一九四二年迄には、航洋潜水艦、沿岸防禦用潜水艦を併せて、十三万噸を建造維持せんとする計畫があると傳へられて居ります。

（二）ソビエート聯邦

一九三八年一月十五日、ソビエート聯邦人民委員會議長モロトフは、『日本を始め、資本主義國家が海軍々縮に同意しない事實、並に伊太利が地中海制覇を企てつゝある事實を考慮すれば、ソ聯も亦國力に相應する海軍を保有することは、極めて必要である、政府は斯かる必要に應じて急速に、又多量に建艦し、海軍力を補强するやう準備して居る』と豪語し、從來の赤軍より海軍部を分離して獨立せしめ、新に海軍人民委員部を創設してスミルノフを委員長に任命し、積極的に海軍建設に乘出して參りました。

空陸軍に於て、世界一强力を誇るソビエート聯邦が、更に海軍々備に

於ても擴張を計畫するに至つた原因を尋ねて見ますと、ソ聯の陸海空軍の實權を握つて居る、國防相ウオロシーロフの勢力を失墜せしめんとする一手段であつたとも云はれ、その反面に於て日獨伊の假想敵國を第三國の手に依つて牽制する爲には、有力な海軍を持たぬ以上英米佛の仲間に入つて外交工作をなし得ない關係もありますので、遽に海軍力の擴充强化を計るに至つたとも申されて居ります。

理由は何れにありとしましても、我等を假想敵國として海軍々備が計畫せられて居る以上、それに對して吾人も亦當然警戒を要することは言を俟たぬところであります。

殊にバルチック海と白海とを結び、大運河を掘つて本國から自由に北海に出られるやうにして居りますことや、北氷洋を廻つて極東に達する航路を實驗濟にして居ります事などは、油斷を許さないものがあります

只今ソ聯海軍は、バルチック艦隊を主力として黑海、白海裏海、太平洋の各艦隊と、黑龍江戰隊とに分たれて居りますが、其の現有勢力を擧げて見ますと、

主力艦（舊式）		四隻	九四、〇〇〇噸
航空母艦		一隻	九、〇〇〇噸
巡洋艦	甲級	三隻	二五、〇〇〇噸
	乙級	六隻	二八、〇〇〇噸
驅逐艦		約二二隻	約二九、〇〇〇噸
潜水艦		約一七〇隻	約九〇、〇〇〇噸
合計		約二一〇隻	約二七五、〇〇〇噸

（其の他の艦艇は正確なる數字不明）

であります。

そして新建艦計畫の內容は、

職　艦　三隻（三萬五千噸級十六吋砲八或は九門）
航空母艦　一隻（一二・〇〇〇噸）
甲級巡洋艦　七隻（八千噸級七・一吋砲九門）
其の他小艦艇
合計三十數隻、約十六万噸であると報道されて居ります。

目下建造中にかゝるものは、

甲級巡洋艦	三隻
乙級巡洋艦	二隻
驅逐艦	五隻
潜水艦	三〇隻
碎氷艦	六隻

等でありまして、これ等はレニングラード、ニコラエフ、セバストポール、ウラヂオなどの造船所で建造、或は組立てられて居ります。

然しソビエート聯邦の重工業は、五ヶ年計畫を重ねて相當に發達して居るとは云へ、現在の國內工業の技術を以てしては、職艦は勿論のこと殊に近代式裝備を誇る優秀艦の建造は不可能事と視られて居ります。

現に建造中の乙巡一隻は國外で建造されて居り、たとへ國內に於て建造するにしても、その技術材料等は英國、或は米佛等より供給を受けねばならぬものと想像されて居ります。

海に眼を轉じたソビエート聯邦が、北海方面に於ては獨逸に對し、極

東に於ては日本に對抗すべく、海軍々備の再建に奔命しつゝあるのは御承知の如くでありますが、彼の滿洲事變發生以來、極東方面に相當優勢な艦艇を常備して居りますことは、我々の最も關心を要し、最も注目せねばならぬところであります。

現在ウラジオを根據地として、配備されて居る艦艇は左の如くであります。

ソ聯驅逐艦レニングラード（2,900噸13糎砲5門）

驅逐艦	一〇隻
潛水母艦	一隻
潛水艦	約六〇隻
河用砲艦	一三隻
河用砲艇	約三〇隻
魚雷艇	約八〇隻
特務艦	一五隻
河用特務艦	一隻
警備艦	四隻
碎氷艦	五隻

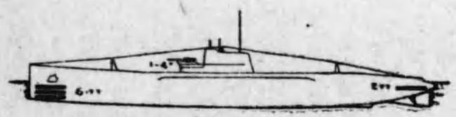
彼の正勇山（張鼓峯）事件が突發致しました當時、是等の艦艇が活發な動きを見せてその任務の片鱗を現しましたことは、將來日ソ相戰はんとするとき、日本海の波浪は相當に高かるべきを豫報するものでありまして、之に對應すべき我々の準備は常に怠り得ないのであります。

序ながらそれら驅逐艦、潛水艦の性能に就いて述べますと、元來ソ聯邦の驅逐艦群は、大戰當時の舊式のものでありまして他は悉く建造中であります。

代表的のものを擧げて見ますと、

艦名	排水量	主砲	高角砲	發射管	速力
ヴォロダルスキー	一、六一〇噸	四吋四門	三吋一門	三吋？九門	三三節
レーニン	一、三六〇〃	〃	〃	〃	〃

ソ聯全體の潛水艦勢力は約一七〇隻、九〇、〇〇〇噸と傳へられて居ります、果して事實と致しますならば、正に世界第一であります。



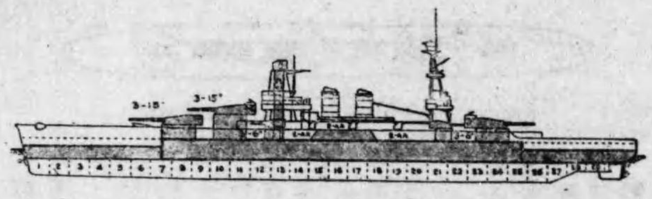
ソ聯潛水艦デカブリスト（896水上噸長85米水上速力15節10糎砲1門高角砲1門機銃2門發射管8門乘員44人）

然しながらソ聯の實情は、只何事も『約』でありまして、その眞相は一切不明と申す他はありません。

代表的潛水艦の要目を擧げますと、

ガリバルディッ級、排水量水上一、〇三九噸、水中一、三三五噸、速力水上一五節、水中八節、備砲一〇糎砲一門、小高角砲一門、機銃一門、發射管五三糎六門であります。

何れに致しましても、ソ聯海軍の再建が、當然日本を目標とし、その潛水艦を以て日本の大陸交通路線と、通商とを破壞することに在るのは明白であり、殊に彼等が海軍再建の第一歩を踏出すに際し、潛水艦を選びましたのは、彼等の策略と合致するばかりでなく、潛水艦が他の艦種に比較して、急造可能なるに在つたことが想像され得るのであります。



伊太利戰艦ヴイットリオ・ヴエネト（35,000噸）

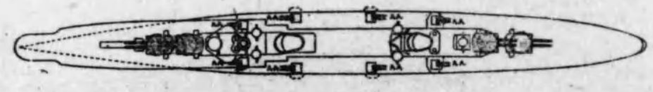
けれども、潛水艦の乘員は、他艦種の乘員に比較して、養成が一層困難であると致しますならば、たとへ艦ばかりが如何に出來上りましても、肝腎の乘員はどうなつて居るか、といふ點に興味が投げられて居ります。

名實共に、日本海であつたその日本の對岸近距離の所に、赤色海軍が勃興し、多數の潛水艦が備へられて居りますのは我々としても警戒を怠ることが出來ないのであります。

（ホ）イタリー

世界大戰が勃發し、伊太利が聯合國側に參戰致します時、伊太利は英佛との間に戰後の收穫問題について或種の密約を結んで居りました。

だが戰後其の期待は英佛の裏切るところとなりまして、其の憤懣の排け口と、乏しい自國の資源を他に求める爲に行はれたのが彼のエチオピア遠征でありますが、大々的軍擴に乘出しましたのは、エチオピア遠征當時侵略者として經濟封鎖の苦杯を喫せしめられた以後のことであります。

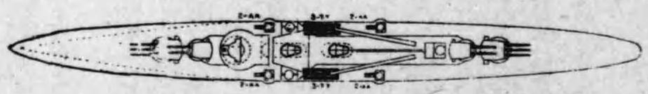


伊太利甲巡ボルツアーノ（10,000噸）

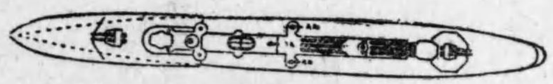
伊太利のエチオピア遠征は、歐洲の國際政局を緊張せしめ、又國際聯盟會議からは尠からぬ壓迫をさへ蒙りましたけれども、伊太利の强行政策は良く之を反撥し、遠征の大事業を成し遂げました。

爾來、之等アフリカの植民地を防護する生命線が、地中海にあります關係上、地中海政策に必要なる軍備の强化に着手し出しましたのは、伊太利として止むを得ないものがありませう。

一九三四年十月に起工された戰艦二隻は竣工豫定を早めて、リットリオは一昨年七月に、ヴイットリオ・ヴイネト（何れも三万五千噸、十五糎砲九門）は同じく八月に、それぞれ進水し、昨年中に艤裝を了つて就役致した筈であります。



伊太利乙巡ギウゼツペ・ガリバルディ（7,974噸6吋砲10門）



伊太利驅逐艦フオルゴーレ（1,200噸12糎4砲門）

更に昨年一月、同型艦ローマ及びインペリオを含む大建艦計畫が發表されましたが、之が竣成致しますと三万五千噸新鋭艦のみでも四隻を揃へる事になります現在伊太利の保有する勢力は、

主力艦（三萬五千噸級）	二隻		改裝濟
同（二萬六千噸級）	二隻		改裝の豫定
同（二萬三千噸級）	二隻		
航空母艦（水上機）	一隻	九隻	八八二噸
巡洋艦（甲級）		八七、九二二噸	
巡洋艦（乙級）		一七隻	八一、一二八噸
驅逐艦		九六隻	九六、七〇六噸
潜水艦		一二九隻	一〇六、二九五噸
合計		二五八隻	五四四、九三七噸

（其の他の艦艇は省略す）

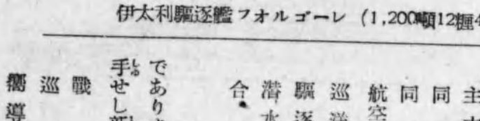
でありまして、昨年度より、豫算十九億リラを以て着手せし新建艦計畫は、

戰艦	二隻
巡洋艦	二隻
獨導驅逐艦	二隻
驅逐艦	一〇隻
潜水艦	二〇隻
其の他小艦艇	

等でありますが、之に佛國のそれをも凌ぐ大空軍を加へて考へますならば、ムッソリーニの胸中に描く、英佛を對象とする地中海制覇及び大羅馬帝國建設の如きも、あながち夢想に終るものであるとは何人も斷言出來ないところであります。

由來伊太利海軍は、地中海に於て佛國と覇權を爭つて居りまして、軍備の如きも常に佛蘭西を目標として計畫され軍縮會議に於ける主張も、對佛比率の同等を要求し、維持することに努めて參りました。

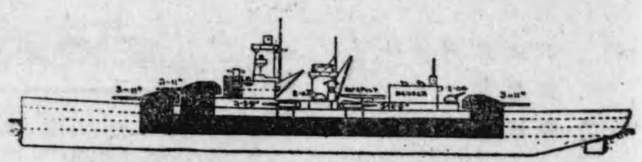
然るに現在伊太利海軍の擴張計畫は、地中海に於ける對英抗爭に備へ、その量の如きも對英五割を目標として計畫されて居るのでありまして、彼のベルリン、ローマを通ずる防共協定も、單にソ聯に對してのみ威力を發揮するに限られたものでもありますまい、地中海、北海の風波高き時、獨伊の空軍が何れに物を言ひ、新興兩國の精鋭海軍が、如何なる方向に對して挨拶を述べるものであるかは興味ある明日の宿題であります。



伊太利潜水艦ピエトロ・カルヴイー（1,332水上噸發射管8門）

（へ）ドイツ

一九三五年三月、再軍備を宣言致しまして以來、獨逸の奏でた軍備行



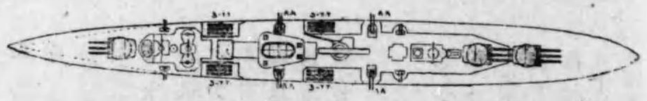
1938年5月竣工せる獨逸戰艦シヤルンホルスト（26,000噸）

進曲は、物凄まじい熱意を以て演奏され、强化されて參りました。

殊にヴエルサイユ條約に依つて、十万噸以内に制限せられて居りました獨逸海軍は、一九三五年六月、英獨海軍協定の成立に依り、各艦種を通じて對英三割五分、約四十二万噸までの建造を公認されるに至つたのでありまして、之を一九四二年迄に完了する豫定で着々整備につとめて居ります。

昨年發表された新海軍計畫に依りますと、一九四二年に於ける陣容は

主力艦（三五、〇〇〇噸級）	二隻	二隻
裝甲巡洋艦（袖珍戰艦）	三隻	三隻
甲級巡洋艦	三隻	
乙級巡洋艦	一四隻	
航空母艦	二隻	
驅逐艦	四〇隻	
潜水艦	約二萬三千噸	
其の他小艦艇特務艦		



獨逸乙巡ニユルンベルグ（6,000噸6吋砲9門）

となりまして、數に於ては往年の鐵十字海軍に足りませんが、質に於ては科學獨逸の精粋を盡くし、世界の造艦界を驚倒せしめたあのポケット戰艦（袖珍戰艦とも云はれる）建造の技術は移つて各艦艇の性能に現れ

其の實力に至つては、對英三割五分を維持するに充分なものがありませう。

潜水艦以上の艦艇現有勢力は、

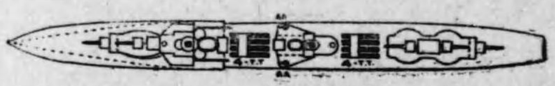
主力艦	二六、〇〇〇噸級二隻五二、〇〇〇噸
裝甲巡洋艦	三隻三〇、〇〇〇噸
乙級巡洋艦	六隻三五、四〇〇噸
驅逐艦	一九隻三、四三〇噸
潜水艦	三六隻二、四二〇噸
合計	六六隻二六、二七〇噸

（其の他の艦艇は省略す）

であります。

現在建造中の艦艇は、

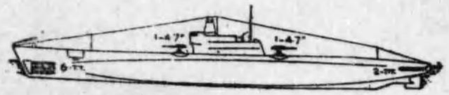
主力艦（三萬五千噸級）	四隻
甲級巡洋艦	三隻
潜水艦	一四隻
快速水雷艇	一七隻



獨逸驅逐艦レベレヒト・マース（1,625噸5吋砲5門）

と報ぜられ三、四年後に於ては潜水艦以上の有力艦のみにても百九隻（三五九、〇〇〇噸）に達するものと推定されて居ります。

現狀の如く、英國が大軍擴に狂奔致して居ります以上、獨逸も亦それに順應して建艦を進め、英國との均勢維持に努めると同時に、ソ聯に對



獨逸潜水艦U－25（712水上噸全長71米水上速力18節、10糎砲1門、高角砲1門53糎發射管6門乗員40人）

するバルチック海制覇に志すことは、新進獨逸に與へられた當然の使命であると申さねばなりません。

（ト）其の他

以上の他、太平洋岸に在る各國の艦艇を一括して申します。

（一）イタリー

巡洋艦	一隻
砲艦	一隻
河用砲艦	一隻

（二）オランダ

乙級巡洋艦（デ・ルエテル及びスマトラ）	二隻
驅逐艦	四隻
潜水艦	六隻
砲艦	二隻
掃海艇	四隻
練習艦	一隻
敷設艦	一隻

（三）ポルトガル

スループ	一隻
河用砲艦	一隻

（四）シヤム

巡洋艦	二隻（四、〇〇〇噸級一九三八年イタリーへ建造注文）
海防艦	二隻
砲艦	七隻
水雷砲艦	二隻
潜水母艦	一隻
潜水艦	四隻
驅逐艦	一隻
水雷艇	一五隻
魚雷艇	八隻
巡羅艇	六隻
敷設艇	二隻
練習艦	一隻

（五）チリー

戦艦	一隻
海防艦	一隻
乙級巡洋艦	三隻
潜水母艦	一隻
潜水艦	九隻
スループ	一隻
沿岸警備艇	七隻

給油艦	二隻
雜役艦	六隻

（六）ペルウ

乙級巡洋艦	二隻
驅逐艦	三隻
潜水母艦	一隻
潜水艦	四隻
河用砲艦	五隻
給油艦	一隻
運送艦	一隻

（七）メキシコ

砲艦	五隻
沿岸警備艇	一四隻
運送艦	六隻

（八）コロンビア

驅逐艦	二隻
砲艦	二隻
河用砲艦	五隻
沿岸警備艇	三隻

此の他に、帝國海軍は先づ措いて、滿洲帝國江防艦隊、並びに餘命を喘ぐ旧政權の殘存小艦艇などがありますけれども、それ等は他日の機會に譲ることに致します。

（チ）結言

斯くして歐米の海上を見渡せば、何れも國力に應じ、財力を傾けて、大膽な建艦戦爭に狂ふ列强の姿態を視ることが出來るのであります。然もそれらの中、照邦二ヶ國を除くならば、他は皆其の目標を、極東日本の上に向けられて居る點は重視せねばなりません。

申すまでもなく、海上勢力は移動性を有するものでありまして、近代文明の粹を盡くして建造された艦船は、或條件をさへ具備致しますならば、距離の遠近の如きは餘り問題とならないやうになつたのであります

只今迄、我が日本の有つて居た國防的地位は、歐米に對する限り、遠隔な距離と、戦略的優位とに依つて、多分の安全性に惠まれて居りました。

けれども、近代文明の發達は、殊に兵器に於て驚異的進歩を遂げまして、今や幅員五千海里に亘る太平洋も、それらの艦船が進攻する前には單なる一湖沼に過ぎないものとなつたのであります。

此の時に於て、支那事變に關聯し、微妙な動きを視せて居た國際情勢は、各國を鞭打つて軍備競爭に走らしめ、或者は攻めんとし、或ものは守らんとして、來るべき海上爭覇戦に志して居ります。

一九二一年のワシントン會議以來、我が國が常に主張して來たところは、攻むるに足らず守るに足る、いはゆる『不脅威不侵略』海軍の維持

でありました。

當時に比べて、時代の趨勢と、國際情勢の變化に依り、我が國が保有すべき海軍力は比率に於て、量に於て、必然的に變化をば來して居ります、けれども我が國の理想とし、世界平和に寄與せんとする『不脅威不侵略』の主義方針に至つては、何等の變化もないのであります。

然も今日、我が日本が直面して居る危機と、我が海軍が負荷して居る多難な任務とは、日本海軍創設以來未だ嘗て例のない事であります。

試みに我が日本の海軍が、現狀のまゝで一九四二年を迎へたと假定してごらんなさい、其の時東洋に如何なる重大事態が惹起されて居りませうか。

蔣介石等が、排日侮日をこれ事とし、抗日戰の準備に取りかゝつたのはワシントン會議直後からであり、一層躍起となつたのは、ロンドン會議の條約が決定した時からでありました。

當時の日本海軍は、米國海軍を完全に壓倒する實力を備へて居りました、然も日本が六割の比率を受諾したのは、英米の前に屈伏したものであると云ふ蔣政權の謬想が、十五年の間如何に我等を不愉快ならしめたことでありませう、然るに一九四二年に於ける英米の海軍力は、ワシントン會議當時の如き紙上の勢力ではなくして、絶對的實力であります、此の實力の策動するところ、第二第三の蔣介石無しとは誰が保證出來ませうか。

聞くところに依れば、現に支那沿岸封鎖に從事中の帝國艦船に對し或種の示威的行動を敢へてした第三國の艦船があつたと云ふではありませんか。

『俺達は數年の後、戰艦だけでも二十五隻を揃へるんだ、その時にはお前達にこれ以上のことをしてやるぞ』

と云ふことを示唆するものでなくて何でありませう。

事實支那大陸に於て、外交の退却を豫想せる第三國の中には、軍備の擴張成つて或種の確信が出來ました其の時には、積極的武斷政策に出でんとして居るものがあるのであります。

或は一九四二年を待たずして、私の申したことが眞實であつたことを證明するやうな事態が起らないならば、それは誠に幸ひであります。

我が國は今、事變の爲に莫大な戰費を投じて居ります、此の秋に於て更に海軍々備を擴張すると云ふことは、確に苦痛であり、迷惑でもあります。

されども、來る可き未曾有の國家的危機に直面して居る只今、太平洋の波濤をして眞に平靜ならしめ、今事變の有終なる戰果を收めん爲には是非共今日に於て、如何なる苦痛にも堪へ忍び、國民擧つて皇國興隆の爲に萬全の準備を成し遂げて來るべき危機に備へねばなりません。

今日、我々に課せられた軍備の强化は、日本及び日本人の生存の爲に一刻の猶豫も許さるべきではないのでありまして、これを成就することが亞細亞の盟主たる日本の義務であり、天孫民族の使命であります。

私は此の機會に於て、我々天孫民族の眞の姿を、同胞全部の上に發見せんことを希つて居るものであります。

私の申し述べんとする主題に對して、少し難渋が入つたやうでありま

す、これより思考を轉じて、各國の日本進攻に關する臆略と、之に關聯して建設された海軍根據地の上に筆を馳せることに致します。

六、太平洋を圍繞する各國海軍の根據地

ワシントン軍縮會議當時、我が首席全權加藤友三郎海軍大將が主張致しましたところの、對英米七割比率要求は、軍備縮減を望むに急なりし日本朝野の支援をすら受くるを得ず、止むなく日英米の保有すべき主力艦比率は三、五、五と決定、之を受諾せねばならなかつたのでありますが、此の報一たび英米國内に傳はりますや、勃興しつゝある東洋の大海を軍抑制し得たるものとして、その成功を祝福致しました。

然るに兩國海軍部内、又は一部論者間にありましては、該條約の失敗なりしことが論議され、囂々たる非難の聲さへ湧き起りつゝあつたのであります。

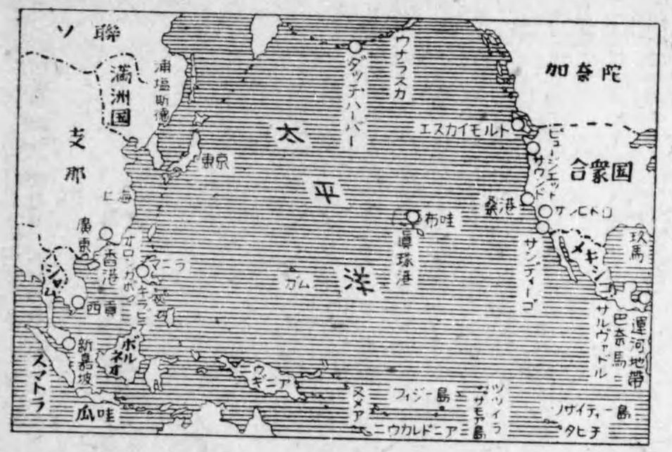
『日本は他を攻むるものではない、守り得れば足る、即ち不脅威不侵略海軍を維持せんとする所以である、然も對米七割の比率が無いならば國防の安全は期し得られぬ』

と云ふ我が加藤全權の條理ある主張は顧みられずして、遂に六割比率を肯じたのでありますから、不平不滿の聲は當然日本海軍部内に擧るべきでありまして、彼等こそ勝利の祝盃に醉つて然るべきであつたに拘らずそれが反對に不滿を漏らすが如きは一見誠に不思議に思はれるのでありますが、然し彼等の以て失敗なりとする消息を尋ね、若しも彼等の申すことが事實であると致しますならば、我が加藤首席全權こそ日本海大海戰當時、聯合艦隊參謀長として樹てし赫々たる武名と共に、列强を相手とする外交戰に於ても亦、不朽の功績を殘せしものと申すべきであります。

當時、米國の有名な排日論者であるジョンソン・デヴイス海軍大佐や英國の海軍評論家にして太平洋海上權力史論や、日米戰爭未來記の著者として有名なヘクター・シー・バイオーターなどは、その間の消息を最も露骨に發表し、憤激的口調を以て兩國民の上に警鐘を亂打することを忘れませんでした。

そのバイウオーターの論旨なるものを要約して申しますと、『一九二〇年の秋の事だ、日本海軍當局は陸〇〇〇〇と協力し、日本〇〇のある二三の〇〇を選んで、之に〇〇を築造すべく計畫し、二一年春頃より、二三年の豫定を以て着手したのであるが、これより先米國に於て、軍備

縮少會議開催のことあるを知るや、遽に○○の豫定を繰上げ晝夜兼行で工事を急ぎ、附近○○は○○○○以下の○○を以て警戒網を張り繞らせ新聞紙等は之に關する一切の報道を禁止し、斯くて十二月には、早くも之を○○せしめてしまつた、然もワシントンに臨んだ加藤代表は、軍縮の前提條件として太平洋防備制限案を提出し、遂に防備の現狀維持を承認せしめることに成功した、然も太平洋に於ける米國のカヴイテ、及びグアム兩海軍根據地は、未だ工事の半も出來てゐなかつた、その上日本へ主力艦六割の比率を與へては、戰略的に見て、英米兩國は西太平洋に於ける限り、到底日本の敵ではなくなつた、されば日本へ與へる比率は六割はおろか、五割でも四割でもよかつた筈だ、それにも拘らず日本は七割を要求した、そして六割を得た、最早我々は、東洋問題に就いて此の條約が存續する限り、日本海軍と事を構へることは絶對に出來ない」



以上の要旨は、英米兩國に於ける輿論を率直に代辯して居るものと見られるものでありまして、今も尚ワシントン會議秘史中の一挿話として語り傳へられて居りますが、私は之に對して否定すべく、若しくは肯定すべき何等の智識も權能も有つものではありません。されども往年、ワシントン條約締結當時を回顧して、世態の變遷と併せ、彼等の洩らした不平の上に想ひを馳せますならば、滿洲事變を經て今次事變に至る時の流れの中には、何かしら多分に示唆するものがあることを考へられ、久しき感慨と、自からなる微笑とを禁じ得ないのであります。

申す迄もなく、彼等が囂々の論を爲した由因は、主力艦や航空母艦に對する比率を指すものではなく、要は條約の中に含まれてゐる太平洋防備制限條項にあつたのでありまして、この海軍根據地の防備制限なるものが、我が日本に執り如何なる利害を及ぼすものであるかと云ふ問題は元より專門家の領域に屬して居りますけれども、假に、西太平洋上に點在する列强海軍の前淮根據地が、無制限に擴張强化せられて居たと致しますならば、日本の受けし脅威感は、今日に勝る大なるものがありましたことは容易に想像され得るのでありまして、○○云々の問題は別として少くも防備現狀維持を約束せしめました一事は、加藤全權以下並びに

海軍當局者の明斷として敬服すると共に、夙夜精勵良く帝國々防の萬全と國威宣揚の大任とを果し來りましたことに對し、我が國民は擧つて感謝しなければならぬと思ふのであります。

餘談ではありますが、戰時に於て、前淮根據地或は補給基地が無い爲に、艦隊の作戰行動上如何なる不利を招き、亦如何なる悲慘なる戰鬪を敢へてせねばならぬかと云ふ好例は、彼のバルチック艦隊の辿つた末路の上に就いても觀ることが出來るのであります。

ロジエストウインスキー提督の率ゐる旗艦クニヤージ・スオーロフ以下四十隻に餘る艦隊が、明治三十七年十月初旬、北海のリバウ軍港を出發し、萬里遠征の途に上りまして以來、或時は中立國の港に機關を留めて、炭水の補給や乘員の休養に幾日かを過し、又或時は人煙稀なる外海に假泊して、艦隊の修理に人知れぬ辛苦を嘗め、港より港へ、岬より島へと飛石傳はりに、兎も角も一万五千餘海里を航破して參りました。

其の間自國の根據地が無い爲に、第一には本國よりの情報を入手し得ず、極東の戰局が如何に發展しつゝあるかさへも判斷することが出來ませんし、炭水糧食は之を中立國に求め得ましても兵器彈藥の補充を受くべき何等の途も無く、兵員は疲るゝも陸上に休養せしむる手段なく、加ふるに艦底の汚損、機關の故障に至りては、之が完全な修理を施すべき何等の方法もなかつたのでありまして、彼等が嘗めた辛苦と困惑とは筆舌に盡くし難いものがあつたのであります。

さればこそ東航の途に上りまして以來、彼等が最大の目的とし、念頭常に希ふところは、一日も速かにウラジオストック軍港へ安着し、兵員の休養と艦艇の修理をなす點にあつたのでありましたが、而も一死以て皇國の興廢を此の一戰に賭した我が艦隊の迎へ擊つところとなり、憐れ艦艇の大部を擧げて、日本海の水深き珊瑚の墓に葬られ終つたのであります。

前章に於ても述べましたが、今日の發達した優秀な艦船は、單艦尚一万餘海里を航破することが出來まして、往年のそれと比較するならば眞に隔世の感がありますけれども、然しそれは單に航走し、或は幾分かの策動を成し得ると云ふ程度に止り、勝敗を一戰に賭けて敢然戰鬪旗を揭げます爲には、是非共その背後に有力なる根據地を必要とするのでありまして、此の戰理法則は昔も今も、恐らく將來と雖も變化すべしとは考へられぬところであります。

今や眼を上げて世界の海洋を眺めますならば、海權史上に於ける北海や地中海の歷史は遠く過去の事實として記憶の一隅に捨て去られ、今日の太平洋に於ける程しかく嚴重に武裝され、今日の我が日本に於けるが如く堅塞鐵壁を以て圍繞せられて居る時代は無いのであります。

嘗て海國日本を脅威する勢力は、東支那海及び日本海方面にありました。

之に對して我々は、國家の生存權を擁護する爲に、日清、日露の二大戰役を敢行し、其の脅威を消滅致しました。

然るに第二の脅威は、我等の豫想し得なかつた方面に於て發生しつゝあつたのであります。

南より來る英國の勢力が、新嘉坡を以て東洋のジブラルタルたらしめ

て居りますと同樣に、東より來る米國の勢力は、布哇の眞珠港を以て新しきモルタたらしめて居ります。

此の二大挾擊に會しました日本帝國は、自國を衛る爲に、許されたる範圍に於て手段を盡くし、獨自な海軍の建設に努めて參りました。

然も極東を目指す太平洋のジブラルタルや、新しきモルタを中心とする列强海軍の根據地は、吹荒ぶ軍擴の嵐に呼應して華府條約解消後に至り、急速に擴張强化せられつゝある實情は、何人と雖も之を否定することは出來ないのであります。

私は、海國日本の興廢を決すべき第二の對島海戰を豫想するに當り、太平洋上に布陣せられてゐるこれ等列强海軍の根據地に筆を進め、そしてそれ等の脅威に對する不斷の準備と覺悟とを促す爲に、各位の一讀を煩はさんとするものであります。

(イ) イギリス

太平洋上に在る英國海軍の前進根據地は、南より數へて新嘉坡、香港威海衛でありましたが、威海衛は有事の際敵國より直に占領せられることを豫想し、平和と人道との美名を附して之を放棄し、一九三〇年四月支那へ返還致しました。

香港は、英國の極東に於ける經濟基地を成すと共に、又軍港として英國支那艦隊の根據地となつて居ります。

西暦一八四二年、即ち我が天保十三年、英支阿片戰爭の代價として英國に割讓されました當時の香港は、全島只岩石峨々として瘴煙深く變雨密なる海賊の巣窟でありましたが、苦心經營茲に百年、南支貿易の樞要港として、東洋政策の據點として、今日の殷盛を視んとは誰か想像し得ましたらうか。

香港の軍事的價値に就きましては、世上往々之を輕視し、日本軍進攻の前に一たまりもなく攻略せられるものとの謬見を持つてゐるものがありますけれども、華府條約廢棄後に於て近代的築城を進め、全島これ鐵塊とも云ふべく武裝されてゐると信ずべき理由があります以上、之を輕視するが如きは危險であり、執らぬところであります、殊に新嘉坡軍港が完成されました今日、香港の有つ戰略的地位は一層强化せられたものと想像し得られるのであります。

香港島は廣東河口に臨み、その南方九十浬のところにありまして、島は東西に延び、長さ十一哩、幅二乃至五哩、面積三十二方哩、約半哩の海峽を隔てゝ九龍半島に對して居ります。

島内の大部分は急峻なる山地でありまして、河川と申すべきものは見られません、島内の最高峰ビクトリアピークは、海拔一、八二〇呎、その頂上までケーブルカーが架せられて居り、或は避暑地として、又美しき風光を一眸に收めて遊覽者の眼を樂しましめるものがあります。

島の周圍には蜿蜒として軍用道路が設けられ、又ドライヴウェーとしても周遊に便ならしめて居ります。

港内は廣く、且水深く、嘗て我が聯合艦隊の全部を容れて尙餘裕があつた程であります。

對岸の九龍は一八六〇年、佛蘭西と聯合して再び支那を破り、その代償として三五六方哩の租借權を得、茲に澳門の繁榮を奪つて、南支貿易の大半を獨占するに至つたのでありますが、只今は此處にも香港警備の名目を以て軍事的設備が施され、其の空軍基地は新嘉坡に次ぐ廣大なものがあるのであります。

香港臺灣間の距離は僅かに三百五十浬でありまして、長崎上海間の四百十八浬に較べて約三分の二に過ぎぬことを考へますならば、航空機の發達せる今日、香港の持つ戰略的地位は、我が南方交通路線と共に關心を怠り得ぬものがあるのであります。

一九一八年、彼の世界大戰が終ると共に、世界の海上舞臺は一轉して北海より太平洋方面に移りつゝある實情を看取した英國は、大戰中英國大艦隊司令長官（初期には軍令部長）でありましたゼリコー大將を東洋へ派遣して、太平洋方面に於ける戰略的關係を調査報告せしめました、その報告書に依りますと、當時計畫進行中であつた日本の八八艦隊に對應すべき同樣の八八艦隊をば、南太平洋に常備すると共に新嘉坡を擴張し、該艦隊を容るゝに足る設備を完成せんとする二ヶ條を建言したのであります。

此の建策は、海軍本部の認むるところとなりましたけれども、一方に於て、太平洋方面に斯くの如き大艦隊を常備することは、日米兩國を挑發して無益の惡感を與へ、政治上有害であると云ふ意見と、又財政上の理由もありまして、斯かる大艦隊の太平洋常備問題は時の政府の葬るところとなりましたが、其の折衷案として採用せられたものは新嘉坡を擴張して近代の主力艦隊を容るゝに足る設備を完成し、一朝有事に際しては何時にても本國より優勢な艦隊を派遣し、此處を根據として活動せしめようと云ふにありました。

當時の意見に據りますと、新嘉坡は英本國を隔たる八千浬の彼方に在りますけれども、建造中であつた快速戰艦ネルソン、アンソンに加ふるにフッド、レパルス、レナウン等を以てするならば、極めて有力な快速部隊が編成され、殊に新造計畫中の主力艦は一層快速を有つものと推斷し得られるに依り、是等の艦隊は十日以内を以て太平洋の中心地に進出することが出來る、さすれば太平洋方面へ不斷に大艦隊を常駐せしむる必要は無いと云ふのが英國海軍の意見でありました。

然るに右の建艦計畫の大部分は、ワシントン條約に依つて放棄せしめられましたけれども、同會議直後、英國議會は國防に關する重大決議をなし、世人の耳朶を驚かせました、即ち東洋方面に於ける英帝國の貿易を安全ならしむるに必要なる行動を確保するために、新嘉坡に海軍根據地を建設し、地中海及び紅海を經由して東洋に至る重要航路の安全を維持し、尙各自治領の空軍をも擴張せんとするものでありまして、實に新嘉坡軍港の建設は此の時に確定されたものでありますが、その後財政的に、或は勞働黨及び南阿聯邦などの痛烈な反對に會ひましたけれども、彼等は常に堅忍不拔の意力を以て之に堪へ、一九二五年三月、いよ〳〵

同軍港建設に着手したのであります。

然らば英國は、抑〻何を目標とし、何の爲に備へて此の軍港を建設するに至つたのでありませうか。

先づ新嘉坡の地勢を視るに、同港は馬來半島の南端に在りまして、西に英國の寶庫たる印度を控へ、東しては濠洲、新西蘭、蘭領印度に面し北は印度支那及び支那に至る接觸點をなし、又間接にはアフリカの防禦地點ともなつて、天然に形成された太平洋方面の戰略的核心とも申し得らるゝのであります。

大戰以後極東、殊に支那市場が列强、就中日英米三國の激烈な經濟競爭場裡となり、經濟的關係は歐洲方面より太平洋方面に移行して、大戰の影響を蒙る事が比較的少かつた日米兩國は、異狀な產業貿易の進出をなし、其の海軍力は世界海軍の重要なる地位に進みつゝありましたので英國としても國利國權を維持せんが爲には、是非共太平洋方面に優勢なる海軍力を備ふる必要があり、又大戰の經驗に鑑みて屬領たる濠洲、新西蘭、加奈陀等を英本國に結び付くる一種の紐帶が、日米兩國の優勢なる海軍の爲に重大なる脅威を受けるものとなし、或は印度人の自由獨立と、政治的解放を目的とする民族的自覺が益々熾烈となつて參りましたので、之を直接に間接に抑へんが爲にも適當なる海軍根據地が必要でありますのと、一方ワシントン條約によつて、海軍根據地としての香港の價値が著しく低下致しました爲に、太平洋方面に於ける英國艦隊の活動を保障し、併せて香港を利用することが出來る一大根據地を必要とするに至つた、とは英國の擧げた主なる理由であります。

斯くて新嘉坡軍港は建設されることになりましたが、直に當面するところは、如何なる規模、如何なる程度の施設をなすかの問題でありまして、之を解決する爲には、何國を目標とすべきかと云ふことが先決問題となつて參りました。

ゼリコー提督の建策が、日本の八八艦隊（戰艦八隻、巡洋戰艦八隻、それに附隨する相應の補助艦群）に對應すべき同樣の艦隊を、新嘉坡を根據地として常備するに在りましたことを顧みますならば、明らかに日本を目標とするものであることは疑ふ餘地のない事實であります。

さればこそゼリコー大將が、右の建策を懷にして歸國の途に上りました時、アメリカへは立寄りましたけれども、二十餘年來の同盟國であり大戰の協力者であつた日本海軍の招待は、之を固辭して遂に立寄ることを敢へて致さなかつたのであります。

想ふに、日本を對照とする八八艦隊の成案を胸中深く抱いて居る提督が我が國へ渡來しなかつた理由なるものは、英國人として珍らしくも良心的何ものかゞあつた故であらうとは、今も尙興味ある秘話として語り傳へられて居ります。

斯くて英國政府は、新嘉坡軍港建設に際し、その目的がスエズ運河以東の貿易路線保護にあることを表明致しましたけれども、それは彼等が秘密を飾るに美辭令色を以てし、顧みて他を申すものでありまして、新嘉坡軍港建設の目的が、單に貿易保護の爲のみにありますならば、主として巡洋艦以下の輕艦艇を收容し得るだけの設備を施せば足る筈であります、何となれば、主として貿易の保護に任ずるものは之等輕艦艇であ

るからであります。

然るに同軍港には一個の乾船渠と一個の浮船渠を備へ、最大の主力艦二隻を同時に入渠せしめ得る甚大な設備が施されて居ります一事は、明らかに主力艦の大部隊を太平洋方面に派遣せんとするものであり、又主力艦の大部隊を派遣すると云ふことは、同時に之に隨伴する巡洋艦以下の輕艦艇の大部、言葉を換へて申しますと、英國海軍の有力なる大部隊を派遣せんとすることを意味するものでありまして、從つて新嘉坡軍港建設の目的が、貿易路保護の爲のものであると云ふ英國政府の辯明は、一顧の價値もない詭辯であると申すも不當でないことを信ずるものであります。

更に奇怪なことは、英米兩國の識者間に、太平洋上風雲低迷するの時同軍港をして米國艦隊の爲にも根據地たらしめ、英米協力して、日本を抑へるにも適當であるとの議論をなすものがあることであります。

英國のベレヤース中佐の如き、米國のニコラス・ルーズベルトの如き口調を揃へて『香港、マニラが第二義的前進根據地なるに反し、他日事ありて英米協力する時、新嘉坡こそ兩國艦隊絕好の根據地である』と云ふ意味のことを申して居ります。

先ごろ同軍港乾船渠完成記念行事に際し、特に米國艦隊司令官は巡洋艦メンフイス、ミルウオーキー及びトレントンの三隻を率ゐて參列の上親しく交歡致しましたのは、斯かる輿論の眞實性を裏書せるものとして識者の注目するところとなりました。

斯く觀じ來ります時、同軍港の存在價値は、單獨にも日本に對抗するを得、又英米共同する場合にも都合よく、印度に對しても統治上の重鎭たるを失はず、万一英米戰ふ場合ありと致しましても、太平洋上無二の據點たることが出來るのであります。

然らば新嘉坡軍港とは、如何なる內容に依つて完成せられたものでありませうか。

先づ海圖を開いて其の邊りに眼を致しますと、印度の亘大な突端に隣りして馬來半島が印度洋上に突き出て居り、その南端に位して長さ二十七哩、幅十四哩、面積二百十七平方哩の一小島が狹隘なジョーホール水道に依つて形作られて居りますが、これが馬來の土語で『獅子の都』を意味する新嘉坡島であります。

島內は平坦な所が多く、只中央に海拔五百呎のブキットテイマを含む低い一帶の丘陵が橫たはり、南方新嘉坡海峽に面する商港と、北面してジョホール水道に口を開く軍港とを區切る役目をして居ります。

軍港の位置は、ジョホール水道に注ぐセンバワン河口を中心とする約六哩の地域に在りまして、大艦隊を容るゝに充分な廣さと水深とを有つて居り、外海に曝露することのない理想的地形に惠まれて居ります。

センバワン河口を東に隔たること約四哩の地點、セレター河口の右岸には約六百エーカーに亘る水陸兩用の大飛行基地が在りまして、其處には、司令部、各種格納庫、修理工場、兵舍などの宏壯な建物が並び、對岸馬來半島にも二十數ヶ所の航空基地があつて軍港背後の護りに就いて居ります。

水道東口には亘大な兵舍が建てられて居り、又鐵とペトンで固めた强

力な要塞施設に、口徑十八吋の巨砲が外洋を指して据ゑられ、對岸ジョホールのフェバー丘陵にも十五門以上の巨砲が海面を睥睨して居ります

又巨大な重油貯藏池がありまして、幾條かの送油管は之を中心に軍港内至るところに延びて居り、貯藏量は百二十五万噸と云はれ、半年の久しきに亘つて艦隊に補給し得るものであり、尚他に三十万噸の石炭を貯藏する燃料庫も完成して居るとのことであります。

然しながら海軍根據地として、最も重大なる要素を成すものは船渠の設備でありまして、同軍港が大艦隊の作戰基地として、我々の最も注目するところは船渠の施設の完全さにあります。

長さ二六〇米、擧揚量五万噸の浮船渠一個、四万噸の乾船渠一個を備へましたのは、さすがに大英帝國軍港たる名に恥ぢぬものでありまして此の乾船渠は大沼澤地帶の紅土を掘下げ、乾し固めた上に更に厚いベトンの層を置き、之を蔽ふにジョホールの花崗岩を以てした立派なものであります。

浮船渠は、最初獨逸より分捕りしたものを用ひる筈でありましたが、後に至つて用を爲さぬことが判明し新たに建造したものであります。此の軍港建設に要した經費は、一千一百万磅の豫算でありましたが、浮船渠の新造やその他に追加を要するものがありまして、二千七百五十万磅に増額されました、然し實際に於てはそれも尚不足であると申されて居ります。

以上は新嘉坡軍港の、アウトラインを記したに過ぎませんが、この軍港の有つ威力は我が日本の戰略的或は作戰上に、果してどれだけの影響を與へるものでありませうか、換言せば此の軍港の存在に依つて、我々は國防上如何なる脅威を感ずるものでありませうか。

新嘉坡と我が臺灣南端との距離は一、六二五浬、佐世保とは二、五二〇浬でありまして、該軍港に據る英國艦隊は優に日本近海に作戰し得られるものと見るべきであり、殊に香港を併せ利用することを考へますとき、その脅威感は倍加せられるのであります。

更に英國は印度海軍の充實を期すべく、年額十三万五千磅を支出することゝなり、同時にスマトラ島の西北方にあるニコバル群島に要塞を建設せんとする企圖ありとか、或はビナンにも要塞建設が開始されたとかも傳へられて居ります。

何れに致しましても、十數年以來、孜々營々として築き上げ來つた彼等の努力に對し、やがて來るべく豫想さるゝ太平洋爭覇戰に於て、如何なる報酬が彼等の上に齎されるものでありませうか、そは神のみ獨り識るところでありますが、然も彼等が之に據つて極東政策の路線に合致するやう、如何なる作戰を練りつゝあるか以下項を追つて述べることに致します。

(ロ)アメリカ

米國の領土の中、最も日本に接近して居りますのは、比律賓群島であります。

臺灣の南端と比律賓北端とは、その距離僅かに二百浬餘でありまして

鷲巣鼻燈臺の灯は、時に比律賓の山々を照すとさへ言はれて居ります。

同群島の主府を去る、マニラ灣口二十浬の所には、スペイン時代に建設せられたカヴイテ軍港がありまして、一八九八年、米領となりまして以來、時代に相應して改造築が施され、現に米國亞細亞艦隊の根據地となつて居ります。

マニラ灣の北西方スビック灣内には、オロンガポー要港がありまして側面よりマニラ灣を護衛して居ります。

カヴイテ軍港の要塞は、コレヒドル、カベルロ、カラバオ、フライルの四島に分かれて居りますが、中にもコレヒドル島には十二吋砲五門、十吋臼砲十三門、十吋砲一門、六吋砲四門、三吋砲四門が据付けられて居ると傳へられ、その他の島々にも強力な防備が施されて居ります。

マニラ市の背面には、二線の砲臺がありまして、オロンガポー要港と共にマニラ灣を固く守護致して居ります。

此の二軍港は、ワシントン條約の防備制限區域内にありましたが、條約廢棄後、一層近代化されて居ることは想像に難くありません。言ふ迄もなく兩軍港は、英國の香港と同樣米國極東政策の策源地でありまして東洋方面に事ある時、米國民の關心が此處に集中せられますのはむしろ當然のことかも知れません。

比律賓群島を東に隔たる一、五〇〇浬のところには長さ三十二哩、幅二乃至十哩、周圍約百哩、面積二百二十八平方哩のグアム島があります

主府をアガニヤと云ひまして、アガニヤを去る八哩の地點にはアプラ軍港があり、有名な無線電信局はマチヤナオ丘陵上に建てられ、オローテ岬には六吋砲を裝備した要塞があり、アガニヤの兵營には常に陸戰隊が駐屯し、又米國艦隊のため燃料補給の設備もあります、比律賓同樣條約廢棄後に於て、飛行基地其の他の設備が補强されました、グアム島は米國大統領の任命する海軍出身の知事に依つて支配せられ、外國の商船は特殊な場合でない限り一切寄港することを許されません。

グアム島の東北約一、三〇〇浬のところには、絶海の孤島ウエーキがあり、更にその東北一、二〇〇浬には、ミッドウエー島がありまして、凝水の供給所や、無線或は海底電信の中繼地として軍きをなし、一旦緩急ある際は軍事上相當な役割を果すものと豫想されて居ります。

米國本土に在る太平洋岸の海軍根據地は、北より數へてピューゼット・サウンド灣内、シヤートルの對岸の奥に在るブレマートン軍港であります、幾つかの大船渠、造船所、その他軍港として必要なる一切の設備が施されて居ります。

その近くのポート・アンゼルスには潜水艦、驅逐隊、航空隊の根據地があり、又サンドポイントには航空基地が置かれてあります。

サンフランシスコの北方、二十哩に在るサン・パブロ灣内のメーアアイランド軍港は、太平洋岸に於ける米國海軍最大の軍港でありますが、水深が二十二三呎に過ぎない爲大艦の碇泊に不便でありますので、サンフランシスコの對岸、アラメダ半島に新軍港を建設し、其處に大艦隊に對する補給修理一切の施設が完成されました、即ちサンフランシスコ灣内には二ヶ所の大根據地が並存せられ、以て難攻不落の堅塞を誇つて居ります。

ロスアンゼルス市には、サン・ピードロ要塞があり、潜水艦や飛行隊の根據地がありまして、それより百二十六哩を隔てたカリフォルニヤ州のサン・ディーゴには、燃料貯藏所、軍需品倉庫、無電局、航空基地を始め、强力な要塞や施設が完備され、殊に灣内は廣濶で水深も三十六呎に及び、大艦巨舶の碇泊に最も適して居り、有事の際にはパナマ運河防備の作戰據點となるであらうことは、充分に首肯し得られるところであります。

パナマ運河は、太平大西兩洋を結ぶ重要な通路でありまして、米國海軍當局は此の運河防備に最大の關心を有し、實に至れり盡くせりの手段が講ぜられて居ります。

太平洋岸の運河入口だけに就いて見ましても、其處に點在せるフラメンコ、ナオス、ペリコ、パーラス、タボグイラ、タボガ等の諸島には强力な要塞が施設され、殊にバルボア港よりナオス島に至る約三浬の堤防には、十六吋以下の多數の巨砲を裝備した海岸要塞が築造されて居り、又陸上には野戰築造や、歩騎砲工及び航空隊、機械化部隊等が駐屯して居りまして、バルボア港には船渠を始め、前進根據地としてあらゆる施設が完備されて居ります。

一方眼を北方に轉じますならば、アラスカのアリューシヤン群島の中西にキスカ、東にウナラスカ（ダッチ・ハーバアー）の二要港が存在し、補助艦航空隊の根據地となつて居り、更にアラスカの南端にはシトカの要港があり、同様の設備が施されて居ります。

又南太平洋に於ける米國唯一の根據地に、サモア島のツ、イラ軍港がありますことも特記する必要がありませう。

最後に、米國海軍の一等前進根據地として、又極東方面への進攻作戰基地として有名な布哇の眞珠軍港があります。

眞珠港と日本々土との距離は三、三七〇浬、サンフランシスコとは二一〇〇浬、ロスアンゼルスとは二、一五〇浬であります。

眞珠港は、オアフ島の南岸、ホノル、市を隔たる十二哩の地點にあり水上面積十五方哩、水深六十呎の大軍港をなして居ります。

一八九八年、米西戰爭勃發に前後して布哇が米國へ併合されますや、一九〇〇年より眞珠軍港開發に着手し、一九〇八年以來、數年に亘つて巨費を投じ今日の基礎を築いたのでありまして、世界最大の戰艦を容れ得る船渠や、修理工場、重油百万噸近くを貯藏する大貯油庫等があり、東方ダイアモンド岬角より灣を繞る丘上に口徑十六吋、十四吋、十二吋及び中口徑砲多數を裝備した一大要塞地帶が建設せられ、又ウイラー・フイルド飛行場は、最近擴張されて大航空基地となり、駐屯陸兵も數万に達して居ると傳へられて居ります。

さすがに弗の國、米國の一等軍港だけありまして、現在のパール軍港（眞珠港）こそ、彼等が常に誇りとする太平洋のジブラルタルの名に相應しく、金城湯地として完全無缺な根據地を成して居ります。

最近ワシントン電報の報ずるところに依りますと、米國當局はしきりに太平洋諸島の施設强化を計り、布哇の西方ミッドウエー及びウエーキ兩島に要塞を築造すべく、又グアム島にも一層强力な施設をなすべく論議されましたが之は一先づ撤回されました。

（八）フランス

佛國は、今迄安南の西貢に微弱な補給施設と航空隊を有つに過ぎませんでした、然るに支那事變が起りますや、蔣政權の積極的援助に乘出すと共に、疑心自ら暗鬼を畫がき、日本が海南島を占領するのは默視出來ないとか、或はバラセル島は佛國のものだとか、自分の寫せし幻影に脅え、吾人の常識を以てしては到底理解し難い態度を執り、我が同胞の血を沸かしめて居りますのは、往年の三國干渉國として未だ佛國のみが清算せられて居ない點に併せて、我等國民の銘記せねばならぬのであります。

ハノイよりの新聞電報に依りますと、昨年末既に東京灣内ドーソン海岸の要塞が完成し、更に日露戰爭當時、東航の途に在りました露國太平洋第二艦隊（バルチック艦隊）が永らく在泊し、第三艦隊を待合はせて居りましたカムラン灣を軍港候補地として、數年前より、之が施設計畫を進めつゝありましたが、昨年四月に至り遽に英米兩國の支那大使館附武官を招き、英米佛共用の海軍根據地たらしむべく劃策するところがあり、我が軍が海南島攻略後に於ては、同灣を要塞地帶として一般船舶の通航を禁止し、要塞築造に狂奔しつゝありと報ぜられて居ります。

一方に於て、今次事變に於ける我が海軍航空隊の活躍には、さすが世界の空軍國を以て任ずる佛蘭西人達も、一様に驚異の眼を見張つて、遽に印度支那空軍の擴大强化を計り、主力部隊の根據地と視られるハノイ郊外の軍用飛行場を積極的に增强致しまして、之を根幹として印度支那全領土内に施設されました佛國飛行場は、凡そ二百ヶ所にも及ぶとのことであります。

東洋方面に派遣せられて居る佛國海軍が、比較的弱勢なるに反し、空軍に於て英米のそれをも凌ぐものがありますことは、佛國の動向と其の眞意が那邊にあるかと云ふことを察知し得られるのであります。

（二）ソビエート聯邦

太平洋方面に於けるソビエート聯邦の海軍根據地、或は軍事施設はウラヂオを中心として、ソフワーガニ、ニコライエフスク及び將來はオホツク海のナガエウオ、カムチヤツカ半島のペトロパウロフスク等にも航空根據地が設けられるやうに傳へられて居ります、然しソ聯の内情に關しましては一切秘密の扉に匿されてありますから、元より正鵠なことは知るべき由もありません。

唯識れる範圍に於て、我が日本と一衣帶水の間に在るウラヂオに就いて見ますならば、其の要塞の堅固さは到底日露戰役當時とは比較し得られない程度に增强されてゐるのは事實であります、軍港は水域廣大にして良く隱蔽せられて居りまして、今日では四季共に艦船の出入は自由であります、又大艦を收容し得る浮船渠は既に北海より廻航されて居り、

軍需品は鐵路此處に蓄積され、今や水陸空軍力は彼等が好んで東洋一を誇る有樣でありまして、一朝雲湧き、一夕風起るの時、このウラヂオ軍港がソ聯極東海軍作戰の重鎭として、日露戰爭當時果した役割以上に、如何に活躍するものであるか、常に注視を怠り得ぬものがあるのであります。

◇　◇　◇　◇

以上、太平洋方面に於ける列强の海軍根據地に就いて大雜把ながら大體の觀察を試みました。之に依つて視るも我が日本が、列强の堅寒鐵壁に依つて如何に嚴重に、隙間もなく包圍せられて居るかその實相がわかるのでありますが、飜つて之に對する日本の施設は如何!!。

相對性を有する軍事問題を叙するに當り、一方のみを畫がいて、他方を不問に附するが如きは、龍虎を畫かんとして雲のみに終りたるに等しく、讀者の机上、更に物足らぬ憾みあるは、私と雖も良く承知致して居ります、然し今日、我が國四圍の情勢を省みますならば、軍事の機密に亘り或は亘るべき性質を有する事項に關しましては、國民擧つて一言半句と雖も之を愼み、また口筆にすべきものではないのでありまして、いはんや我が軍事施設の項目に至つては、既に發表ずみの事柄でありませうとも、絕對に許さるべくもないと云ふことを銘記して頂かなければならぬと思ふのであります。

然も此の國民の緘默こそ、皇軍常勝の一因を成す點を想ひますならば讀者各位も亦喜んで本書の缺陷と不足を忍び、他日快心の筆を以て補塡し得る時機の到來するのを待つて頂けますことは信じて疑はぬものであります。

太平洋上風雲を望み、事に飢ゑるの概ある前記列强海軍根據地が、今興りつゝある東洋の新事態に對して、如何なる役割を果さんとしつゝあるか、私はこの命題に對して筆を進めることに致します。

七、列强の志す太平洋制覇戰

太平洋上に布陣されてゐる列强の海軍根據地と、そこに配備されてゐる各國海軍の艦艇に就いては、概略ながら其の大要を述べました。

果して然らば列强は、これ等の根據地に據つて、如何なる戰略の下に來るべき太平洋爭覇戰に臨まんとしてゐるのでありませうか。

私は今此處に、太平洋爭覇戰の概要を述べんとするに當り、私の常に信念とし、多年抱懷する卑見の一端を申して置く必要があるのであります。

私が今茲に述べようとする列强の太平洋戰略なるものは、決して私が事を好み、世に衒ひ、徒らに讀者の好奇心を挑發して、こと更に時流に投じ以て安價な拍手を期待せんとするものではありません。

此の一章を、敢へて此處に草しました所以のものは、國を憂ひ、國を愛し、將に來らんとする未曾有の國難に際し、斯くあるべしと思考する事態に善處せんがために海軍々備の充實を痛感するの餘り、微力ながら海軍々事に關して心ある國民同胞の關心注目を促す一助ともなし、併せて海國日本の現狀を再認識せられんことを希ふ以外に他意は無いのであります。

然も此處に說く太平洋戰略なるものは、その一句一節と雖も私の創作に成るものではないのでありまして、既に三十年來、日本海軍の孰興を氣に病む英國人や米國人達が、種々研究し樣々に檢討し、そして親切にも我等に敎へて與れましたところを遠慮し、斟酌しながら借用した迄のものに過ぎないのであります。

されども、國と國とが國運を賭して相戰ふ場合には、精細な軍事科學の知識を以てしましても、なほ往々にして豫期することの出來ない理外の理が生じて參りますことは、東西古今を通じて極めて有り得ることであります。

殊に國際間の情勢が、今日に於けるが如く複雜微妙を極めて居ります時に於て、各國極秘の戰略を究め、將來に屬する戰爭を豫想してこれを筆にするが如きは、單なる空理空論に終るのみならず、徒らに國際間の狀勢を刺戟し、無謀の誹を免れることは出來ないのでありまして、一片の小說としてならば兎も角、眞に國家の安危を論ずる者にありましては大いに愼むべく又自重する必要があると思ふのであります。

今日に至る、歐米の權威ある軍事評論家乃至は專門家の麗筆に成る對日本戰爭論なるものを再讀致して見ますと、その筆にせしところと豫想せるところとは、現實の狀勢に照らして甚だしく相違致して居りまして時代の推移と國際間の狀勢とは、彼等權威者の筆致を氣の毒な程裏切るものが尠くないのであります。

日米戰爭を示唆した所論の中には、支那の國民政府は益々健在にして米國へ味方し、支那全土を擧げて日本に抵抗を試み、我等を苦悩せしめるやうに書かれてありました。

日英葛藤の場面を叙するに當りましては、多くソビエート聯邦が日本に好意を寄せ、その傳統的慾求に隨つて或機會に乘じ、印度を衝いて英國を奔命に疲れしむるやうに說かれてありました。

誰か今日の支那を豫言し、何者か今日に於けるソ聯の動向を達觀し得たものがありましたらうか。

音にそれのみではありません。

日米相戰ふ時、英國は極力中立を守つて經濟制覇に專念し、或は日英干戈相詰ぶの時、米國もまた局外に在つて兩虎の傷つき仆れるを狙ひ、漁夫の利を占むるであらうとの觀察は、今なほ吾人の耳目に新なるものがありますが、然も誰か今日に於ける歐米の狀勢を明瞭し、何者か英米兩國今日の對日動行を豫想したものがありましたらうか。

日露戰爭以來茲に三十餘年、これ等權威ある文人達は幾度か對日本戰爭を示唆し、幾度か日本人を指して好戰國民なる所以を說き、以て恐るべき黃禍の來襲を警告するところがありましたけれども、元より斯かる荒唐無稽な論據が箴言と爲り得る筈もなく、又我等の太平洋もその名の

如くやうやく太平に納まり、時に多少の波濤は我等の沿岸を騒がすことがありましたが、國力を傾けて當らねばならぬ程の事態に至らずして、兎も角も今日まで無難に過すことが出來たのでありました。

これは必ずしも歐米國民が、好んで口にする平和論や人道主義に由來せるものではないのでありまして、一に我等の海軍が、嚴然と我等の海に浮かび、如何なる外敵に對しても決然反擊して以て之を殲滅し得るだけの實力を備へて居た故に他ならぬのであります。

假に若し、極東の海面より、日本海軍を引き去つた後を考へて見ます時、支那を始め今日の亞細亞は如何なる狀態に變つて居りましたらうか。

隣邦支那が孫文の革命以來、軍閥の鬪爭を年中行事とし、外夷に安んじて骨肉相剋の内輪喧嘩に浮身をやつしてゐられましたのは、決して彼等が有つて居た四五十隻のボロ軍艦のお蔭ではありません、東洋平和のために、東海鎭護の大使命に任ずる日本海軍が、儼乎として洋の東西を睥睨して居たに據るのは明らかな事實であります。

歐洲列强にして、支那大陸と云ふ甘美な御馳走に垂涎し、その巨手に握るフォークやナイフなどを動かさんと致しますならば、まづ先決條件として是非共日本海軍と云ふ嚴重な戸締を破らねばなりません、然も彼等の海軍力を以てしましては、到底日本海軍に向つて齒が立つ自信は無かつたのであります、けれどもそれは今日までの彼我海軍の狀勢でありました。若し我等にして何等の對策を講ずるところがないならば、遲くも一九四二年以後になりますとこの狀勢は餘程違つて參りまして、日本に執つては容易ならぬ字句に依つて、その多くを訂正せねばならないことに立ち到るのであります。

靜かに考へて見ますと我等の海軍は、兩度の軍縮條約に依つて、紙上の量に於てこそ、彼等に一歩を讓つたかの觀がありましたけれども、質に於ては必ずしも彼等の下風に立つものではありませんでした。

攻、防、速共に優れた主力艦、獨自の設計に成る甲乙各級巡洋艦、輕駆隼の如き水雷戰隊、世界識者を等しく瞠目せしめた潛水戰隊、どの種どの級に就いて視ましても、世界のそれ等に比較して遜色のない、全體に於て均勢の取れた立派な國產海軍でありました。

驅逐艦が莫迦に多いかと思ふと巡洋艦が誠に少かつたり、數が多いかと思ふと質が著しく劣つてゐたりして、我等の海軍の如く、健康に惠まれた五體美のやうに、潑剌たる意力に滿ちた海軍は世界の何處の海を探しても無かつたのであります。

さればこそ、たとへ紙上では劣勢となりましても、當時の國際情勢より見るならば、或程度までは國防の安全を期し得られたのであります。

この敬愛すべき我等の海軍ば、今日も厳然と存在し、明日も亦儼乎として東西を睥睨してゐることに變りはありません。

されども、昭和十七年以後になりますと、相手が極度に優勢となつて參りまして、英國は主力艦だけでも最新最鋭三万五千噸級十隻を加へて總數二十五隻となり、米國の如きも四万五千噸級を加へて英國同數程度の主力艦が揃ひ、巡洋艦以下の補助艦に至りましては、最新最鋭の第一線部隊が堂々と彼等の海に浮かんで參ります。

斯くて列强の海軍と我が日本の海軍との間に極端な力の差が生じて參

りました時に於て、現在の國際情勢を數年の後に推し進め、其處に起るべき事態と結果とに想到致しますならば、洵に傷心に堪へないものがあるのであります。

極東の風雲を臨んで起つた米國海軍は、直に布哇のパール軍港に前進し、其處を據點として渡洋進擊に移ることでありませう。

今迄、彼等の筆に成りし太平洋戰略論なるものを一見致しますと、この時に於ける米國海軍は、パール軍港に入つた全艦隊を擧げて比律賓に向はしめ、其處を前進根據地として日本を攻擊すると云ふやうに記載されて居りました、けれども今日、かゝる意見を有つて居る者は米國海軍軍人中恐らく一人もありますまい。

開戰後、比律賓やグアムが直に攻略される運命下に在りますのは殆ど決定的のものであり、且それを奪還することは先づ不可能とされて居りまして、たとひ無事に比律賓に入りましたところで、後方本國との補給線が安全であると樂觀することは出來ません、斯くの如き煩雜にして危險な作戰によるよりも、一針直に三千四百浬を航破して、布哇より直接日本々土に進擊するを有利とすると云ふ結論に到達致しました彼等は、攻防力を犧牲としてまでも各艦の航續力を增大して居るのでありまして度々申す通り、彼等が十年一日の如く大艦巨砲を主張致して居りましたのも亦決して理由の無いことではないのであります。

英國は、新に完成した新嘉坡軍港へ日本海軍に拮抗し得べき優勢な艦隊を據らしめ、日本の南門を把握しつゝ徐々に北上して參るでありませう。

現在太平洋の戰略を說き、作戰を論じます者は先決問題として、また必須條件として、米國或は英國海軍は、何程の艦隊を極東へ派遣し得るかと云ふ點を解決する必要があつたやうであります。

換言すれば、米國或は英國海軍は故國防衛の爲に、又屬領植民地保護の爲に、何程の艦艇を殘さねばならぬかと云ふことを究める必要がありました。

此の問題は、英米は勿論、日本に於ても相當論議され、研究せられて居たやうであります。

ワシントン會議當時、米國海軍次官であつたルーズヴェルトの如きは『米國は祖國防衛のため、或は艦艇性能の缺陷に依り、海軍力の三割は殘さねばならぬ、故に日本は六割の比率を受諾しても不安は無い筈だ』と云ふやうな意味のことを申して居り、英國海軍のバーナード大佐なども、

『日英戰ふ場合、本國及び屬領防備の爲には是非共三割以上の艦隊勢力を殘す必要がある』

と云ふやうに說いて居ります。

一方日本に於ては、彼等の論據をそのまゝ信じたものも無いではありませんが、その多くは英國は兎も角、米國の申すところは明らかに詭辯なることを論駁し、バルチック艦隊來航の實例に徵するも全海軍の渡洋進擊は不可能ならずと結論され警告するところがあつたやうであります

然しながら昭和十七年以後になりますと、斯くの如き數字的論議は何等の意味も無く、反古に等しい無價値な問題となるのであります。

たとへば彼等が艦艇の半數を故國に殘留させましても、東洋へ派遣し得る艦隊勢力は、日本海軍の勢力に比べて遙かに優勢であり、遙かに新鋭であります。

殊に老練を以て鳴る英米の外務省が、東洋に利害關係の深い佛國を誘ひ、好餌を以てソ聯を味方とし、多少の犧牲を忍んでも、地中海や大西洋方面の波濤を平靜ならしめて置きますならば、極東に派遣し得べき艦隊勢力は一層增强せられるのでありまして、米國に至つては、英國のやうに後顧の憂が少いために、盾式艦を除く大部が頭を揃へて眞珠港に入りますのも敢へて不可能なことではないと思ふのであります。

パール軍港を出發した米國艦隊は、有名な輪型陣を整へて北西の針路をとり、東海の蒼波を蹴つて進攻して參るのは公知の事實であります

U・S・フリートのリング・フオーメーション（輪型陣）と申しますと甚だ名高いものでありまして、此處に詳說することは出來ませんけれども、その大略を申して見ますと、この輪型陣なるものは歐洲大戰當時彼のジヤットランド海戰の研究に依つて組立てられ、一九二五年の海軍大演習に於て確信付けられた一種の渡洋陣立でありまして、その目的とするところは、艦隊の位置、編成、針路、陣列等を敵に發見せられぬやうにし、併せて主力部隊を敵の奇襲より護るにあるのであります。

その爲に主力部隊の前方四百浬乃至五百浬のところには、甲級巡洋艦を以て成る搜索部隊を配列し、之を以て前哨線を作りながら進むのでありますが、此の搜索前哨線は横二百五十浬を警戒するために、甲級巡洋艦十隻を二十五浬間隔で單横陣となし、夜間には五隻づゝの二列横陣に分けて前列と後列の距離を二百浬とするのであります。

斯く致して置きますと、夜間前列哨戒線を潛り拔けた敵の奇襲部隊は翌朝後列哨戒線に依つて發見せられることになるのであります。

同時に側面より來る敵の奇襲を警戒する爲には、本隊の兩側に數隻の巡洋艦を配備し、兩隊の間隔は三十浬でありまして、又此の側衛と本隊との間には、別の巡洋艦戰隊が遊擊隊となつて第二陣を守り、又その巡洋艦と本隊との間には、驅逐艦が配置されて主力部隊を護衛して居ります。

そして本隊の後方には補給部隊や航空母艦群が位置して居りまして、これには多數の驅逐艦や潛水艦が保護に當つて居ります。

此の陣型を見ますと、中央に在る主力部隊は直徑三十浬の强力な輪に圍まれて居りますが、此の輪を以て主力部隊を敵の奇襲、殊に潛水艦の襲擊より掩護しつゝ、豫定戰場海面へ導いて行くと云ふのでありまして、これぞ米國海軍が十數年以來、苦心慘澹の研究の結果編み出した必勝の警戒陣だと云はれて居ります。

この輪型陣は、獨り米國のみが研究して居るものではなく、英國海軍や或は日本邊りでも研究されて居るかも知れません。

然らば此の輪型陣なるものは絕對の堅牢さを誇り、之を襲擊せんとする艦艇が、如何にするも破壞突破することは出來ないものであるかと申しますと、さうとばかりも云はれぬ理由が無いでもありません。

古來からの戰史を調べて見ますならば、如何に巧妙を極めた陣立でありましても金剛不壞と稱すべきものがなかつたことを例證して居ります

から、絕對に破れぬ陣立だと申すことは出來ないかも知れません。

何れに致しましても彼等が十數年以來此の陣立を研究して居りますのも、常に大艦巨砲主義を固く主張して居りますのも、煎じ詰めれば四千五百浬の太平洋を渡洋せんが爲に他ならぬのでありまして、陣型の强弱などは別として、それを研究し訓練して居る彼等の意圖が那邊にあるかと云ふことは、我等の特に銘記して置く必要があると思ふのであります

一方英國海軍は、フイッシャー卿以來、傳統的とも云ふべき政策と戰略に基づいて、極東に事あるの日艦隊の大部を擧げてスエズ運河を通過し、波青き印度洋を航破して新嘉坡に入り、其處を據點として香港を併せ利用し、東海の風雲を臨むことであります。

佛蘭西は、カムラン灣のホンコーへに潛水艦の根據地を設け、强力なる空軍と相俟つて日本の南方を扼することになるでありませう。

ソ聯海軍は、數十隻の潛水艦をウラヂオ軍港に常駐し、日本々土と大陸交通路線を遮斷するに努めることでありませう。

そしてそれ等潛水艦の演ずる役割は、我が常陸丸を撃沈し、一個聯隊の忠勇な將士をして悲壯極まる最期を遂げしめた往年のウラヂオ艦隊（裝甲巡洋艦ロシヤ、グロムボイ、リユーリツク）の致した慘禍の比ではありますまい。

斯く觀じ來ります時、私共の腦裡に閃くものは一九四二年前後の一大危機であります。

抑々今次事變に於て、我が海、陸、空の三軍は、嘗て戰史上にも類例なき赫々たる戰果を收め、既に北、中支には民衆の總意に依る親日防共の新政府が誕生して、五色旗下に明朗支那の建設を進め、着々として王道樂土が顯現しつゝあります。

一方蒙古に於ても、今次聖戰を絕好の機會として、蒙古人の蒙古を確立し、幾百年以來、彼等が夢に畫がきし蒙古自治への第一歩を踏出したのであります。

滿洲帝國は、建國以來茲に七年の星霜を重ね、內治外政共にこれ擧り獨伊兩國を始めとし、眞の平和と正義を讃仰する歐洲數ヶ國と修好關係を結び、名實共に獨立國家として、亦ゆるぎなき大帝國として榮光ある將來が約束されて居ります。

斯くの如く東洋平和の招來と、民族自治とに第一歩を印して、亞細亞人の大亞細亞を實現せしめ得ますのは一に大日本帝國 天皇陛下の御稜威の然らしむるところでありますが、又一面に於て、眞に平和を望み、正義を愛し、ひたすらに東洋民族の至福を念願とする我が天孫民族の協力と、盡忠報國の念に燃ゆる海、陸、空軍將士の奮鬪善戰に依る賜であります。

殊に南北支那の野を海を、一死以て紅血に染め、世界人類の平和と正義の爲に殉じました幾多忠靈の存在することを考へますならば、如何に大亞細亞の人粧たり、平和人道の礎たりと致しましても、決して安價な犧牲であると申すことは出來ないのであります。

然も極東民族を壓迫し、搾取し、その暴利の上に自國の繁榮を打樹てんとする歐米列强は、今次事變に於て飽くまでも人道の敵たる國民政權を支援し、日尨大なる軍備擴張を行ひ、彼等の海軍が極度に優勢となり

ました時機に於て、其の強力なる武力を背景とし、日本の大陸政策に強硬なる發言、或は容喙を試みんとし、若し容れられずば一擧に武力を引提げて臨まんとして居りますのは、苟くも國際情勢に通ずる者の否み難き事實でありまして、此の時我が日本が彼等の軍備の前屈に伏せしめられ四十餘年の昔の如く、たとへ一歩でも讓りますなればそれは百歩を讓るの始めとなり、百歩を讓ると云ふことは南北支那は勿論のこと、遂には滿洲をすら彼等の蹂躪するに委せねばならぬことをも意味するに至るものであります。

假に、日本海軍々備が今日の狀勢のまゝ數年を過し、事あつて始めてそれに對處せんと致しましても、既に大なる勢力の相違は我が日本海軍の上に絶大なる天惡のあらざる限り、我が謀將の神算奇計も、忠勇なる將士の決死奮鬪も、之を如何ともすることが出來ないのであります。

我が南方交通線は臺灣以南に於て直に遮斷せられるでありませう。

今日迄我等の池沼であつた日本海も、敵潜水艦の跳梁に委せねばならぬことにもなりませう、そればかりではありません、最惡の場合を考へますと、我が海軍力不足の爲に臺灣はおろか、朝鮮との交通さへも脅威せられるに至るのでありまして、殊に後方兵站線を失はんか、如何に忠勇なる派遣將兵と雖も退いて祖國に歸還するか、或は又孤立を覺悟して死戰するか二途の中、何れかを選ぶ苦境に立たねばならなくなるのであります、假にも左樣なことは、我等日本人の到底耐へ得ることではありません。

八、確保せよ太平洋の制海權

歐米列强の海軍大擴張に對し、日本海軍が現狀のまゝ何等の對策をも講ずることが無いならば、一九四二年前後に於ける彼等の海軍は非常に優勢なものとなつて參りますことは屢々申し述べました。

さう致しますと、一旦緩急ありました場合、極東の戰場海面に於て相

然りとせば是非共今日に於て、斯かる危險を未然に防止する爲に、我が海軍々備の上に何等かの對策を講じて置きますことは當然以上に當然なことでありまして、來る一九四二年を待つて始めて泥繩式に手段を講ぜんと致しましても、『平時海軍即戰時海軍』なる鐵則の前に、六日の菖蒲十日の菊の諺が眞實なりしを悟る以外、何等益するところはないのであります。

幸か!!!、不幸か!!!。

我が海軍々事に對し、常に無關心であり得た人々も、來らんとする此の危機に臨むに及び、始めて帝國海軍の上に眸を轉じ、海國日本が生存する爲には海軍々備の如何に重要、かつ不可缺なものであるかを切實に悟ることが出來るでありませう。

まみゆる彼等の艦隊は、日本海軍を遙かに凌駕するものであることは想像され得るところであります。

此の時に於ける日本海軍の將士達は、必ずや機に臨み變に應じ、或は奇襲艦艇を利用し、或は航空機を以て機動戰術の妙味を遺憾なく發揮し味方の劣勢をも顧みず、來攻する敵に向つて敢然對抗するでありませう、日本海軍の將士達は常に申して居ります、

『我々は、如何なる狀況の下に於ても死を賭して戰ふことを辭するものではない、我々は君國の爲に戰ふためにのみ存在してゐるのだ、然し日本國民は祖國の爲に戰はんとする我々に對して、切めて國防の安全を期するために、西太平洋の制海權を確保するに足るだけの武器を與へて呉れる義務がありはしないだらうか』と。

なる程これは尤もな要求であり、至極當然な注文であります。

日本海軍將士の素質拔能が如何に優れて居りましても、或は又單艦對單艦の戰鬪力に於て常に卓越した能力を發揮し得ると致しましても、艦隊と云ふ戰鬪單位の勢力に餘り甚だしい運庭がありましては、時に勝つべき戰ひにもむざ〳〵と破れ、我が海軍將士をして徒らに悲憤の涙を絞らしめる結果を招くでありませう。

度々申しますけれども、彼のジヤットランドに於ける英獨海軍最後の決戰は、英國海軍の一〇に對し、獨逸海軍はその半分である五の勢力を以て戰ひ、損害の比はドイツの受けた五に對し、英には一〇を與へることが出來ました、然も終局に於て一〇對五の劣勢を以てしては最後の勝利を收むるを得ず、遂に退却せねばならぬ餘儀なきに立到つたのであります。

若しも斯くの如き能率高き獨逸海軍が、一〇對一〇か切めて一〇對九の勢力を以て戰つて居りましたならば、それでも尙勝利の榮冠が英國海軍の頭上にかけらるべしとは、私共の首肯し得ぬところであります。

殊に北海より地中海にかけ、事實上に於て制海權を握つて居た獨逸潜水艦が今少しく餘力を存して居りまして、その得意とする奇襲戰術の妙味を充分に發揮することが出來ましたならば、必ずや生命にも代へ難き英國のすべての制海權は獨逸海軍の爲に綺麗に掌握され、キール軍港に上つた革命歌はロンドン邊りで歌はれることになりまして、英國艦隊の檣頭には、XGE（我降伏ス）なる信號旗が揭げられる破目に陷つて居たかも計り知れないのであります。

ジヤットランドの海戰後、皇帝カイゼルは

『獨逸の議會が、朕の造艦計畫さへ承認して居たならば、この度の海戰に於て獨逸海軍は完全に北海の制海權を掌握し、英國をして必ず降伏せしむることが出來たであらう』

と口惜しがられましたのは誠に尤もな次第であります。

斯くの如く、海を以て隔たりたる國と國との戰爭に於て、その勝敗を決定付けますものは常に制海權の得失如何にあるのでありまして、海上權力を敵の手中に握られたがため、敗戰の憂目を見なければならなかつた國家の實例は、史上到るところに記載されて居ります。

嘗てハンガリーの史家エミール・ライヒは國家の興亡史を書きまして『多くの國家を滅亡に導いたものは、その國民が徒らなる平和を希ひ武

備を疎にし、戰はねばならぬ戰爭をも回避したものに多い、殊に海上の武備を忘れ、制海權を失つた國家は何れも悉く亡んでゐる』

と云ふ意味のことを申して居りますが、事實は當にその通りでありまして、前後四千年の世界史が綴つた國家の興亡史は、常にこの定規より逸脫してはゐないやうであります。

遠くは紀元前二百四十年のポエニ戰爭に於て、往時の大眞カルタゴが滅亡の一途へ運命付けられましたのは、エガテ島沖の海戰に慘敗して制海權を失つたからでありました、降つて十六世紀時代の强國スペインが今日の如く落魄致しましたのは、彼のインヴインシブル・アルマダが慘々な目に逢つて制海權を奪取された爲であります、又オランダが今日の如く衰へましたのも、海上の權力を英國に奪はれたことに基因して居り稀世の英傑ナポレオンをしてセントヘレナの孤島に憤死せしめましたのは、コリングウードの率ゐる艦隊がトラフアルガー岬沖の一戰に於て、ネルソンの率ゐる英國艦隊に擊滅せられ、英佛海峽四十浬の制海權を掌握されたが爲であります。

我が國の歷史を繙いて見ましても、彼の二回に亘る征韓役が曖昧な不首尾に終つて居る最大原因は、朝鮮の提督李舜臣の率ゐる海軍のために後方本國と遠征軍との連絡が順當に行はれなかつた點にあるのは事實であります。

日清日露の兩戰役に於て、我が國があれだけの勝利を得ました最大原因は、常に必要なる海上の權力を我が手に握つてゐたからでありまして若しも不幸にして我が國が制海權を喪つて居りましたならば、日本帝國今日の繁榮は到底有り得なかつたでありませう。

今次事變に於きましても、吳淞に、杭州灣に、或は又バイアス灣に海南島に、前古未曾有とも云ふべき大船團が堂々と渡洋し、何等の事故もなく敵前上陸を敢行することが出來ましたのは、南北支那の海上權力を我が手中に握つて居たに他ならぬものでありまして、假に支那に海軍らしい海軍が存在し、少しでも我が海上權力を脅すやうなことがありましたならば、如何に天祐と神助とに惠まれて居ると致しましても、あれ程の戰果を戰史の上に記載することは出來なかつたでありませう。

日露戰爭當時、ウラヂオ艦隊に依つて我が制海權の一部が脅威せられた時の物情を回想してごらんなさい、僅かに三隻の敵巡洋艦が北部日本海より津輕海峽を通過して東京灣沖に現れ、その間二三のわが商船が擊沈せられた爲に、幾多の船舶や漁船などは何れも港内深く閉込められて海上交通は杜絶し、延いては國内產業にさへも甚大な影響を及ぼし、一般國民生活の不安が如何に深刻を極めましたか計り知れぬものがあつたのであります。

溫室に育つた草花は曉の露をだに恐れると申します、私は日本人を溫室の草花に譬へようとするものではありません、けれども敗戰の苦痛を知らぬ幸福な國民中には、平時に於て兎角軍費を出惜しんで居りながら一旦緩急ありますとき、僅かに戰爭の一過程に過ぎない出來事に對しても悉く之に非難攻擊を加へ、提督の邸宅へ石を降らすの醜態をすら演じましたのは、健忘性に富んだ人々と雖も忘れては居りますまい。

若しも今日海軍力不足の爲に往年の如く、たとへ一部でも海上權が脅

されるに至りましたならば、それこそ近代戰の寵兒を誇る航空機や潛水艦などが、早くも金甌無缺な神州の空に海に跳躍し、常陸丸事件の如き悲痛事は、毎日隨所に繰返されるものと覺悟せねばなりません、殊に今日の如き國際情勢を二三年後に推し進めて考へて見ますならば、二ヶ國或はそれ以上の强大なる聯合勢力とも對抗せねばならぬことを豫想せられて居りますとき、斷乎として西太平洋の制海權を確保し、これを維持して參りますためには、是非共今日に於てそれだけの準備と覺悟とを成さねばならぬのでありまして、万一之を怠るやうなことがありましたならば、極東の海上權力は何時か必ず彼等の手中に掌握され、今は歷史の一隅に殘るカルタゴの辿つて行つた運命を、我々も亦辿るべく强制されるやうな悲慘なことにもなるのであります。

繰返して申します、今日以後に於て、强國對强國の戰爭は、海洋制覇戰に始り海上權力の爭奪戰に終るのであります、海上權力即ち制海權にして一度失はれんか、最早戰爭は敗けたも同然でありまして、その國家と國民は遲かれ早かれ衰亡の挽歌を聞かされる破目となるのであります

今日我等の先輩や憂國の士が、右手を擧げて歐米列强の軍備擴張とその目標が那邊にあるかを指摘し、左手を翳して國民同胞の關心と奮起とを促しつゝある由因のものは、一に日本帝國の生存と繁榮の爲に、東洋永遠の平和を樹立せんがために、西太平洋の制海權を確保し、之を維持するに足る海軍々備を建設し、以て帝國海軍將士をして心おきなくその重責を全うせしめんとするに他ならぬものであります。

去る第七十四回帝國議會休會明けの初期に於て、

『英米列國は海軍力大擴張を斷行しつゝありて、我が制海權の一部はすでに侵犯されて居るかの觀がある、國防上當局は如何に視て居るか』

との質問がなされたに對し、米内海軍大臣は、決然たる面持を以て、

『海軍としては制海權確保の成案を得て居る、然もこの成案たるや、帝國海軍從來の主張たる不脅威不侵略の範圍を出づるものではないが、亦一面に於て我が立場を微動だもさせぬ程度のものである』

と云ふ意味の答辯を致しまして其の確信を披瀝するところがありました

いま此の答辯を反復翫味し、之を要約致して見ますと、

『帝國海軍は、西太平洋に於ける制海權を確保すべくその軍備計劃はすでに樹立されて居る、然もこの計劃たるや日本海軍の傳統とする攻むるに足らず守るに足る、いはゆる不脅威不侵略の範圍を越えるものではないが、然しこの成案にして實現されるならば、西太平洋の制海權は微動だもするものではない』

と云ふにあります、さう致しますと、

『列强の軍備擴張に對應すべき計劃は既に樹立されて居る』

と云ふことゝ、

『その計劃は列國の軍備擴張に追隨するものではなく、依然不脅威不侵略を建前とした自主的海軍々備の確立にある』

と云ふ二つの意義を看取することが出來るのであります、帝國海軍々備の原則は、何處までも不脅威不侵略にあることは明らかな事實でありますが、然らば不脅威不侵略の海軍々備とは如何なる性質、如何なる程度のものでありませうか、先づそれを說く前に海上兵力の特質と云ふこと

を理解して頂かねばなりません。

凡そ海上作戰究極の目的は、敵の艦隊を撃滅して所要海面の制海權を確保するに在ることは申すまでもありませんが、海上兵力は同じ兵力でありましても、陸上の兵力とは著しい相違點があることを重視する必要があります、即ち海上の作戰舞臺は廣袤數千浬に亘る渺茫たる大洋でありまして、敵味方の艦隊が相接近致しますと、廣濶な戰場海面を縱横無盡に馳騁しながら、全艦隊を擧げて攻擊力の時間効果を極度に發揮し、戰鬪の勝敗は實にこの轉瞬の間に決せられるのであり、從つて陸戰に於て屢々見られる戰線固着と云ふが如き現象は思ひも寄らぬところであります、然も彼我の全勢力を擧げて龍虎相搏つ海上の決戰は、全戰役を通じて唯一回あるのみであり、若し此の一戰に敗れましたならば、爾後再び立つことは不可能となり、陸戰の如く豫備隊の增援もなければ、或は又捲土重來して逆襲に轉ずることも出來ません、即ち海上戰鬪には現有兵力の全部が之に參加するものであります、故に海軍力に豫備兵力無く又之を急造して補充すると云ふが如きことも出來ません、茲に於て開戰後に於ける海軍の軍費は、陸軍のそれに比べて著しく少いのを例として居りますが、平時に於ける軍事費は相當多額に上るのであります、即ち海軍は平時に於て既に戰費の一部を使用しつゝありとも視ることが出來るのであります、これ各國海軍が現有兵力を重視し、艦艇兵器の新鋭を整備充實せしめると共に、兵員の教育訓練に精進して居る所以でありまして、海軍に關する限り、戰爭を俟つて後軍を動員するものではなく、常備兵力そのものが戰時兵力のすべてゞあると云ふことがおわかりのことと思ひます。

私は海軍々事を論ずるに當りましては、何時も彼のワシントン、ロンドン兩軍縮會議當時に於ける日本國内の軍縮に對する輿論を回想するのを常と致して居ります、その當時帝國海軍に對する一般の輿論や態度はどうでありましたか、英米の吹く笛に踊らされた人々は、彼等が常に稱ふる正義人道論を額面通りに受け容れて世界の平和を絶叫し、遂に會議を不利に導き、延いては滿洲事變や今次事變を惹起せしむる遠因をすら作るに至つたのであります、私は今茲に過去の出來事を剔抉して、我が海軍の上に暗雲を漂はしめた當時のことを責めんとするものではありません、けれども往年に比べて一層重大なる危機を迎へんとしてゐる今日當時の如き海軍々事に無理解なる輿論が國民の中に流布せられ、瀰漫してゐると致しますならば、それは容易ならぬことでありまして、何事を措いても之を是正し何處迄も之を匡正せねばならぬと思ふのであります

既にしてワシントン、ロンドン兩軍縮會議には、國民の支援が無かつた爲に、職はずして多くの軍艦を擊沈せられてしまひました、そしてその後に來たものが滿洲事變であり、今次事變であると云ふことが出來ますならば、今世界を擧げて吹荒ぶ軍擴の嵐の中に在つて、再び海軍に對する國民の關心が薄く、又軍備の上に缺陷を招くやうなことになりましたならば、次ぎには必ず滿洲事變や今次事變以上の重大事態が、我等の頭上に見舞ふものであることを警告せずには居られません。

世にはひとかどの軍事通なるものが居りまして、海軍々備の相對性、或は自主的軍備なる言葉の意義を履違ひ、英米海軍の七割を以てすれば

對等に戰ひ得るとか、彼等の戰艦に對するに比較的金のかゝらぬ潛水艦を以てすれば國防の安全を期し得られるとか、何等の根據もない論をなすものもありますけれども、之は明らかに歐米の延べし宣傳に乘つて居るのでありまして、現在の日本海軍に執つてこれ位厄介であり、これ位危險な輿論はないのであります。

潛水艦のみで戰爭が出來るものならば、歐米と雖も巨額の費用と長い年月を要する戰艦を造りは致しますまい、六割や七割で戰つて勝利を得んとするならば、是非共公式通りの威力係數と僥倖とを必要條件と致します、然も國家の運命を決すべき戰爭、殊に海戰に於て僥倖を希ふ如きは嚴に誡むべきことだとするならば、敵と對等に戰ひますためには、戰艦には戰艦を以て當り、十割軍には十割の勢力を以て對抗せねばなりません、然も勝利の絶對性を我にあらしめんとするならば、國情に即し國民性に適した軍備を建設し、且量と質との兩面に於ても亦萬全なることを條件とするものでありまして、之をこそ自主的海軍軍備と申し得られるのであります。

只今我が國民の當面してゐる最大の關心事は、支那事變の進展にかゝつて他を顧みるの遑なしと云つたやうに見られるのでありますが、飜つて世界の國際情勢と列强の海軍々備擴張とに眼を致しますならば、帝國海軍々備の强化充實如何は國家の安危存亡にも關する重大問題でありまして、今次事變の目的を達成し、東亞永遠の平和を確保する爲にも、海軍軍備の確立は極めて密接重大な關係を有し、また東亞新事態の狀勢とは密接不可分の關係にありますことも明白であります。

日本國民は、今迄に於ても相當な軍事費を負擔して來て居ります、けれども今日の時局は、海軍々備の擴充に對して一日の偸安を許さゞるものがあり、國民擧つて一段の奮起を翹望せられて居るのとき、國家あつての國民であり、戰勝あつての繁榮であることを考へますならば、國家萬年の大計のために、東亞新秩序建設の爲に、國民同胞は裸になつても必要なる軍費は喜んで之を負擔し、その義務を果さねばならないのであります、君國の前に生命をすら捧げた幾多將士の上を想ひますならば、軍費負擔の如きはいと易き問題だと申さねばなりません。

日露戰爭に費した軍費の總額は約二十億と申されて居りますが、前後三年に亘る今次事變に要した軍事費は既に百二十億圓にも及び、以て近代の戰爭が如何に高價なものであるかと云ふ事實を識ることが出來ますと共に、次ぎに來るべく豫想される戰爭のことを考へますならば、それに要する軍費の如きは、實に想像することも出來ない巨大な數字となつて世人を驚かせることでありませう。

それに比べますと、海軍々備充實の如きは誠に安價なものであると申し得られるのであります、假に支那事變に要せし軍費の幾割かを割いて之を海軍々備擴充强化に充當せしむることが出來ましたならば、極東の海上權力は常に我が手中に掌握することも出來、次ぎの戰爭は彼等より回避せしめ得るのみならず、明朗な東亞の新天地は、昭和聖代の光被に依り、更に燦然たる輝かしさを增すことでありませう。

九、戰史や學理に現れたる劣勢海軍の敗因

量の劣勢な海軍も、戰略的好條件に惠まれ、卓越した戰術を巧妙に利用し、かつ戰士の技能或は攻擊的精神が、敵に數等優つて居りましたがため、時に優勢な敵艦隊に對抗し得ました例も無い譯ではありませんが、然し大局に於て確乎たる勝利を得ますのは、常に量の優勢な海軍であると云ふことは幾多の戰史も之を證明し、亦數理的にも之を證據立てることが出來るのであります。

讀者の中には、日清、日露の兩戰役に於て、我が海軍が常に寡を以てよく衆敵を擊破し、武名を千載に輝かせましたやうに記憶せられて居る方も尠くないでありませう。

事實に於て、彼我海軍の全勢力を比較して見ますと、當時の清國にせよ露國にせよ、數に於ては正に帝國海軍の上にあつたのであります。

試みに、兩戰役に於ける彼我の勢力を表して見ますと、

一、日清戰爭

	總排水量	比率	勝敗
日本海軍	五七、〇〇〇噸	七〇%	勝
清國海軍	八三、〇〇〇噸	一〇〇%	敗

二、日露戰爭

日本海軍	二八〇、〇〇〇噸	七九%	勝
露國海軍	三七〇、〇〇〇噸	一〇〇%	敗

右は開戰當初に於ける兩國海軍の全勢力を、噸數を以て表し、之を比較したものでありまして、戰場に現れた數ではありません。

日清戰爭に於ける清國海軍八万三千噸の中には、戰鬪に參加しなかつた南洋水師を含んで居り、實際の戰鬪に參加致しました北洋水師の總數は、殆ど日本海軍と同じ程度の勢力でありました。

又日露戰爭に於て露國海軍は、全體より見れば前記の如く優勢でありましたけれども、兵理を無視し、兵力を分散するの大過誤を冒しましたため、我が聯合艦隊の各個擊破するところとなりました、故に戰場へ現れました露國海軍の勢力は、日本海軍の下位にあつたのであります。

今各海戰に就いて、その勝敗の跡を檢討して見ますならば、數に於て優勢なる艦隊は、常に勝利の榮冠に飾られて居るやうであります。

言葉を換へて申しますと、勝利を得るものは、何時も數の優勢な艦隊であると申すことが出來るのであります。

我等の手に依つて戰史の上に不朽の威名を記載致しました各海戰に於ける彼我勢力を、再び噸數比を以て表して見ることに致します。

(一) 豐島沖の海戰（日清戰爭）

	總排水量	比率	勝敗
日本艦隊	一一、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
清國艦隊	四、二〇〇噸	三八%	敗

東郷元帥が浪速艦長として參戰し、高陞號を擊沈した有名な海戰でありまして、我は第一遊擊隊の吉野以下三隻であるに對し、彼は濟遠以下の三隻でありました。

(二) 黃海々戰（同）

日本艦隊	三九、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
清國艦隊	三五、〇〇〇噸	八九%	敗

日清戰爭に於ける兩國海軍主力部隊の決戰でありまして、清國には後日我が艦籍に入つた定遠、鎭遠の二大甲鐵艦がありましたけれども、數に於ては日本が勝り、又彼等は開戰の初頭に時代錯誤な梯陣を以て我が精鋭に當りました結果、その兩翼を擊破せられて大敗し、茲に戰局の大勢は決せられるに至つたのであります。

(三) 旅順攻擊（日露戰爭）

日本艦隊	一八四、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
露國艦隊	一三〇、〇〇〇噸	七一%	退却

旅順港內に在つた露國太平洋第一艦隊と、我が聯合艦隊との間に行はれた第一回交戰であります。

(四) 八月十日の海戰（同）

日本艦隊	一四〇、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
露國艦隊	一〇〇、〇〇〇總	七一%	敗

前記露國艦隊が、我が封鎖を破つて旅順を脫出し、ウラヂオへ逃走せんとして我が主力の邀擊するところとなり、敗れて再び港內に退却し旅順陷落直前、戰艦セバストポールを除いて或は自沈し、或は在港のまま擊沈されるに至りましたが、それらは後日引揚げられて我が艦籍に入りました。

(五) 蔚山沖海戰（同）

日本艦隊	五三、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
露國艦隊	三七、〇〇〇噸	六〇%	敗

彼は常陸丸を擊沈せるウラヂオ艦隊でありまして、上村第二艦隊に追跡され、十對六の比で最も勇敢に戰ひましたけれども、數の劣勢は如何ともすることが出來ず、リューリックは擊沈され、ロシヤ、グロンボイは大破して戰鬪力を失つてやうやくウラヂオへ逃入し、爾後の戰鬪には參加致しませんでした。

(六) 日本海々戰（同）

日本艦隊	二一〇、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
露國艦隊	一六〇、〇〇〇噸	七〇%	全敗

申す迄もなく、皇國の興廢を此の一戰に賭した對馬沖の海戰でありまして、バルチック艦隊は戰艦及び大口徑砲に於て優つて居りましたけれども、全體に於ては七割の劣勢なるに加へ戰術或は砲術が著しく劣つて

居りましたゝめ、遠征の雄圖も空しく艦隊を擧げて或は撃沈され、或は降伏し、遂に全滅するに至つたのであります。

以上の例に徴して見ましても、數の劣勢軍は優勢軍の前に慘敗しなければならぬ運命にあるやうであります。

我等の海戰記錄ばかりではなく、之を歐洲大戰に於ける英獨海軍數度の交戰の結果に就いて見まするも、鐵則であるかの如く劣勢軍は常に慘敗を喫して居ります。

歐洲大戰史に依つて精査致して見ますと、

(一) ドッガーバンク沖海戰

獨逸艦隊	三三、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
英國艦隊	二八、〇〇〇噸	八七%	全敗

裝甲巡洋艦シャルンホルスト、グナイゼナウ以下を率ゐて東洋を脱出した獨逸東洋艦隊司令官フオン・シューペイ提督は、コロネル沖に於てクラドック提督の率ゐる英國艦隊と遭遇交戰致しましたが、英國艦隊は數に於て八七%の劣勢である上に、艦は何れも老朽のものゝみでありまして、敢然と戰ひは致しましたけれども、遂に全滅の厄を蒙るに至つた誠に悲慘な戰鬪であります。

(三) フオークランド沖海戰

英國艦隊	七〇、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
獨逸艦隊	三三、〇〇〇噸	五〇%	全敗

コロネル沖海戰に全勝せし獨逸東洋艦隊は、歸國の途フオークランド島に在る英國海軍根據地を襲撃せんと致しましたところ、たまたま其處に待期し、コロネル沖海戰の仇怨を晴らすべく、秘かに準備して居りました英國巡洋戰艦インヴインシブル以下五隻の迎へ撃つところとなりました。

獨逸東洋艦隊は、英國艦隊に比べて噸數比が約半分であるに加へ、その主力であるシヤヤルンホルスト及びグナイゼナウの兩艦は裝甲巡洋艦であり、主砲の如きも八吋でありましたが、英國艦隊のインヴインシブル級は巡洋戰艦であり、その主砲は十二吋でありまして、戰鬪開始後間なもく獨逸艦隊は射程外に遂はれ、自分の發する砲彈は敵に屆かずして敵彈ばかり命中せしめられると云ふ悲慘な狀態に陷りましたが、艦隊全員は開戰の當初より既に全滅を覺悟し、獨逸魂を遺憾なく發揮して祖國の名譽にかけ、最後迄勇敢に戰ひましたけれども、格段な勢力の相違は之を如何とも成し難く、旗艦シヤルンホルストを始め、グナイゼナウ輕巡洋艦ライプチヒ、ニュールンベルグ等は相次いで撃沈され、ドレスデンのみ辛うじてバルパライソ港へ逃れましたが、尙も英艦の追撃に會ひ遂に自爆してその名譽を完う致しました。

彌來星霜茲に二十四年、一九三八年には戰艦二万六千噸級第二代のシヤルンホルスト及びグナイゼナウの二隻（各三萬裝二十八糎砲九門）が竣工致しまして、今日の躍進獨逸海軍に其の新鋭を誇つてゐます、又、先般ヒットラー・ユーゲント訪日團を乘せて參りました『北獨逸ロイド』商船グナイゼナウ號、並びにシヤルンホルスト號の兩姉妹船は時に壯麗な姿を神戸突堤に現しますが、これ等は皆フオークランドの臨終戰に於て、飽く迄も獨逸海軍の名譽の爲に全滅せし兩巡洋艦（一一、六〇〇噸二一糎砲八門、一五糎及砲一二門）の最期を惜しみ、武名を偲ぶためにその名を繼承せしめたものであります。

又同艦隊の最期を飾つたシューペー中將の武人的態度は、今も尙獨逸國民の腦裡に深く刻まれて居り、アドミラル・フオン・シューペーの名は、獨逸海軍の誇とする一万噸ポケット型戰艦の上に冠せられ、再興海軍の中堅となつて北海の波濤を睥睨して居ります。

(四) ジヤットランド海戰

英國艦隊	一、一四四、〇〇〇噸	一〇〇%	勝
獨逸艦隊	六六二、〇〇〇噸	五八%	退却

ジヤットランドの海戰は、世界最近の大海戰であると共に、又歐洲大戰に於ける最大の海戰であります。

此の戰鬪に於ても獨逸海軍は最も勇敢に戰ひ、半分の勢力を以て良く倍の優勢に對抗し、自分の蒙つた損害の二倍を英國艦隊に與へることが出來ました。

戰術の上より見ますならば、敗戰したのはむしろ英國であると申すべきでありますが、然も戰略的には數の劣勢を如何とも致し難く、遂に壓倒的優勢な英國海軍の前に旗を降し、敗戰に甘んじなければならなかつたのであります。

斯くの如く、近世に於ける海戰史を繙いて見ますならば、その悉くと申してもよい程優勢海軍の常勝が記錄されて居るのでありまして、戰術の巧拙、砲撃の優劣、砲熕の大小、防禦力の厚薄、速力の遲速、士氣の興廢等、機械力及び人力の相違は、或程度迄その勝敗を左右することが出來ませうけれども、戰爭の大局に立つて考察致します時、數の優劣は勝敗を決定附ける第一の要素であると斷言して誤りは無いのであります

一面、之を學理的方向より見ますならば、如何なる結論が生まれるものでありませうか。

ワシントン軍縮條約締結當時、野滿理學博士は、日本に割當てられた主力艦六割比率を以て果して國防の安全が期し得られるや否や、又十對六の比率は、戰鬪に際して如何なる結論を齎すものであるかと云ふことに就いて、高等數學の學理に基づきこれを解くことが出來ました、即ち『N自乘の公式』と稱せられて居るのがこれであります。

今優勢軍（即ち十割軍）をN_1、劣勢軍（即ち六割軍）をN_2と致しまして、戰場海面に於ける各艦の戰鬪價が相等しいものでありますならば、Nが全滅するのは何時間の後であるかと云ふ問題が、聯立微分方程式の

$$T = \frac{1}{2K} \ln \frac{N_1 + N_2}{N_1 - N_2}$$

なる公式に依つて解き得ることを確めたのであります。

故に、十割軍が六割軍を全滅せしむるに要する時間は、

$$T=\frac{1}{2\times0.026}\,Ln\,\frac{10+6}{10-6}=27分$$

（Tは時間、Kは一分間の威力係數で約〇・〇二六）

即ち各艦の戰鬪力が同等であります場合、六割軍は十割軍の爲に實に二十七分間で全滅されてしまふのでありまして、七割の場合でも三十三分間に全滅せられてしまふのであります。

これは誠に驚くべきことでありまして、斯うも早く片が附くものかと意外に思ふのでありますが、學理上には正しくさう出るのであります。

我が海軍に『戰ひは最初の五分間で極る』と云ふ言葉がありますが、恐らく此の間の消息を申したのでありませう。

更に驚くべきことは、六割軍が全滅する二十七分間に、十割軍はどれだけの損害を受けるかと申しますと、

$$Tn_1=\sqrt{n_1^2-n_2^2}\ \cdots\cdots 勝利軍殘存數$$

なる公式に依つて、十對六の場合、

$$Tn_1=\sqrt{10^2-6^2}=8$$

と云ふ結果が出るのであります。

即ち十對六で戰ひまして、六割軍が全滅致しましても、十割軍は尚八割を殘すのであります。

言葉を換へて申しますと、十割軍は二十七分間に六割軍を全滅せしめましても、自分は僅かに二割を失ふのみであります、その二割に致しましても沈沒すると限つたものではなく、二割だけ戰鬪力を失ふと云ふ意味にも執れるのであります。

實戰の場合、何も斯かる現象のみが現れるものではありますまいけれども、然も數理的には確にかう現れて來るのであります。

これを以て見れば、六割や七割の劣勢では頭から戰はぬ方がよいとも考へられ、又戰つて必ず敗けるものならば、第一軍備などは諦めてしまつた方がよいやうに思はれますけれども、又一概にさうとばかりも申せない理由が無い譯でもありません。

どう云ふ譯かと申しますと、敵の軍艦と、味方の軍艦の戰鬪力が相等しいものでありますならば、N自乘の公式に依つて絶對絶命の結論が出ますけれども、軍艦の戰鬪價、即ち戰鬪力なるものは、國情に依り、或はその海軍政策に從つてそれぞれ異つて居るものでありますから、前に述べました公式のK（威力係數、即ち戰鬪力）は必ず相違して居るのであります。

然して此のK、つまり威力係數は如何にして算定せられて居るかと申しますと、大砲の數と、その大砲が一分間に發射し得る砲彈の數と、實際に發射する出彈歩合と、その命中率との積を敵艦を擊沈するに要する砲彈數で割ればよいのであります、現在各國が保有して居る主力艦を、平均して考へまして、大砲の數が十二門、十四吋砲の一分間に發射し得る彈數は一發半、實際の出彈歩合を（即ち一發半の）八割五分、命中率は各國海軍の研究に從へば一分間を標準として〇・〇二五となり、又大概の戰艦は十五發の命中彈で沈むものとされて居ります。

勿論命中致しましても、その命中個所が悪ければたとへ何十發命中させましても擊沈することは出來ませんが、普通には致命的部分への命中歩合も、これを以て、總數十五發の命中彈で擊沈し得るものと算定されて居るやうであります。

之を公式で現れしますと、

$$\frac{GNPQ}{S}=\frac{12\times1.5\times0.85\times0.025}{15}=0.026K$$

（Gは砲數の一二門、Nは一分間に發射し得る彈數一發半、Pは出彈歩合の八割五分、Qは命中率〇・〇二五、Sは擊沈所要彈數の十五發）

となるのであります。

この中で最も重要であり、重視しなければならぬものはPとQとであります。

巨砲幾百、徒らに天を指して居りましても、實際に於て出彈歩合が悪ければ、それはデクの砲と大差がないでありませう。

發射速度が如何に大でありましても、命中率が低く、いくら擊つても當らないと云ふやうなものでありましたならば、それは單に海中の魚族を驚かすだけの悪戯に過ぎないでありませう、從つて發射速度の優劣と命中率の大小は、勝敗を決する上に重大な結果を及ぼしますことは明白な事實であります。

餘談になりますが、故日高謹爾少將の研究するところに依りますと、彼のジャットランドの海戰に於て獨逸巡洋戰艦隊の十一吋乃至十二吋砲は二十秒或は二十五秒間に一回の齊射を行つたに對し、英國巡洋戰艦隊の十三吋或は十四吋砲は、一回の齊射をなすに四十秒乃至四十五秒の時間を要したとのことであり、獨逸旗艦リッツオが四回の齊射を試みる間に、英國旗艦ライオンはやうやく二回の齊射をしたに過ぎませんでしたさう致しますと砲の口徑に差異はありますけれども、兩國艦隊の戰鬪力は二對一、即ち獨逸の一艦はよく英國の二艦に對抗し得た譯でありまして、千機の好機に會しながらむざ〳〵機會を逸し、獨逸艦隊の倍の勢力を持ちながら獨逸艦隊の蒙つた倍の損害を受け、英國民をして、

『ネルソン時代には、敵の一發に對してよく三發を酬いることが出來た、然るにジャットランド海戰に於ては、敵の三發に對してやうやく一發しか酬いることが出來なかつた』

と歎かしむる結果を招いたのであります。

戰史の記載するところに據りますと、日清戰役當時、黄海々戰に於ける日本海軍の砲力は、清國北洋水師のそれに三倍し、殊に日露戰役に於ける我が海軍の砲術は著しい進歩を遂げまして、對馬海戰の際の如き淺間、出雲級や、日進、春日などの諸艦は素晴らしい砲力を發揮し、その射擊力は速くて八秒、遲くも十五秒間に一發の彈丸を見舞つたさうであります。

往時と現在とでは、兵裝も違へば裝置も異つて居りますから、只今日本海軍の持つ砲術が如何なるものであるかと云ふ事は一概に申すことはできませんけれども、尠くも當年のそれより劣つて居るとは信ぜられないところであります。

然らば、斯くの如く甚だしい砲力の優劣を招來せしむる原因が何處に在るかと申しますと、精神力の濃薄は勿論、一に訓練の良否の然らしむ

るものであり、又一面に於て名砲術長、名砲手の在否多少に依つて決せられるものと思ふのであります。

如何に機械力が優勢な海軍でありましても、百發一中の砲力を以てしては到底百發百中の劣勢軍に對抗すべくもありません、或は命中せしめましても、機關部やその他の要部に當てましたのと、さうでない箇所へ命中せしめたのとでは打擊率に大きな差があるのであります。

聖將東郷元帥が、日露戰爭の凱旋に當り、

『百發百中の砲一門は、百發一中の砲百門に對抗することが出來る』

と云ふ意味の有名な訓示を致しましたのも、恐らく此の邊の消息を指したのであります。

果して然りとするならば、劣勢軍は何程の威力を發揮すれば、即ち攻擊力を増大するなれば、優勢なる敵軍と對等に戰ひ得るかと申しますと、それは次の公式に依つて算出することが出來るのでありまして、此の公式はやはりワシントン條約の比率の、優勢軍十割、劣勢軍六割を基礎として野滿理學博士が算定したものであります。

$$\sqrt{\frac{K_2}{K_1}}\,N_2 = \sqrt{N_1}\quad K_2/K_1 = \sqrt{N_2^2/N_1^2}$$

の公式に從つて、

10吋6の砲等戰所威力 $= \frac{10^2}{6^2} = 2.78$

依つて、六割を以て十割軍と對等に戰ひます爲には、六割軍は十割軍よりも二倍七八だけの威力係數、即ち戰鬪力を必要とするのであります

日本海軍の砲術が如何に優れて居ると致しましても、英米海軍の砲術の二倍七八も高位にあるなどゝ自惚れることは出來ますまい。

日本の陸奥、長門が如何に優秀な戰艦であると自慢致しましても、米國のコロラド、メリーランドや、英國のロドネー、ネルソンに比較して二倍七八もの威力を發揮するものだなどゝ錯覺を起す者もありますまい然も對等に戰ふために冷たい數理は、六割軍に對して是非共二倍七八だけの威力係數を要求して居るのであります。

けれども此の數理の要求も、二倍七八の威力係數も、それは今日迄の日本海軍に對する要求でありまして、今日以後に就いてのものではないのであります。

列强の海軍力が今日に比較して幾倍かの『極度に優勢』となつて參りました時、以上の公式に基づく無情な數理は果して何程の對等戰威力係數を要求して參るでありませうか、想像致しただけでも胸の痛みを覺ゆるのであります。

一〇、醒めよ歐米列强

西暦一九〇五年、米國の排日論者ホーマー・リーが『無智の勇氣』と題する一書を著しまして黄禍を說き、日本人に好戰國民なる刻印を打つて以來既に三十年餘りにもなりますが、その後彼等に依つて鼓吹され、煽動され來つた日本征服論なるものは、厄介至極にも今なほ彼等の後繼者に依つて繼承され、いはゆる極東政策とか太平洋政策とかに名を變へ姿を變じて事毎に東洋の問題を紛糾の裡に陷れて參りましたが、今次支那事變が勃發致しますや、學者として眞理探究の聖業に從事する人達も神の教を說いて、人類に平和と幸福とを齎すべき筈の高僧も、或は又一國の重職に在つて、國際間の問題に關しては一言半句と雖も愼重なるべき立場にある人々までもが日本懲罰論を唱へ、威嚇的態度に出でましたのは何れも皆此の政策の現れに他ならぬのであります。

歐米人の多くは、彼の滿洲事變を指して日本の侵略政策なりとし、又今次事變に於ても、支那侵略政策の具現化せるものとして今尙非難し續けて居ります。

けれども彼等に、果して日本を非難するだけの資格があるものでありませうか。

試みに二・三の質問を致して見ませう。

英米佛等の各國が今日の大をなし、繁榮を來し、世界强國としての基礎を築きましたのはそも如何なる手段、如何なる方法に依つてその領土を擴張したのであるか。

彼等は、自分はしてもよいが、日本だけしてはならぬと云ふ權利を何者より與へられて居るのであるか。

彼等は廣漠たる領土と豐富な資源とに惠まれて居りながら、日本や獨伊、太利等に對しては原料品は勿論、食料品さへも供給することを阻止せんとして居りはしないか。

更に彼等は、歐米經濟ブロックの城壁を繞らし、通商自由の原則を無視して、日本の經濟的進出に重壓を加へつゝありはしないか。

日本が止むなく歐米經濟ブロックの城壁外に於て、自給自足の經濟組織を建設せんとするに對し、之をも脅威せんとする横暴を敢へてして居りはしないか。

日本が只今、意力を傾注して東洋平和の攪亂者將政權に膺懲の軍を進めつゝあるに對し、陰に陽に彼を援助して、こと更に東洋民族の慘禍を大ならしめて居るのは何の爲であるか。

以上の如き明白なる質問に對し、公正にして滿足な解答が出來ません限り、彼等が過去及び現在に成しつゝあることは、何れも不義であり不正であります、從つて日本に對し非難する資格なきは勿論、彼等が好んで口にする平和とか人道とかの題目は、己の非行を粉飾し、自らの野望を遂行せんがための、一顧の價値なき空念佛に過ぎないものであると論斷されても辯解の辭はない筈であります。

由來我が大和民族ほど平和を愛し、人道を尊重し來つた國民は他に多くありますまい、我々日本人は、如何なる場合に際しても、國家の存在が脅される最後の場合でなければ、劍を拔いて起つやうなことはなかつたのであります。

日清戰爭もさうであれば、日露戰爭もさうでありました。然も之は二千六百年以來、日本及び日本人の傳統とするところの大精神でありまして、此の精神は今日に於ても、亦將來に於ても何等變るところはないの

であります。

凡そ世界の平和は、國家互讓の精神と、國際正義の觀念とを基礎として建てられしものでなければ、その實現を望み、永續を期待することは出來ないのであります。

國際正義の觀念とは、多年日本帝國の示し來つた道義であり、國家互讓の精神とは、一切の民族に對して地球上に存在する天然資源を共用せしめ、共樂せしめ、一面世界の市場を開放して自他共に繁榮し共存共榮の途を講ずることであります。

斯かる判り切つた道義と觀念とを省みるところなく、得手勝手や利己主義を捨てずして、彼等が只徒らに世界の平和を唱へましても、何で眞の平和が招來せられるものでありませう。

日獨伊の如く、天然資源に惠まれること薄き國家は、それを他に求めなければ餓死か滅亡かの二途を選ぶの外なき有樣でありますのに、歐米列强は豐富な天然資源に惠まれて居るに拘らず、之を少しも讓らうとせぬばかりでなく、尙かつ進んで世界の資源と市場とを獨占せんとして居るのであります。

彼等は何の特權があつて世界の富を壟斷し、資源の大部を獨占して居るのでありますか。

世界には耕すに土地無く、喰ふに食無きを悲しんで居るものが多くあるに拘らず、彼等は多くの領土と資源とを占有し、それが尙原始のまゝに放置してあり乍ら之を開發せんとする者があれば何等かの言葉を構へて常に排斥をことゝして參りました、殊に甚だしきはアングロサクソン民族の跋扈であります。

彼等は總人口二億餘りにすぎませんのに、その領土は世界面積の三分の一を占めて居るのみならず、その强大な海軍力によつて海洋の大部分を私し、大西洋は勿論、北海、地中海、印度洋の如き、一として彼等の領海に化せられぬところは無いのであります。

然も飽くことを知らぬ彼等は、世界最大の海洋である太平洋をも自家の領海とし、進んでアジア大陸をも自己獨占の市場たらしめんとして居ります。

斯くて、口には平和を唱へつゝその政策とするところ、常に不正不義に興し、利己主義を貫かんとする以上、斯かる得手勝手が彼等の上より絶滅せられない限り、世界には尙第二第三の滿洲事變や支那事變が絶えぬものと覺悟しなければなりません。

一九一九年、佛蘭西巴里市に於て兎も角も平和條約が締結されますや當時大戰の創痍に惱める各國は、世界の平和を約束せしものとして之を歡迎致しました、然も漠々たる戰雲は硝煙未だ消えやらぬ歐洲の空深く垂れ罩めて彼等の失望を大ならしめましたが、次いでロカルノ條約が締結されるに及び、この度こそは戰爭の絶滅を信じ、世界恒久の平和は保證せられしものとして安堵の胸を撫で降したのであります。

されども、ロカルノ條約締結後の世界には果して眞の平和が招來され人類至高の讃歌に滿ちた黎明が訪れて參りましたらうか、國際聯盟規約と言ひ、軍縮條約と云ひ、或は又不戰條約と申し、戰爭の慘禍を怖れ平和を熱望する幾多の條文は積んで机上に山を成す有樣でありますが、然

も世界は依然として不安に、依然として危懼の裡に喘いで居るのであります、先づ眼を擧げて歐羅巴大陸を御覽なさい。

古き敵對觀念を胸底深く秘めつゝも、尙新しき敵對觀念は萠芽して、歐羅巴平原は、憂慮と煩悶と怨恨とに燃ゆる國民に依つて反目逆視の悲と化して居ります。

北海地中海を繞り、或はスペイン、チエッコ問題に關聯する獨伊と英佛ソ聯の對立はどうでありますか、斯かる時に於て英佛ソ聯の三國が眞の平和の慾求するの餘り、强靱なる鐵鎖に依つて結ばれ、相俱に平和のため不斷の努力を盡くして居るものだとは首肯し得ぬところであります獨り歐洲のみではありません。

東洋に於ても昨日納まりし劍戟は、今日早くも砲煙に代り、幾多無辜の民衆を塗炭の苦しみに陷れて居ります。

平和は嘗てアジアの理想でありました、然も今日アジアの何れに理想があり、那邊に平和がありますか。

西より來る英國は、新嘉坡を金城湯池たらしめ、東より來る米國は、布哇をして難攻不落の堅塞とし、北より迫るソビエート聯邦は、鮮滿國境に不要の大軍を集結し、佛蘭西又安南に要塞を築造して共に海軍々備を擴張し、極東の海に陸に、飽くなき魔手を揮はんとして居ります。

此の四大勢力の挾擊下に置かれて居る我が日本帝國は、隣邦支那と提携してアジア永遠の平和を確立せんとし、あらゆる情誼と厚意とを盡くして來たのでありますが、頑迷なる蔣政權は此の見易き道理にも眼を蔽うて遂に重大事態を惹起し、自ら進んで西歐餓狼の餌食たらんとして居ります。

今次皇軍出師の目的は、素より蔣政權を排擊して正しき支那に更生せしめ、相共に大アジア建設の聖業に協力せしむると同時に、世界平和の創造にも貢獻せんとするにありますが、列强が今にして眼覺めず、公正なる帝國政府累次の聲明を無視し、飽く迄も極東の事態に介入せんとするならば、結局は好むと好まざるとに拘らず、戰爭を誘發するに至るであらうことは火を睹るよりも明らかでありまして、我々が常に憂慮し、不斷に警告を發し來りたる由因も此處に存るのであります。

斯かる事態に立至りました時、我々日本人が何れの國を敵手とし、如何なる結末を告げるかと云ふ問題は元より未知の領域に屬し、本書のよく盡くすところではありませんけれども、假に對日本戰爭に於て、勝利の榮冠が列强の上に惠まれ得たと致しましても、戰爭そのものに依つて彼等の上に齎される利益は、彼等が豫期するところのものと大なる逕庭があるものであることを識らねばなりません。

凡そ誰はんとするものは、稍もすれば戰爭の勝敗にのみ拘泥し、戰爭に依つて如何なる結果、如何なる影響を受くるかと云ふ點を省みざる傾向があるやうであります、史上に見られる無謀或は無益な戰爭を敢へて し、國家を滅亡に導きしものゝ原因は、多く此處に由來してゐることを銘記する必要がありませう。

日英戰爭の勃發は、米佛ソ聯の等しく望むところでありませうし、同樣に日米戰爭も、それ〴〵英佛ソ聯の熱望するところでありませう、亦その反面に於て、日本對英米佛ソの戰爭は、多年列强の壓迫と搾取とに

苦しみ來つた幾多弱少民族の最も希望するところでありませう、何となれば、世界列强が戰爭に依つて疲弊し、慘敗すると云ふことは、幾多の被壓迫民族が桎梏を逃れ、羈絆を脫し、國家的に民族的に發展すべき絶好の機會に惠まれる場合が多いからであります、又英佛ソ聯等の各國が聯合して日本に當り、たとへ勝利を得たと致しましても、彼等が世界を自由に處理し、永遠の平和と繁榮とを招來せしむるものと考へることは理由の無いことであります。

元より日本にして戰敗致しましたならば、結果は支那大陸に於ける日本駐屯軍の撤退、滿洲に於ける政策と權益の放棄、場合に依つては朝鮮臺灣、樺太等の割讓と云ふやうな悲痛な犧牲を强要されるかも知れません、けれども、毎年七八十万人づゝも增加して行く日本民族が、今迄より狹小な國土の裡に閉込められ、以前よりも甚だしき物資の缺乏に苦しめられ、その生存をまで脅されるに至りましたならば、日本人の氣性として、退いて餓死するよりも進んで一戰を試み、潔く水漬屍、草むす屍たることを希望するでありませう、さすれば日本對列强の戰爭は、第二第三の對日本戰爭を疊悟してかゝらねばなりません、世界大戰の終幕たる彼の巴里會議に於て、聯合國が獨逸に課せし不合理な壓迫と拘束とが現在如何なる情勢を釀しつゝあるかは、此の間の消息を最も雄辯に物語るよき鑑例でありまして、獨逸に對する聯合國の壓迫と拘束とは歐洲の國際情勢を益〻不安ならしめ、戰爭を絶滅せんがための戰爭は、却つて戰爭を誘發せんとする皮肉な運命と化しつゝあつたのであります。

即ち新興しつゝある國民や新進氣鋭の民族に對し、その活動を封鎖するが如きは好んで戰爭の果因を作るものでなくして何でありませう、故に彼等が戰勝に乘じ、日本の手足を縛り、活動を拘束し、膨脹發展を妨げ、或は獨逸に課せし如き天文學的數字の賠償金を期待するならば、巴里平和會議の違算を再び繰返す結果となるは明らかでありまして、又若し列强が日本の復讐戰に備へんとするならば、各國はそれ〴〵分擔して日本の周圍に大懸りな防備施設をなすと共に、日本に代つて目疊め來りつゝあるアジア民族の指導に當らねばなりません。

然も彼等が、極東に臨むにその常套手段とする侵略政策を以てし、今日の印度に對する如き態度に出でましたならば、彼等の差延べんとする觸手が如何なる呪詛に滿ちた靡に迎へられるものか、それは現實に骨身に應へて居る英國人自身がよく知つて居る筈であります。

更に、アジア大陸より日本が手を引いた後は、支那を繞り、太平洋の覇權に關聯して各國の利害と感情とは事毎に衝突し、交渉は錯雜として紛糾を極め、世界平和は益〻險惡となり、その紛爭が戰爭を醸成し、やがて歐洲動亂への近道を拓く結果となることも容易に想像され得るのであります。

對日本戰爭に於て、彼等が聯合し協調したと致しましても、それは一時の方便であり、利害と國策とを齊しくするが故に他ならぬものでありまして、現に彼等の腹を割き、その胸中に藏するそれ〴〵の眞意を最も率直に吐露せしめましたならば、弱肉强食の野性的心理は悉く彼等の血管に流れ、おのれ先づ世界の王座に君臨せんとし、或は自ら天下に號令せんとして、その傳統的とも稱すべき利己的打算的觀念が如何に深刻に

して、如何に周到に用意せられつゝあるかに一驚を喫するでありませう

殊に兩雄並び立たざる史上の教訓は、英米の利害關係に端を發して猛烈な爭覇戰を演ずるに至るであらうことは、智者の言を俟たずとも明らかであります。

次に日本が勝利を得た場合、世界に如何なる變化が齎されるものでありませうか。

私に極端な言葉を以て想像することを許されますならば、先づ英國は香港、新嘉坡を失ふことに依つて東洋方面より一切の後退を餘儀なくされ、延いては印度、エジプトも亦此の絶好の機會に於て、完全に英國の羈絆より脫せんとするのは確實中の確實であります。

斯くて、英國の寶庫たり生命線たる印度を失ふことに依つて、各植民地と英本國との分裂に拍車をかけ、老大帝國崩壞への一歩を踏出すに至るは明瞭でありまして、英國人たるもの胸に手を置いて、靜かに這般の狀勢を考察する必要がありませう。

一方米國にしても佛國にしても、日本が戰勝致しましたが最後、赤道以北に於て何處に植民地を維持し、何れに市場權益を確保することが出來ませうか。

ソ聯に至つては樺太北半は勿論のこと、事情に依つては日本人自ら手を下さずとも、外蒙からシベリア全體までが如何なる形勢を呈するものか、万更知らぬ筈はありますまい。

斯く觀じ來りますならば、日本對列强との戰爭は、各國共に興亡の岐路に立つものでありまして、たとへ戰勝致しましてもその報酬や繁榮を期待することは至難であり、若しも敗戰の憂目を見たが最後、國家の崩壞をさへも覺悟せねばならないのであります。

故に彼等にして戰爭の慘禍を未然に防止し、眞實に人類の平和と幸福とを希ふ道義的觀念がありますならば、今にして正義に眼覺め、極東の事態を正しく認識し、亞細亞のことは日本に委せ、有害無益な軍備擴張の如きは許す限り之を慎んで、世界平和のため日本に協力致しますことが最も賢明な策であり、己を全うする所以でもあります。

嘗て現狀維持なる言葉は、戰ひに疲れし國民に執つて、天來の福音にも譬へつべき至大な魅力を持つて居りました。

然も平和條約締結後二十年の今日に於ては、平和を呪詛する惡魔の靡とも聞きなされて居るのであります。

青年國家と老大國家、現狀打破と現狀維持とは今日に於て悉く對立し結局は第二の世界大戰を捲起さんとさへして居るではありませんか。

國際關係は化石ではありません、否絶えず變化し能動しつゝ國家と民族の興亡史を綴つて居ります、然も世界の平和と人類の福祉とは、此の有機的變化の上にのみ樹て得るものでありまして、斯かる國際關係に眼を蔽ひ、世界の狀勢を無視し、老大國が青年國に讓るを欲せず、徒らな口實を設けて現狀を維持せんとし、平和の美名に隱れ、飽くなき野望を滿たさんとする以上、紛糾と感情の集積は遂に破裂する時が來ることは何人と雖も否定し得ない現實の問題であります。

殊に日英米の三國は太平洋に於ける三大雄邦であります。

太平洋の平和は、主として此の三大國の和衷協同如何に懸るところが

多いのであります。

然るに今日の太平洋が、やゝもすれば世界戰爭の舞臺たらんとして居りますのは、英米兩國が明らかに日本を犧牲として自國の權力を恣にせんとして居るからであります。

彼等が眞に平和を欲するならば、先づ英米兩國が日本に讓り、無益な軍備擴張を避け、日本と協調致しますのが先決條件であり、平和を保證する所以であります。

日本は西太平洋に、米國は東太平洋に、英國は南太平洋に各分擔して國策を進め、指導者となり、世界各國民の意志を尊重し、之を向上發展せしむることに眞摯な努力を盡くすと共に、排他的觀念を一掃し、進んで通商自由の原則に基づいて關稅障壁の如きも之を除去し、又あらゆる紛爭も事前に防止するやう努めましたならば、第一に國民相互の信賴性を增進せしむることゝなり、從つて不自然なる軍備擴張の如きも自然消滅するに至るのであります。

醒めよ、歐米列强!!!。

世界に平和を確立するか、將又戰爭の慘害を誘導すべきか、之を決定する唯一の鍵は彼等の手中に在るのであります。

太平洋の波をして、その名の如く太平ならしむることが、現狀維持國として最も賢明な政策であることを識るならば、東洋に於て日本に讓るが如きはさしたる犧牲でも苦痛でもない筈であります。

彼等が今に於て瞿然と覺醒せざる限り、彼等の危懼する戰爭と責任とが、何時か必ず彼等の頭上を見舞ふであらうことを、重ねて警告せずには居られません。

一一、今次事變に於ける帝國海軍の活躍

顧みれば蘆溝橋事件突發以來、日を閱すること正に一年半餘、當時我が方の執りし不擴大方針もその効なく、戰火は遂に中南支方面にまで波及し、皇軍の進み擊つところ、海に陸に空に連戰連勝、常に赫々たる戰果を收めつゝ、首都南京を瞬く間に陷れ、既に北中支の大半をば平定して、今や彼等が第二の據點として足掻きを續けし武漢三鎭及び廣東も攻略し、事變は正に第三段階の長期戰に入つたのであります。

悠久に流れて止まぬ黃河、揚子江の二濁流と共に、興亡常なき支那四千年の歷史を回顧致しますならば、史家たらずとも感慨深きを覺ゆるでありませう。

世上には、今次事變に於て陸戰隊の華々しき戰果に耳目を奪はれ、默々として重要任務に從事しつゝある帝國海軍の行動に關し、とかく認識を缺くが如き傾向のあることを耳に致しますのは、海軍將兵に對しても相濟まぬ次第であり、海國日本の將來に就いて考ふるも遺憾に存ずるのであります、依つて茲に一章を綴り、本事變勃發以來、帝國海軍の執り來つた行動を顧みて、忠勇なる海軍將兵が顯揚せし威武を仰ぎ、概略ながらその大要を申し述べることに致します。

今次事變が北支に勃發致しまして以來我が海軍は、帝國政府の公正なる事件不擴大方針に基づきましてよく之に對處し、優勢なる海軍力を以て黃海、或は支那海の廣漠たる海面を制壓すると共に、一部艦隊兵力は內地陸軍部隊の輸送を掩護し、或は吳淞に杭州灣に、南支バイアス灣に海南島に、大兵團の敵前上陸を援け、其の敵前上陸敢行に先立ちては多大の犧牲を拂ひつゝ敵陣を强襲奪取する等、戰史に偉大な記錄を留め、又一方に於て江上艦艇は、漢口上流の居留民に引揚げ命令が發せられまして以來、之が收容に萬全を期し、漢口居留民亦引揚ぐるに決しますや、これ等二千數百名の同胞を、敵飛行機や砲臺などの威嚇を排除しつゝ上海へ下江して完全にその任務を果した上、更に海上部隊は支那國民政府の戰鬪力を減殺して反省を促し、東亞の事態を速に安定せしめんと企圖し、昭和十二年八月二十五日第三艦隊司令長官の名を以て宣言を發し、揚子江以南、福州、厦門、汕頭に至る六百五十浬の支那沿岸一帶に亘つて支那船舶の交通を遮斷することゝなつたのでありますが、後更に區域を擴大し、二千數百浬に亘る全支沿岸に之を及ぼし、儼然として南北支那の海上を制壓するとともに、全支沿岸の哨戒に當ることになつたのであります。

怒濤の飛沫舷側に凍る冬の朝、季節風盛に吹荒れて、波頭に白花を散らす初春の夕、炎熱甲板を燒いて、踏む足さへも爛れんとする夏の日も弦月檣桁に冴えて、流れ藻の香に鎧袖を偲ぶ秋の夜も、見るは浪、聞くは風の音、時に訪れ來る水鳥を唯一の慰藉として、言語に絕する辛苦を嘗め盡くし、困難なる任務に當りました結果、支那船舶の航行は完全に遮斷され、七百隻に餘る支那商船は、自國或は第三國に封鎖され、我克その他の武裝船も亦跡を斷ち、今や支那海上全く支那船舶の影を見ず、蔣政權の經濟的大動脈は此處に切斷せられて、彼等の抗戰力を如何に弱めましたか、計り知れぬものがあるのであります。

殊に外國貿易の激減に依り、戰用材料は勿論、食料品等民衆生活の必需品や工業原料は極度に缺乏し、從つて物價は次第に騰貴すると共に一面輸出の杜絕は、農產、畜產、或は鑛山物等その捌口を失ひましたゝめ、これ等の業に從事する民衆の生活は甚だしく窮乏し、加ふるに海鹽の輸送が停止せられしため、一般民衆の生活を如何に脅威し、如何に困惑せしめて居るか到底想像も及ばぬところでありまして、從つて蔣政權の國庫收入の如きは三分の一以下に激減したとさへ言はれて居るのであります。

斯かる間に在りて、待望の長江制覇は、我が艦艇に依り默々として進展しつゝありました、揚子江方面に活躍せる海軍部隊は、江上幾多の障害を除去しつゝ遡江し、陸軍部隊と密接なる協同作戰を持續し、或は江岸の敵を掃蕩し、或は敵の要衝を偵察强襲し、征討四閱月にして、早くも敵の首都南京を陷れ、進んで轉戰一年餘、武漢攻略戰に於ける艦艇の目覺しき奮戰は、永く青史に特記さるべきものがあるのであります。

一方我が上海特別陸戰隊は昭和十二年八月九日、大山大尉事件突發以來、上海の情勢は益〻險惡化し來り、遂に十三日朝、我が陸戰隊歩哨が支那便衣隊並びに正規兵より攻擊を受くるに至りまして、茲に止むなく應戰するに決し、爾來眞に不眠不休の力戰苦鬪を續けつゝ寡兵よく大敵の猛襲を擊退し、陣地を死守して一歩も退かず、泥と汗との中に我が租界を堅守し以て三万居留民の生命財産を安全ならしめたのでありますが今次事變に於ける敵の攻擊は、過ぐる上海事變當時に比較して一層激烈なるものがあり、敵は我が陸戰隊を包圍して一擧に擊滅せんとし、連日連夜執拗なる攻擊を繰返し來つてその勢ひ誠に侮るべからざるものがありました、多數を恃んだ敵が、我が警備地域を全く包圍するに至りました時などは、敵の砲彈は屢〻租界内に落下し、又敵の一部は租界内に侵入せんと迫り來りましたが、勇敢なる我が陸戰隊將兵は海上部隊の增援を得て、世界人環視の裡に壯烈極まる白兵戰を演じて之を擊退し、我が租界線を確保致しました。

更に陸軍部隊が敵前上陸を敢行するに當りわが陸戰隊は、壯烈な白襷決死隊を以て敵陣地を强襲し、艦船部隊と相呼應して誘導に努め、之が成功の端緒を作つたのであります。

此の時に於ける上海方面に在りし敵の兵力は十七個師約二十万と稱されて居ります。

殊に各國の利害關係複雜せる市街に於て、寡兵よく大敵を壓攘した陸戰隊將兵の辛苦は到底筆舌に盡くし難いものがあり、その戰鬪も亦激烈を極め、彼の日露戰爭に於ける旅順攻圍戰、世界大戰に於けるヴエルダン攻防戰に比較して毫も遜色なく、その間に發揚せられたる武威と美談とは、内外人士の齊しく賞讃感激するところとなつて、皇軍陸戰隊の眞價は世界人の前に堂々發揮せられたのであります。

斯くて上海を蔽うて居た抗日の妖雲は茲に全く霽るゝに至りましたが尙も敵を急追し、南京攻略戰にも赫々たる武勳を樹て、後漢口攻略戰に參與して、江上艦艇並びに陸軍部隊と協力し、困難なる長江作戰に、廣東或は海南島占領に多大なる戰果を收めましたことは、その都度海軍報道部より發表せられて居る通りであります。

次に我が海軍航空隊は、事變勃發當時、滿を持して某地に待機中でありましたが八月十四日、精鋭を誇る敵の空軍は我が艦船、陸戰隊本部、總領事館等を空襲するに至りましたので、茲に敢然と起ち、折柄支那海上に停滯する七二〇粍に達する颱風の中心を突破して杭州、廣德の敵飛行場を强襲し飛行機、格納庫等に徹底的爆擊を加へ、航空戰史上未だ曾て見ざる渡洋爆擊の偉勳を樹て、殊に十五日には再び早くも首都南京及び空軍根據地南昌をも急襲して敵の心膽を寒からしめました。

爾來晝夜を分かたず荒天豪雨を冒し、中南支は勿論支那奥地深く敵空

軍根據地や重要軍事施設を衝き、或は爆擊に或は空中戰鬪に空軍本來の使命を果して餘さず、一面寡軍奮鬪中の陸上軍に協力し、眞に目覺しい活躍を續けて敵空軍の第一線を擊滅し終り、今や全支の制空權は殆ど我が空軍の手に把握せらるゝに至つたのであります。

斯くて海上部隊、陸戰隊、航空隊は、中支に南支に、或は揚子江上に戰史上未曾有の偉大な記錄を樹て、陰に陽に陸軍部隊に協力し、今次聖戰の目的達成のため善戰健鬪しつゝあるのでありますが、その半面には大亞細亞建設の人柱となつた尊き犧牲者のあることを忘れてはなりません。

今や支那四百餘州はその大半を席捲して旭日旗燦然と輝き、皇軍の在るところ五色旗之に和し、更生支那は靑々として建設の歩を速めつゝあります。

斯くの如きは固より　天皇陛下の御稜威の下、我が忠烈勇武な將兵が奮鬪の賜に他ならぬのでありますが、又その蔭には、南北支那の海に野に雄々しくも護國の華と散り、水漬屍、草むす屍となつた幾多忠靈の加護がある事を銘記し、感謝崇敬の念の益々篤きを覺ゆるのであります。

武漢三鎭の攻略は、江南戰線に一段落を劃するものとして、戰略上重大なる意義を有つものでありまして、蔣政權が如何に抗戰これ努め最後の勝利を豪語致しましても、慘敗の現實は掩ふべくもなく、長期抗戰の如きは、彼等が爲にせんとする一種の誇張に過ぎぬものでありますけれども、然も彼等は尙百万近き敗殘兵を奥地深く集結し、いはゆるゲリラ戰術の負け惜しみを標榜してひたすら外力の支援を恃み抗戰を策しつゝあるを想ふならば、戰局の前途は益〻遼遠なりと申すべく、殊に國際間の動行も一日の偸安を許さゞるものがあり、我が海軍の負荷する任務は愈〻重且大なるを切感せられるのであります。

國民各位は、常に默々として困難なる諸般の任務に當り、征して偉大な勳功に輝き、在りて國防の萬全を期し、身命を捧げて聖旨に副ひ奉り國民の期待に悖らざるやう盡瘁しつゝある我が海軍將兵の勞苦を認識せられまして、常に感謝し協力せられんことを希望する次第であります。

一二、砲後の人

嘗て日露戰役凱旋祝賀會が東京水交社に於て開かれました時、當時の駐日英國大使サー・クロード・マグドナルド氏は一場の演說を試みまして、

「日本海々戰に於て日本海軍が、斯くの如き壓倒的勝利を得たのは軍艦や大砲が優秀であつたためばかりではなく、其の主たる原因は一に其の砲を操縱して戰つた砲後の人（The Man behind the Gun）の技能が

優れて居たからだ」

と云ふ意味を述べ、日本海軍將士の功績を稱讃致しました。

それ以來『砲後の人』なる言葉は世界的に一種の流行語となり、新聞雜誌や演說などにもよく使はれ、それが遂には射手といふやうな狹意義なものでなく、戰ひをするには武器よりも人間の力がより大切である、といふことを言ひ表すことばになり、更にわが國では近來『銃後の人』の釋語を用ひて一般に非戰鬪員たる國民全體をさすことになりました。

日本海々戰に參加せる兩國艦隊の噸數比が一〇〇對七八であつたことは既に述べました。

之に據れば日本艦隊は數の優勢を以て衆々と戰ひ、當然つ勝べき立場に在つて易々と勝つたやうに思はれるのでありますが、然し五月廿七日午後二時八分に始まり、同じく午後七時二十八分に終つた兩國主力部隊の交戰に參與せし十吋以上の砲數を調べて見ますと、日本の十七門（第一戰隊戰艦三笠、敷島、富士、朝日の十二吋砲各四門、及び裝甲巡洋艦春日の十吋砲一門）に對し、露國は三十三門（戰艦クニヤージ・スウオーロフ、アレクサンドル三世、ボロヂノ、アリヨール、シソイウエリーキー、ナワリンの十二吋砲各四門、ニコライ一世の二門、オスラービヤの十吋砲四門、裝甲巡洋艦アドミラル・アブラクシンの十吋砲三門）でありまして、海戰の勝敗を左右する主砲の數は、露國の一〇に對し、日本は五の劣勢にありました、即ち噸數では日本艦隊が優勢でありましたが、勝敗を決した大口徑砲に於ては露國艦隊が遙かに優勢であつたのであります。

言葉を換へて申しますと、日本艦隊は半分の砲力を以て倍の砲力を有つ露國艦隊に當り、之を全滅せしめたのであります。

さう致しますと、先に述べました『N自乘の公式』や『數の優勢なる艦隊は常に勝利を得るものだ』と云ふ結論と甚だしい矛盾を來すやうに考へられるのでありますが、之は決してさうではありません、即ち此處に威力系數Kが働き、戰術の妙味があるのでありまして、「百發百中の砲一門は百發一中の砲百門に對抗出來る」と云ふ、東郷元帥の名言が箋をなす所以であります。

バルチック艦隊生殘乘員の手に成る對馬海戰記を通讀して見ますと、露國艦隊各艦の砲火は、日本艦隊各艦の砲火に比べて著しく劣り、又戰術的にも、指揮上にも、或は一般將兵の技能精神に於ても甚だしい缺陷があつたやうでありまして、その結果三十八隻よりなる遠征艦隊の全部を擧げて撃滅（戰術的意味に）され、四人の司令官中二人迄捕虜（ロジエストウインスキー中將及びネボカトフ少將、フイリケルザム少將は海戰直前オスラビヤにて病歿）となつたのであります。

即ち日本艦隊が此の一戰に於て未曾有の戰果を收め得ましたのは、機力に於て劣るところを訓練に依つて補ひ、技倆に依つて補ひ、戰術に依つて補ひ、進んで「追撃せよ、更に追撃せよ」と云ふ日本海軍傳統の攻撃的精神を遺憾なく發揮した結果でありまして、砲數の劣勢を技能と精神を以て補つて砲の優勢な敵を全滅せしめ、延いては戰局の大勢を勝利に導くに至つたのであります。

露國の生んだ戰術の大家マカロフ提督は、その著海軍戰術論に於て、

海軍戰士の精神的要素が戰鬪上如何に重大であるかを特に高唱して居るのは著名な事實であります。

彼自身は不幸旅順港外の藻屑となつて消えましたが、當年彼が憂慮し大聲叱呼致しました如く、露國艦隊の敗因は明らかに露國艦隊の主となるべき將兵の精神的要素が、日本艦隊の主となつた戰士の精神に劣つて居たに據るは事實であります。

旺盛な攻撃的精神、即ち士氣の旺盛なることが、戰局に如何なる影響を及ぼすものであるかと云ふことは、今次事變に於ける皇軍將士の赫々たる戰績に依つて視るも識ることが出來るでありませう。

歐洲大戰當時、世界の各地に孤立して無援の窮地に在つた微弱な獨逸艦隊によつて、彼等の海戰史を彩つた悲壯な物語は、今もなほ獨逸國民の誇として敬慕されて居ります。

ミュラー艦長の指揮する僅かに三千六百噸の巡洋艦エムデンは、青島を脱出してより南洋から印度洋の間を暴れ廻り、聯合國の交通路を脅かして、僅かの間に英國船だけでも七万一千噸を撃沈し、一万八千噸を拿捕致しました。

又渺乎たる假裝巡洋艦メーエは、嚴重なる敵の監視を破つて遠く印度洋方面に乘出して參り、多數の聯合國商船を撃沈し、我が常陸丸の如きもその砲火の犠牲となりました。

更に帆船ゼアドラーを艤裝して、大西洋より太平洋を荒し廻り、聯合國の大小船舶十四隻を捕獲撃沈したルツクネル艦長以下の冒險物語は、如何に少年の血を沸立たせたことでありませう。

私は再びジヤツトランドの海戰を想起致します、英國大艦隊司令長官ゼリコー大將にして、艦隊保全主義を捨て、日本海々戰に於ける東郷司令長官の如く、或は彼等の先輩であるネルソン提督の如く『英國は各兵が國家の爲に本務を果さんことを學む』の意氣を以て戰つて居りましたならば、或は第二のネルソンとして、その雄名を謳はれて居たであらうことは私の信じて疑はぬところであります。

又獨逸艦隊司令長官ヒツペル提督に致しましても、エムデンの如く、ゼアドラーの如く、更にアドミラル・フオン・シューベイ艦隊の如く、全滅を賭して死戰して居りましたならば、斯くてもなほ日フオークランド沖の如き悲壯な結果に終るべしとは、何人も速斷し得ないのであります。

御承知かも知れませんがジヤツトランドの戰場は、北緯五十六度より五十八度（樺太北端オホツク海附近の緯度に相當す）の間にありまして夏期の日沒時は午後十時以後でありますが、ゼリコー大將が獨逸艦隊の追撃を中止致しましたのは、早やくも午後七時過ぎとのことであります、から、日沒迄には尚三時間の貴重な時があつたのであります、故に此の時間を利用し、優勢な艦艇を擧げて追撃戰を敢行致して居りましたならば、必ずやグランドフリートの功績を絶讃するの餘り、幾多のロバート・ルイス・スチブンソンの如き文人に依つて『我等の提督達』以上に感激的口調や、愛軍の念を單めた美しい詩が發表されて居たことでありませう。

何れに致しましても、ジヤツトランド海戰の勝敗に就いては兩國共に

種々な主張や理窟はあるやうでありますが、如何に强辯致しましても英獨双方の艦隊に、攻撃的精神が頗る稀薄であつたと云ふ非難を免れることは出來ないのであります。

現代は機械文化の萬能時代であります。

機械文化の發達は遂に人力の價値をも低下せしめ、戰爭の勝敗を決するにも機力に賴らんとする傾向があるやうであります。

殊に歐米文明國人の中には、現代の戰爭は只機械の戰爭だ、機力さへ充實して居れば人間などはどうでもよい、と云はぬばかりのことを申すものもありますが、私はさうだとは考へられません。

現代の戰爭と雖も、科學的數理や機械的威力の上にのみ樹てられるものではなく、科學を活用し機械を操縱するものがやはり人間である以上戰爭の勝敗を決するものは大砲や發射管ではなく、それを操縱して人間の撃つた彈丸であり水雷であります。

機械が主となつて戰爭が出來るものならば、對馬海戰の如き不合理な現象が起る譯がありません。

機械ばかりが如何に結構でありましても、それを操縱する人間がお粗末であり又その技能精神が劣弱でありますと、つい支那の飛行隊のやうなものが出來上ります。

私はこれまで項を重ね、軍備の忽にならぬ所以を述べましたが、その軍備と云ふ言葉の中には當然機械力も人的要素も含まれて居りますのでたゞ機力さへ充實されゝば能事終れりとなすものではありません、それどころか機力以上に必要なものは人的要素であります。

後藤又兵衛の槍、宮本武藏の劍も一挺の機關銃に敵することは出來ませんけれども、射込まれし眉間の矢を拔きもせず敵を射殺した鎌倉權五郎の如き、帆柱を倒して敵船に乘り入つた河野道有の如き、壯烈な武勇と精神とは今日に於ても益〻必要でこそあれ、決して不用とはならないのであります。

再び繰返して申します、機械の充實は何事を措いても成さねばならぬ要件でありますが、それにのみ心を奪はれて機力の主となるべき『人』を忘れて居りますとそれこそ大變なことになりませう、機械が如何に發達し充實致して居りましても、その機械を操縱する人が出來損ねて居たり、不足して居たりしますと、折角の機力も猛威を揮ふ餘地がありません。

若し機械の主となるべき戰士にして、技能精神の兩面に於て缺くるところなく、又常に充實して居りましたならば、機力そのものに多少の缺陷がありましても之を補ふことが出來るのであります。

只今我が海軍當局が、非常時局下の青少年に呼びかけ、廣く人材を求めて居りますのも右の趣意に他ならぬのであります。

我が海軍には、早くより掌電信兵、掌信號兵などの可愛い少年志願兵員がありまして、その大人にも劣らぬ活躍ぶりは常に絶讃の的となつて居りました。

之に鑑みた當局は、航空兵科にも少年兵員を採用し、茲に海の若鷲は勇然として大空に巣立つたのであります。

當時私は、年齡やうやく二十に滿たぬ少年航空兵が百練千磨の大人に

伍し、空中戰に爆撃に或は偵察に、よく所期の任務を果し得られるかどうかに就いて少からず懐疑の念を抱いて居たのであります、然も軍當局の達見は誤たず、今事變勃發以來、豪膽沈着、卓越せる技能と旺盛なる攻撃的精神とは、彼等に依つて遺憾なく發揮せられ、航空戰史上幾多の輝かしい偉勳と記錄とを樹て、以て世界識者の心膽を寒からしめて居りますのは、邦家のため洵に慶祝すべきことゝ思ふのであります。

今でもさうでありますが、私達の少年時代には一郡一村より海軍將校を出したと云ふ事は、一郡一村の名譽として祝福され、一家一門より海軍軍人を出すことは、一家一門が無上の光榮として誇りもし、羨望されたのであります。

從つて志願者の數も常に所要人員に幾倍し、中には悲壯な上申書を提出して試驗官を感激せしめ、その採否を決するに苦心せしめた者も少くなかつたといふことでありました。

從つて我が海軍には日本人中の優秀者が集つて居ると云ふことが出來るのでありまして、良き種子から立派な芽が出るものであるやうに、今や我が海軍の人的要素が、世界何國の海軍にも劣らぬ立派なものとなりましたのはむしろ當然のことかも知れません。

彼のワシントン、ロンドン兩條約締結當時、私共が秘かに憂慮致しましたのは、三・五・五の比率より來る機力上の缺陷よりも、それが因を成して國民の志向が海軍の上より薄らぎはしないかと云ふ點にありましたが、それは物質上に國防の缺陷を來すばかりでなく、更に國民の精神上にも缺陷を招くと云ふことは容易ならぬ問題だと考へたからであります

幸ひにしてそれは杞憂に終り、今次事變に於て帝國海軍益〻健在なりとの確證が得られましたのは、御同慶に堪へぬ次第であります。

現在の國際動向を以て將來の國際情勢を豫想致しますならば、帝國海軍の使命と責務とは益〻重且大なるものがあり、一面將來の日本海軍を背負ふべき名譽と責任を有つ青少年諸君も、亦一段の覺悟を成すべき秋であることを痛感せられるのであります。

我が青少年諸君が、日本及び日本人に課せられた使命と任務とを深く認識し、過去の歷史を飾つた『砲後の人』にも劣らぬ砲後の人たるべきを志し、機力の不足は人的要素を以て補ひ、物質的威力を以て壓迫し來る敵に對しては、我が傳統的精神に依つて擊退し、之に先考の指導と國民一體の協力とがありましたならば、如何なる外敵も乃至は軍擴も斷じて怖るゝ必要はないのであります。

我が敬愛する青少年諸君!!!

今ぞ起つて榮光に輝く軍艦旗の下に馳せ參じ、諸君自らの手で新しい世界史を書かれんことを切望して止みません。

一三、來れ　海軍協會へ

砲後の人なる言葉の由來と、その意義が銃後の國民を指すものであることは既に前章に述べました。

然らば名實共にThe Man behind the Gun たるの資格と、海國民らしい素質とを備へますには、是非共相應の指導力と統制ある團體に入りその團體の力に依つて海國民たるの素質と智能とを涵養する必要があると思ふのであります。

帝國海軍には、海軍省海軍々事普及部なるものがありまして、常に海軍々事に關する普及と、一般海事思想の涵養に務めて居りますが、然し軍民を打つて一丸とし、強力なる我が國唯一の海軍後援團體としては、海軍協會を措いて他に無いのであります。

海軍協會は大正七年十月、德川頼倫侯を會長として創立されましてから既に二十年餘にもなりますが、その間の時の流れには、ワシントン、ロンドン兩海軍々備縮少條約や、滿洲上海兩事變など種々の波瀾がありまして、帝國海軍亦多端を極めて居りましたが、斯かる時機に際して我が海軍協會が、陰に陽に帝國海軍へ協力と貢献とを致しました事蹟は、海國興隆史の幾頁かを飾るに足るものがあると思ふのであります。

今や我が海軍協會は、時代の進展と共に益〻發展の途上に在りまして その支部は全國府縣のみならず遠く海外に迄設置せられ、會員の數亦二十餘万に達し、會勢日に隆盛に赴きつゝありますのは、邦家のため洵に慶賀に堪へない次第であります。

然し協會今日の大を成し、聲望今日の如くあらしめました跡を尋ねて見ますとき、そこに尊敬すべき幾多の先輩と現職員の方々が、人知れず綴つた苦心と努力と不撓不屈の精神とが秘められてゐることを發見し、深く感銘せずには居られないのであります。

海軍協會兵庫縣支部が設置せられました當時の如き、その會員は僅かに四十餘名に過ぎず、殊に歐洲大戰後の不況に會し、海軍々備縮少熱の昂揚に禍され、當事者が自己の費を割き、時日を費して意を傾け力を注ぎ、海國民として海軍への協力と智育の涵養にこれ努めたのでありましたけれども、多くは一般の耳を傾けるに至らず、幾度か慷慨の嘆を唱たしめたのでありました。

今日に視る兵庫縣支部は、會員の數實に一万餘に及び、さきには婦人部會員に依つて報國第一五二號（海軍協會兵庫號）軍用飛行機が献納せられ、然も該機が第一線に立つて南支の空を翔破し、輝かしい武勳を樹てましたことは世人の齊しく感銘してゐるところでありますが、更に又一面行事に見學に講演に指導に奬勵に、或は今次事變出征將兵の慰問に救恤に、ひたすら軍民協力と海軍後線部隊としての任務に盡くしてゐる

現狀を想ひますならば、轉た懷舊の念深きものがあるのであります。

申す迄も無く、只今世界の文明國と稱されて居る國家に於ては、國力に應じ國情に隨ひ、國防のために自國産業貿易保護のために、相應の海軍々備を進め、又その海軍は國交と國策とのため常に重要な任務と使命とを果しつゝあるのでありまして、商船旗は軍艦旗に隨伴するばかりでなく、一國の强弱や文化發達の程度は、その國の海軍力及び海軍團體の發達に正比例して視ることが出來るとさへ言はれて居るのであります。

まして海國日本に於ける唯一の海軍後援團體たる海軍協會の盛衰消長は、獨り帝國海軍の振興に關與するばかりでなく、實に帝國進運の消長にも與つて力あるものと信ぜられるのであります。

殊に來らんとする危局に對處し、之を克服せんが爲には、是非共本會の如き團體を層一層强固ならしめ、その團體力に依つて海軍々備の認識を深め、後進を誘導し啓發し、以て軍民一如となつて銃後の護りを完璧ならしめねばならぬと思ふのであります。

今や協會の樹勢日に旺なりと申しましても、その會員數二十餘万を同胞七千万に比例して視るならば、必ずしも多數なりと申すことは出來ないのであります。

時局は益〻、强大な海軍力と、强固な國民の支援とを翹望せられてゐる秋、此の非常危局打開のために、國運の進展を助成するために、國民擧つて海軍協會々員となり、全き銃後の務めに就かれんことを熱望して止まぬ次第であります。

一四、語を寄す　同胞諸賢

結論に入るに先立つて、私の常に敬愛して居る同胞各位に對し、豫て抱いて居る希望と卑見の一端とを率直に披瀝し、以て各位の一顧を煩はし度いと思ひます。

言たまたま非禮に亘ることがありましても、特に御寛容を願はねばなりません。

私がこれ迄、數年後に於ける日本海軍の上に餘り悲觀的字句を連ねましたに對し、賢明な讀者の中には、

『お前の言ふことは全然なつてゐないではないか、日本の海軍はお前の云ふやうなそんな貧弱極る賴りないものではない、列强の軍擴に對しても、將來の國際狀勢に應ずる爲にも、萬全の對策を講じ相當の準備もしてゐる筈だ、それをまるで無爲無能でも在るかのやうに騷ぎ立てるのは、日本海軍乃至は海軍當局を侮辱するも甚だしい』

と云ふ批難をなす方があるかも知れません、私はその批難なり叱聲なりが、眞實に日本海軍とその將士に對する理解と認識との上に立つて成さ

れるものでありますならば、異論なく頭を下げるに吝なものではありません、けれどもさうでなくして、單に日本海軍のことだ、放つて置いてもそれ位のことはやるだらうではないか、と云つたやうな漫然とした根據なき理論の上になされるものであるならば、絶對に之を承服することは出來ないのであります。

元より帝國海軍當局が、列强の軍擁なりその目的なりを識らぬ譯もなく、終始傍觀し、手を拱いて來るべき危局に臨まんとするものでないことは、私と雖も信じて疑はぬところであります。

然しながら海軍當局が、如何に對策を講じ、如何に善處せんと致しましても、海軍々事に對する國民の志向と關心とが弛緩して、何等の支援も協力もないと云ふことでありますと、其處に種々の蹉跌を生じ、軍備の缺陷以上の缺陷として、亦由々しき問題として軍當局を悩ますことでありませう。

島國日本、海國日本の隆々たる國礎が海に依つて築かれ、亦將來の繁榮も海に俟つもの多きに拘らず、今迄國民の多くは餘り海に冷淡であり餘りに無頓着であり、そして餘りに海を識らなさ過ぎたやうであります殊に海軍々事に關する知識程度に至つては、之が海國民かと疑はれる程貧弱を極めたものがありました。

海に依つて榮ゆべき運命を有つ日本人が果してそれでよいものでありませうか。

諸君は私の此の申分に對して、或は卓を打つて憤慨されるかも知れません、然るとせば卓を打つ前に一應次の試問に答へて戴きませう。

帝國海軍の代表的軍艦が陸奥、長門であることはさすがに御存じでありませう。

然し陸奥長門に續いて主力をなす他の七隻の戰艦、並に十二隻の甲級巡洋艦の艦名を御存じでありますか、更に乙級巡洋艦二十一隻中の半數或は驅逐艦百五隻中その三分の一、それに航空、潛水各母艦の艦名を擧げることが出來ますか、たとへ間遽ひながらでも之に答へ得る勇氣と自信があるならばそれは尊敬すべき識者であると申してよろしい、けれどもそれだけでは未だ未だ初等生の域を脱するものではありません、進んで海軍々事の一般概要を究め、海軍將士の官等、階級、職制の識別から、各艦艇の任務、性能は元より帝國海軍の沿革、現勢、使命等に通曉するものでなければ眞の海軍識者たるの資格はなく、從つて私の此の望蜀言に對して不快の念を抱く理由は毫も無い筈であります、啻にそれのみではありません。

光榮ある我が軍艦旗に保護され、安居樂業して居る一般の國民が、その軍艦旗に對する觀念の餘りに輕薄に、餘りに冒瀆的なるはどうしたことでありませう。

實例を擧げて申します。

先年我が練習艦隊淺間、八雲の兩艦が神戸港を訪れ、戰歷に輝く艦容を岸壁に繫留した時のことであります。

多くの人々は拜觀を許されて乘員の案内を受け、説明を聞き、對馬海戰の往時を偲んで感謝感激の想ひを新にし、岸壁には日暮に至るも尚艦を仰いで徘徊するものが多くありました、やがて艦内に軍艦旗降し方

總衛兵禮式整列」の號音が響き、後艦橋には艦長及び當直將校、後甲板には各將校が威儀を正し、衛兵司令の指揮する一隊の衛兵が儀容堂々軍艦旗に面して整列致しますや間もなく、日沒時を合圖に君が代の喇叭は嘹々として港都の夕をゆるがし、衛兵の捧銃、艦長以下在甲板員擧手注目の敬禮の裡に、艦尾旗竿の旭日旗は、皇國の平安を表象するもの如く靜かに降下されて參りました。

その壯嚴さと雄大の氣に接しては、思はず感激の涙さへ禁じ得なかつたのであります。

岸壁に在る同胞も恐らくは同じ感激にひたり、最敬禮を捧げて居るものとばかり信じて居りましたが、殘念ながら百に餘る同胞は、或は私語を交し、或は口笛を吹き、やうやく脱帽し形を正して居りましたものは僅かに八名に過ぎませんでした、殊に驚くべきことは、二十名近くの中等校らしき學生達でありまして、その中には一名の脱帽者、一名の敬禮者さへも發見することが出來ませんでした。

軍艦旗掲揚又は降下の禮式なるものは、單に名譽の軍艦旗を掲降するに止るものではありません。

掲揚されて居る軍艦旗は　大元帥陛下の海軍艦船たることを表現し、嚴にわが國主權の存在を確立してゐるものでありまして、その掲揚降下に當つては、國歌君が代を吹奏して最も厳肅に行はれる艦内重要の禮式であります。

されば海軍々人は、軍艦旗を以て常に　陛下の御影であると觀念し、軍艦旗掲揚降下に際しては艦内に在るものは姿勢を正し、艦上にあるものは軍艦旗の在る方に面して擧手の敬禮を行ふものでありまして、この感激的光景を拜しますならば、一般國民の常識としても姿勢を正し敬禮をなすべきであり、茲に尊王愛國觀念の流露せられる所以でなければなりをません、それを何ぞ　天皇に準ずる禮式を咫尺の間に拜し、亦職歷燦と輝く淺間八雲の艦側にありながら、脱帽さへもなし得なかつた人達の心事は、無智なのか大膽であるのか、驚くよりもむしろ呆れざるを得なかつたのであります。

嘗て私は、東京商船學校練習船大成丸に乘組み、ロシヤ帝政末期の浦汐斯德港を訪れたことがありました。

或夕、何かの用事で後部甲板にありました私は『氣を付け』の號令を聞き、次いで君が代の喇叭が吹奏され、船長以下在甲板者最敬禮の裡に天皇に準ずる禮式は嚴かに行はれ、國旗（軍艦旗に非ず）は靜かに降下されて參りました。

此の日は何の故にか參觀者が常より多く、日沒に至るも歸路の通船を待つ露人が甲板に殘つて居りました。

此の時私の腦裡を掠めたものは、二十年以前仇怨關係にあつた露人等が彼等に對する戰勝を一轉期として世界の列强間に伍し、國運日に隆々たる帝國を如何なる感懷と如何なる心情とを以て見て居るかと云ふ一事でありました、然もそれを觀察し、判知する絶好の機會は、今彼等の眼前に於て壯重に行はれつゝある　天皇に準ずる禮式に對する彼等の態度如何であると考へたのであります、しかも禮式が終る瞬間私の眼に映じたものは、中部甲板に在つた七八十名にも及ぶ露人の一團が、大人も

子供も婦人も老人も、皆一様に船尾に向つて直立不動の姿勢を執り、或者は脱帽し、或者は擧手し、又或者は注目して我が國旗に對し、敬禮を捧げて居る一幅の感激的光景でありました。

たとへ參觀した船に對する義理合や、外交儀禮的意味が多分に含まれて居たと致しましても、その態度は見上げたものと申すべきであります聞くところに依りますと、世界大戰當時地中海方面へ派遣せられた我が驅逐艦が、異國の港に機關を休め、岸壁に繫留せられた際の如き、歐洲人が我が軍艦旗に對する敬虔な態度は、乘組將士並びに在留同胞をいたく感激せしむるものがあつたといふことでありまして、我が國旗及び軍艦旗の有つ威力と有難味とは、異域に旅し、異郷に在留する同胞のみが特に心魂に徹して感銘するところなのかも知れません。

兩親の慈愛嚢かに育つたものは、親無き兒の寂しさは分かりません、燈臺近くを航海する船員は燈臺無き隙地近くを航海する船員の辛苦を知りません、それ等は何れも親の慈愛や、燈臺の慈光に惠まれ過ぎて居るからでありませうが、それだからと云つて親を輕んじ、燈臺を無視することは許さるべくもないのであります、春秋の筆法に從へば、國民一般が軍艦旗に對する尊崇の念を缺き、冷淡なる態度を以て一顧の敬禮さへも敢へてせぬと云ふことは、遂には外人の侮蔑を招き、日本人傳統の忠君愛國の精神をも云々せられるに至るのでありまして、此の點切に國民各位の反省一顧を煩はし度いと思ふのであります。

海軍に對する斯くの如き態度は、當然我が商船及び船員にも影響するところ多く、板子一枚下は地獄の生活だとか、行先わが家で果知らずだとか、海の勇者を蔑視せる意味の言葉が、國民の口より茶飯事のやうに聞かされるに反し、海の開拓者とし、平和の戰士としての船員を讃美し之を激勵する言葉を餘り聞くことが出來ませんのはその現れでありまして、斯くの如きは獨り船員や海事關係者のみの遺憾ではなく、國策と云ふ大乘的見地よりするも遺憾に堪へぬ次第であります。

斯かる時代錯誤も甚だしい觀念より未だに眼覺められぬ人々は、無理にも先づ來つて今日の商船と船員の生活を御覽になるがよろしい。

船舶の航海運用保全に關するすべての施設は、我が遞信省の規定するところでありまして、其處に板子一枚下は地獄などの有り得る道理がありません、殊に船員の生活は、陸上の俸給者又は恒産者の遠く及ばぬところでありまして、若しそれ一等船客の生活は王侯の生活にも勝ると言はれて居る遠洋航路船の乘員生活程度に至つては、陸上生活者の夢想することさへ出來ぬ立派なものがあるのであります。

之を要するに板子一枚下は地獄云々の如き笑ふべき言葉は『三十五反の帆を捲き上げて行くよ仙臺石卷』や『沖でかつをの瀬の立つ時は四寸厚味の櫓が撓る』と云つたやうな民謠が歌はれた時代の遺物が、今尚海に沒交渉な人々の心理に働いてゐるものでありませうが、然もそれらの民謠にしてからが、海國男兒の豪放壯快な眞面目を寫して居りこそすれ海を怖れ、船乘を蔑視して歌つたものではないのでありまして、板子一枚下は地獄と云ふが如き時代錯誤の觀念は、一日も速かに國民の心奥より一掃してしまはねばならぬのであります。

尤も海國日本にも搖籃時代はありました。

武士上りの機關兵が、邪魔になる兩刀を石炭の山へグサッと突き差して置いて、さて

『各々方、五平太（石炭）をくべて湯氣（蒸氣）をこしらへろとの申附でござる』

『左樣でござるか、然らば先づ御貴殿から!!!』

『どう仕つて、いざ先づ御貴殿から!!!』

『いや御貴殿から、いざいざいざ……』

と云ふやうな合詞があつて汽罐へ石炭を焚き、

『頭取（艦長）殿、かまに湯氣が上つたやうでござる』

『左樣か、然らばカラクリ（機關）を廻すことに致さう……、金の心棒をヘリヤコリヤ（反對卽ち後退）に廻せエ……』

と號令した時代もあつた？とのことであります。

又軍艦では夜間航海中、左右兩舷艦首に前面見張の當番が立ち、三十分毎にそれぞれ舷燈の異狀なきかどうかを確め、之を艦橋の當直將校へ報告することになつて居りました、その後用語も『左舷よろし』『右舷よろし』と一定されましたが、往年は未だ各人各自がお國訛り丸出しのまゝでやつて居り、其處に種々の奇談珍話を釀し出して居ります。

或艦で、左舷の見張當番に大阪出身の水兵が立ち、右舷へは鹿兒島出身者が立ちました、時間が來て

『左舷ようおまつせエ……』

と報告した途端、

『右舷よかッ……』

と怒鳴つたなどのクラシカルな匂さへする話題が、今でも初夜當直に立つ若い海軍將士をほゝ笑ませて居ります。

斯かるローマンスは、商船も亦軍艦に劣るものではありません。

或汽船へ始めて日本人の船長及び機關長が乘組み、意氣揚々として航海中、石炭を餘り焚き過ぎたため突然汽罐の安全瓣（汽罐の破裂を防ぐため蒸氣を逃す仕掛け）から猛烈な勢ひで蒸氣が吹出しました、驚いた船長以下の船員は、てつきり汽罐が破裂するものと早合點し、ボートを降して逃出しました、そして遠く海上から船を眺めて居りましたが、時間が經つと共に蒸氣の壓力も規定封度に下つて噴出も止み、船もどうやら無難らしいのを見て怖る怖る歸つて參りました、つまり船長は元より當の機關長さへ汽罐に安全瓣のくつ付いて居ることを忘れて居たなど、今考へてみれば嘘のやうな事實が面白く語り傳へられて居ります。

斯かるローマンスに依つて見るも、御維新以來、海國日本の今日の地位と實力とを築き上げる迄には、尊敬すべき我等の父祖先輩が、如何に苦心し如何に努力を致しましたか、その片鱗を窺ふことが出來るのでありますが、省みて我等の父祖が殘した功績に想ひ至るとき、その後繼者であり、海國の重責に任ずる海軍軍人並びに商船船員に對しては、國民たるもの心からなる尊敬と信賴の情とを以て應へることこそ、日本人當然の義務であり努めでなければなりません。

今や我が海運界は、今事變を轉機として一大飛躍を遂げつゝありますとき、海の勇者船員の充實も亦要望せられて居ります。

再び語を寄す青少年諸君！諸君の華やかな登龍門は、こゝ海員として

も開かれて居るのであります。
諸君が一人でも多く海上生活に入ると云ふことは、それだけ日本の國力が増進せられるのであります。
若し諸君の若い胸に、海洋精氣の何ものかを解する雄々しさがありましたならば、今こそ起つて海の寵兒となるべきでありませう。
海は招く

來れ海の子
われ汝を抱擁せん
海にこそ汝の幸福あれば

とは海を愛し、雄々しき船員の生活に憧れる一文人の歌つた詩の一節でありますが、それは若き諸君を讃美した麗しき歌であると共に、亦海國青年に熱りてはこよなき贈物でもありませう。

一五、結論

いよいよ筆を擱くに當りまして、今まで申し述べたところを概括して再び申し述べ、以て本書の命題に對する結論とすることに致します。

顧みれば今から四五年前『一九三五、六年の危機』なるものが旺に唱へられ、我が朝野を擧げて緊張せしめたのでありますが、その原因は何であつたかと申しますと、昭和六年に滿洲事變が起り、次いで上海事變となり、昭和八年即ち一九三三年には、國際聯盟會議に於ける十三對一の採決となりまして、遂に我が國は國際聯盟を脱退するに至り、その離脱が現實となつて參りましたのは二ヶ年の猶豫期間を經た一九三五年でありました。

然し乍ら國際聯盟脱退に關聯して最も憂慮されてゐたものは、我が南洋委任統治諸島の問題でありまして、舊獨逸領南洋群島の所有權が國際聯盟に在りとする一派の者の解釋に從へば、我が國が聯盟を脱退した後に於て、聯盟より統治權返還を要求して來ることは極めてあり得べく豫想され、又事實に於て聯盟の一部には斯く主張する者があつたのであります。

我が南洋諸島は、經濟的或は産業的方面から見るならば、特筆する程のものでないかも知れませんが、之を國防上より見るならば誠に重大なる意義を有するものでありまして、一旦緩急ある場合、之が我が手中に在るのと敵の手に握られて居るのとでは、戰略的に日又作戰上に影響するところ容易ならぬものがあるのであります。

故に國際聯盟が如何に返還を強要して參りますとも　所有權は聯盟に非ず』と云ふ歴然たる事實と正しき見解に依り、たとへ一戰を賭するとも斯くの如き要求に應諾すべき理由も意向も無いのであります。

從つて此の問題が紛糾して來るならば、結局は國際聯盟各國との間に

戰端を開くに至る危險性が多分に在つたのでありまして、之が一九三五—六年の危機を成す實體でもあり、日又一方に於てはソ聯の第二次五ヶ年計畫完成や、海軍々備縮少問題などの副體が錯雜として絡まり、戰爭は既に紙一重近くに來て居たかの觀があつたのであります、然し幸ひにして此の危機は帝國の對處宜しきを得て單なる杞憂に終り、何事もなく解消したのでありますが、支那事變が勃發すると共に、數年を隔てゝ又も第二の危機を叫ばねばならぬと云ふことは何と云ふ不安な世界でありませう。

第一の危機は、その原因を爲す問題が明確に分かつて居りました、故に最惡の場合に於てもその問題が解決されるならば、此の危機は自ら解消すべき性質のものでありました、けれども第二の一九四二—三年の危機たるや、その因つて來るところは軍縮條約の廢棄と支那事變の刺戟とに依り、澎湃として捲起された列强海軍軍備の大擴張にあることまでは分かつて居りますが、それから先の結果が如何なる形となつて現れ來るか、或は如何にすれば解消し得るのか、又此の危機が何時まで續くものか等は全然わからないのであります。

たゞ此の危機が永く續けば續く程危險性も増大されるものだと云ふことだけは、種々の狀勢を綜合して豫想し得られるのであります。

今日の歐米列强が海軍軍備の擴張に寧日なく、恰も獲物を追ふ獵人の如く、海軍再建に狂奔して居りますのは決して平和を目指し、人道を守るが爲ではなく、一に戰爭を用意して居るのであります、彼等が用意しつゝある戰爭とは、退いて守るための戰爭でなくして、進んで攻める爲の戰爭を意味して居るものであります、然もその目指すところが主として東洋、特に日本海軍にあることを想ふ時、私は今更の如く我等の海軍を顧み、世界の狀勢と列强海軍の實相に眼を注いで深き感懷を催さずに居られません。

ワシントン軍縮條約以來、日、英、米三國海軍の主力艦は、三・五・五の比率のまゝ今日に至りました、然るに只今英米兩國が建造して居る新主力艦全部が完成されましたならば、日本は華府會議當時でさへ『國防の安全を保證することが出來ない』と言はれた三・五・五の比率を維持する爲だけでも對英六隻、對米四隻强の新主力艦を建造せねばならないのでありまして、若しそれ英米海軍が共同した場合、その聯合力に對する六割の比率を保たんとするには、實に十九隻の主力艦を建造する必要があるのであります。

言葉を換へて申しますと、日本海軍が現狀のまゝで一九四二—三年を迎へますならば、主力艦だけでも對英三割六分（九隻對二十五隻）對米には四割一分（九隻對二十二隻）の劣勢に陷るのでありまして、又英米聯合力に對しては一割九分强（九隻對四十七隻）と云ふ甚だしい劣勢となつてしまふのであります。

今日の如き極東の狀勢を以て二三年の歳月が經過し、日本海軍の勢力が右の如き劣勢に陷りました時、さらでだに風波高かるべきを豫報されて居る東洋の海上に、果して如何なる慘禍が見舞ふものであるか、想像したゞけでも傷心せざるを得ないのであります。

世には　軍備は平和の保證なり』と云ふ言葉があり、それが亦眞理を

なして居るのも事實でありますが、一面には『軍備は平和を擁護す』と云ふ言葉が眞理をなすのも事實であります。

他國の侵略と挑戰とを防止するための止むを得ざる軍備なれば、それが相對的に强大でありましても平和を保護するの軍備と申すことは出來ますが、他民族を壓迫し、その上に自國の繁榮を樹てんとする軍備ならば、それが如何なる美辭麗句に飾られて居つても侵略を目的とする軍備であり、平和を擾亂する軍備でなくてなんでありませう。

軍艦威臨丸が、開國日本の姿を乘せてサンフランシスコに航し、世界の海に登場致しましてから七十年、其の間に日本海軍の軍備は常に平和を保證するために建設され、成長して參りました、日清戰爭以前の三景艦（松島、嚴島、橋立、四、二七八噸、齊十二吋砲一門、四・七吋砲十一門、速力十六節）や、日露戰爭前の富士、八島兩戰艦の建造、或はワシントン會議當時の八八艦隊計畫など何れも外夷の脅威と、國土防衛の戰爭に備へんが爲のものでありました。

現在を經て將來に亘る日本海軍の軍備も、亦此の精神と目的とより逸脫するものではないでせう、されども七十餘年の歲月が世界文明を發達せしめ、幾多の國家を消長せしめ、各自國家の環境を變遷せしめましたやうに、國防のための軍備或は自衛のための戰爭形態が著しく變化してゐる一事は注目すべきであります。

今迄の我が國防は自國に在つて守れば足りたかも知れません、けれども將來の日本はアジアの平和と政策とを確保する爲に、進んで敵を破る攻勢的防禦の體制を備へる必要があるのであります。

一面日本海軍が、今日世界を吹靡ふ軍擴の嵐の下に在つて敢然之に對處すると云ふことは、國家防備の重大責務を果す以外に、國家國民の飛躍的發展とアジア民族相互の福祉を招來する上に、絶大なる礎因をなすものである點を知らねばなりません、然も此の信條の下に行はるゝ我がアジア政策は、なにも今に始つたものではありません。

日本が亞細亞の安定勢力となつて、東洋平和を維持し、日本民族自身の繁榮は勿論、東洋諸民族の繁榮を計りそれを使命と致しましたのは遠く千年の昔に始ります。

日本が東亞の安定勢力となると云ふ意味は、東洋平和を確保し維持するために、日本が主體となつて東洋民族と共にその責任を果すと云ふことであります、若し東洋民族にして此の使命を認識せず、又覺醒しない場合は、日本は獨力を以ても之を敢行實現する決意を有つと云ふことであります、故に第三國が利己的打算的政策を以て、東亞全局の平和と秩序の維持とを無視する行動を執り、又如何なる名目にせよ、手段方法にせよ、我が不動の國策に反對し或は敵を援助するものがありましたならば、それは直に以て東洋平和を脅威し、秩序を擾亂するものとして斷乎排擊すべきはむしろ當然でなければなりません。

今次事變は素より、日清、日露の聖戰役も、滿洲、上海事變に關聯する國際聯盟との對立も皆此の決意の現れに他ならないのであります。

今次事變の原因や目的に就いては既に述べましたから茲に繰返す要はありませんけれども、わが國が此の戰爭を以て東洋平和を確立する聖戰なりとするに反し、列强は依然として國際條約違反なりとして非難を續

け、今事變に對する見解が、故意か不故意か終始相容れざる懸隔があることは寔に遺憾であります。

凡そ國家間に相容れざる主張がありますとき、之を解決するには一方の威嚇に依る他方の屈伏か、然らざれば戰爭に待つ以外他に道はないのであります、然も此の解決はその主張の是非邪正を解決するものではなく、その國家が有つ實力の强弱を解決するものであります。

國際間の道義觀が斯くの如しとするならば、國家の主張を貫徹し、國策を遂行するものは實力でありまして、此の實力を備へることこそ、兵聖孫子の所謂『戰はずして人の兵を屈するは善の善なるもの』に相當し『軍備は戰爭より安價なり』と申すことが出來るのであります。

再説致します、帝國海軍は、東洋政策遂行の爲に、亞細亞永遠の平和を確保する爲に、世界の如何なる海軍と戰つても勝利を確信し得る實力を備へた海軍としなければなりません。

さもないと今次聖戰の赫々たる戰果も、幾万の忠勇が血を以て購つた亞細亞大陸の權益も、夢幻泡沫の如く消え去り喪ひ終る時が來るでありませう。

斯くの如きは獨り日本人の不幸であるのみならず、亞細亞民族全體の不幸をも招くに至るのでありまして、日本の勃興に依つてやうやく解放の途に就かんとしてゐる十餘億の有色人種は、未來永劫に日の目を見ることが出來なくなり、白人の揮ふ鐵鞭の下に泣かねばならぬ運命に置かれるのであります、假にも亞細亞の盟主であり、有色人種全體の運命を決すべき重大使命と責任とを双肩に懸けられてゐる光榮を想起するならば、日本人たるもの、今ぞ不斷の決意を披瀝し、聖なる偉業達成の爲に奮鬪せねばなりません。

今日の戰爭は兵士對兵士の戰爭ではなく、國民對國民の戰爭であります、一兵の亂れることに依つて一軍の敗因を來すことがあるとするならば、國民の一人が亂れることに依つて國家の消長にも關する大事が起らぬとは斷言出來ないところであります、戰爭半にして國民の志向が亂れ財力が續かなかつたり、耐久力を失つたり致しますと、最早戰爭は敗けたも同樣であります。

然し易く冷め易い火山質的國民の長所も短所も、日本を取卷く列强は悉く承知して居り、日本及び日本國民の疲勞をこそ、彼等が乘ずべき機會として待ち狙ふところでありますから、今後の戰爭が何程永きに亘りましても、疲れないだけの準備と覺悟を成すのが刻下の急務であり、また勝利を占むる要諦であります。

日本國民全部が同心一體となつて、時局の重大性を認識し、如何なる事態にも即應し得る軍備を確立し、三千年以來の傳統的日本精神に依つて、國民の恒久的團結が成り、國家資源の開發も、產業貿易の振興も、軍事工業の發達も、或は國內物資の統制に、國民生活の節約に擧國一致以て當る覺悟を定め、政治的にも經濟的にも何等缺くるところが無いならば、今次事變は勿論のこと、列强の軍擴も、來らんとする目前の危機も、何ぞ怖るゝに足りませう。

日本帝國に授つて居る萬邦無比の國家的地位と大元帥陛下の率ゐ給ふ忠勇武烈な陸海空軍と、天孫民族の脈絡に鳴る血汐の色の日の御旗に

團結した國民同胞とが、腰を定めていざ起ち上つたとなりますと今迄歐人の手に綴られ來つた不合理な世界史を、我等の手に依つて根底から書直すやうなことも、やつて出來ないことはありますまい、亦それ位の意氣は持つてゐなければなりません。

戰鬪の事は戰場を馳驅する將士に一任し、軍備のことは專門の當局に委せ、國民は國民の專門とする各自の業務に意力を傾注し、國力の充實と銃後の護りに就けばよろしい、それが結局は軍民一致、國民協力の實を擧げることになるのであります。戰場で銃を執り、砲の引金を握るのは兵士の任務でありますが、その背後に在つて彈丸を作り、糧食を供給しますのは國民の任務であります、戰場を馳驅して敵の死命を制するのは戰場將士に命ぜられた役目でありますが、祖國に在つて農家が鍬を執り、商家が算盤を手にし、工場でハンマーを揮ひ、事務室でペンを握り各人が各自の業務に精勵して銃後の完璧を期するのは、國民全體に命ぜられた重大な役目であります、戰爭に勝つのが軍人の責務であるならば戰爭に必要な軍備と國力とを充實せしめるのは國民の成すべき實務でなければなりません。

要するに、今日世界を滔々として奔流する軍備擴張の狀勢は如何にするも之を阻止し、之を回避せしむる手段や方策はないのであります、果して然るとするならば、我々日本國民に殘された唯一の方策は、如何にして此の軍擴の奔流を安全に乘切るかと云ふ問題を解決する一事であります、然も此の時勢の奔流を乘切り、之を美事に解決する原動力は、一に國民の熱烈なる愛國心と、烈々たる國民的氣魄より湧出る精神力に他ならぬものでありまして、金力や資源や工業力等は尠くも躍進日本の國力に於ては、副次的の重要さをもつに過ぎないと申すことも出來ませう若し之に不可解な方は獨伊兩國今日の勃興と、我が國自らの躍進過程を振返つてご覽下さい。

此の國民の責務が完全に果されて居る限り、我々の軍部は常勝不敗の信念を以て事に處し、責務を全うして吳れるでありませう。

來る可き重大な危機に臨むに際し、同胞各位へ衷心希ふところは、小疑に惑はず、小智を弄せず、機運の大局を達觀して、各々職分に應じ高下を論せず、畢生の心力を竭くして以て皇國興隆の宏圖を翼成せられんことであります。

【完】

國難「大好」戰必亡、
天下雖「安忘」戰必危。

莊子

兵者國之大事、死生之地、存亡之道也。
不可不察也。

孫子

昭和三十年三月一日 印刷
昭和三十年三月二日 第一版納本
昭和三十年三月二十日 第二版行
昭和三十年三月二十日 第三版行
昭和三十年三月二十日 第四版行
昭和三十年三月二十日 第五版行
昭和三十年四月一日 第六版行
昭和四十年四月二日 第七版行
昭和四十年四月三日 第八版行
昭和四十年四月四日 第九版行

軍擴の嵐【完】

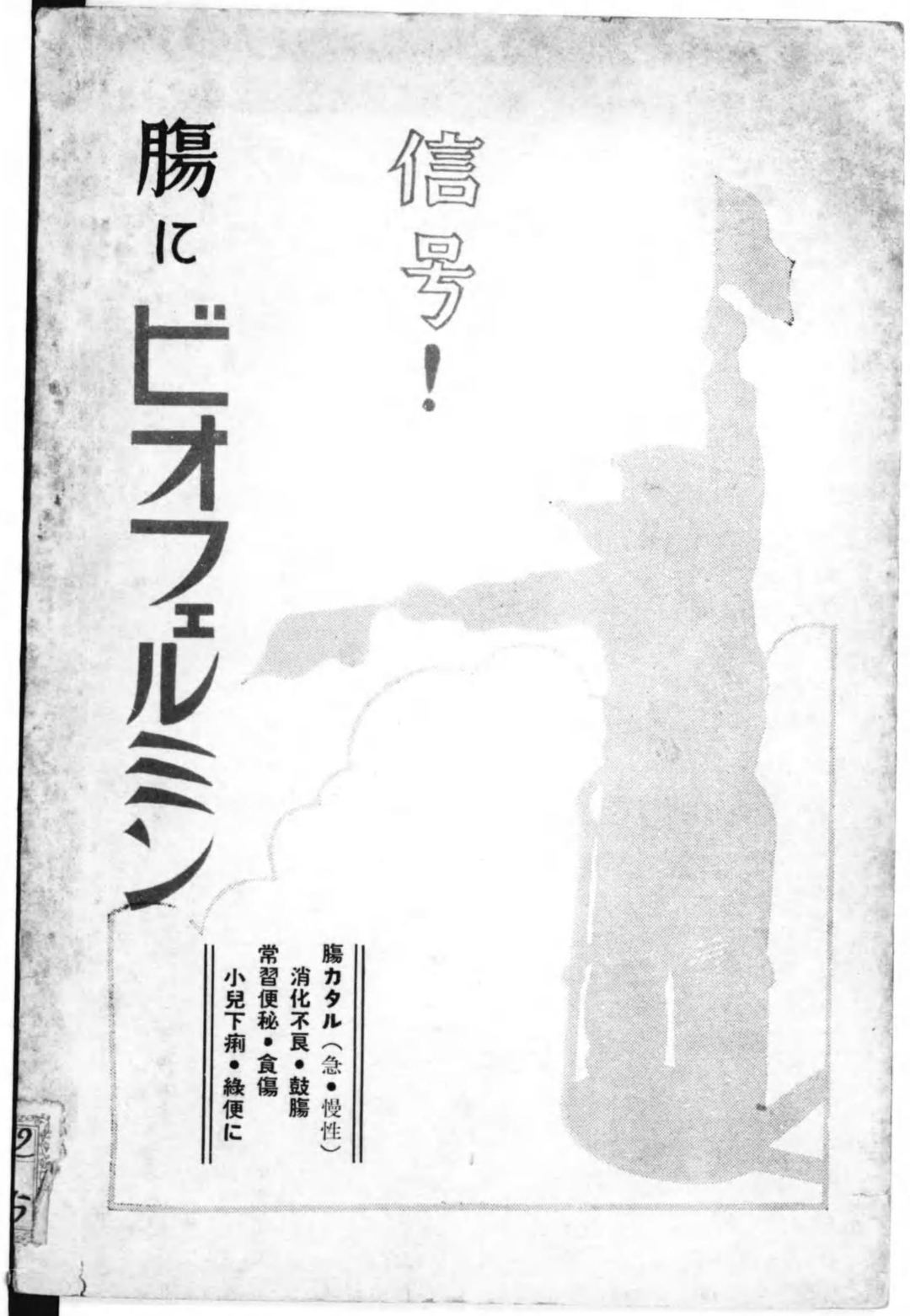
（非賣品）

編輯兼發行者 檜山和一
神戸市神戸區下山手通三丁目六五ノ三四

印刷人 藤井孝三
神戸市葺合區八幡通四丁目一七一

印刷所 藤井印刷所
神戸市葺合區八幡通四丁目一七一
電話葺合㉚二六七五番

發行所 社團法人 海軍協會兵庫縣支部
神戸市神戸區北長狹通四丁目
電話葺合②六〇八〇番
振替口座神戸一四五七八番
（圖書刊行係專用）

392
345

終